

スーパー戦隊このすば フォース

伊勢村誠三

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球の平和と人々の平和を守り続けて来た伝説のヒーロー、スーパー戦隊。

その力を受け継いだのは、とんでもない奴らだった！

1つ、世界掌握を目論む悪の軍団魔王軍！

1つ、魔王軍に反旗を翻した8人の冒険者達！

世界に散らばったレンジャーキーを探して！

またある時はお互いのレンジャーキーを巡って！

この世狭しと暴れてまくる！

そして伝説のスーパー戦隊にゴークイチェンジ！

てな感じのこのすば×スーパージョウのSSです。
お楽しみ下さい。

目次

デカブレイク全開！

1

転生！俺！

5

剣客現る！

29

この水の女神による解説を！

45

シンケン勝負の邪魔する奴は！

49

少女と賞金首

59

ここで会ったが1000年目！

73

冒険スタートアップ！

84

爆裂！中二娘！

94

翼の覚悟

108

ホットミルクとマツカラン

125

貧乏店主と冒険者

136

このトラブルメーカーな女神と答え合わせを！

150

このDMクルセイダーと魔王軍撃退を！

157

この銀髪盗賊からスキル伝授を！

170

空飛ぶキャベツ狩り

184

単独任務と女神の危機

194

魔剣の男

212

新拠点と呪いのシャワシャワ

224

ワニと浄化とアトラクシオン

235

炎のコンドル

247

1日1爆裂とデュエルポンド

263

外道侍、現る

271

鬼ごっこしましょう

281

激突！レッドVSレッド！

293

極付派手侍

300

嵐の後の静けさ

309

その男、魔王につき

315

こんなものか？

331

宇宙海賊現る！

345

ド派手に行くぜ！

356

最終回直前 and 劇場版制作決定スベ

シャル

367

海賊合体！ハリケンゴーカイオー！

375

デカブレイク全開！

1

「はあ……はあ！」

遂に最後の雑兵を倒し、残った二人が対峙した。

「お、おのれ！レンジャーめ！」

どんなに時間も世界も超えても邪魔をするか！」

燃え盛る炎に焼かれる村。

その中央の広場で唯一立っている二つの影。

1つは白に金と青のラインの入った戦士、デカブレイク。

もう一つは角の生えた骸骨のような姿の怪人、エンペラーブルーム！

「はっ！なんだその勘違い。」

自意識過剰も程々にしろよ片方角。」

「なんだと!？」

デカブレイクは左手に装備された正拳変身ブレスロットルのレバーを捻りながら構えた。

「レンジャーが邪魔するんじゃない！」

俺みたいな理不尽な一択しか押し付けられない悪に異を唱える者が邪魔をするんだ！
たとえ何度踏んずけられても！」

「うっ！」

「心が折れようとお前の前に立ちはだかつて勝つ！」

これ以上無い程エネルギーの漲る左拳を握り締め、

高らかに告げる！

「たとえどんな姿で戦おうと！どんな力を使おうと！」

お前の止めるのは特捜戦隊デカレンジャーの！

いや、全てのスーパージョーの同志！

恐怖の闇をブチ破る正義のヒーローだ！

そして俺は！少なくとも今この瞬間だけはデカレンジャー6人目の戦士、夜明けの刑
事デカブレイクだ！

覚えておけ！」

「がんばれー！」

「デカブレイクー！」

声援を受け、ありつたけを乗せた拳が炸裂する！

まず一発!

「ぐはああ!」

「超高速拳!」

更にもう一発!二発!三発!

「スーパードライツニングフィストオオオオオ!!」

「うわああああ!おのれえええええ!!!」

そこからはもう何発放たれたか分からない。

高速を越えた乱打を受け、燃える瓦礫を突き破りながら吹っ飛んでいったエンペラーブルームは爆裂四散して今日最大の火柱を上げた。

「か、勝った。勝てた?俺が?」

信じられないと言ったふうに何度も自分の手を眺めるデカブレイク。

するとブルームが吹っ飛んでいった方向から何か飛んでくるのが見えた。

それは彼が変身に使ったアイテムと同じ、レンジャーの姿を模った鍵だった。

ダークブルーと黒にレッドのラインが走り胸にローマ数字で100とある戦士は「デカマスタアのレンジャーキー?」

で事は俺本当に……え?」

グラン!と視界が、というか身体全体が倒れて仰向けに星を見上げる感じになる。

(だ、駄目だ限界だ……火の手が回ってるからさっさと逃げなきゃなの………チク
シヨ……)

俺は何でこんな所にいるんだっけ？

そんな小さな疑問が彼に走馬灯を見せる。

確か彼がここに居る理由は……

転生！俺！

「七海総一さん^{ななみそういち}」

ようこそ死後の世界へ。

あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。

短い人生でしたが、

あなたのせいは終わってしまっただのです。」

誰かが暴れに暴れた後の様に散らかった部屋で俺は唐突に告げられた。

書類が散らかった床。

それからまばらに星のような光のある壁（？）の部屋。

その中央よりやや左にひっくり返った事務机が有り、

俺は椅子に座らされていた。

その反対側に座る俺の人生終了を告げた女はぱっと見俺より二つ三つ年下の美少女、いや、アイドルなんかでも中々いないような美貌の超美少女だ。

何故か胸ぐらをつかまれたように服が乱れて目には涙をいっぱい溜めて、透き通る

ようなきれいな青髪が乱れた痛々しい姿だった。

「ここは、あの世？」

「はい。」

「で、アンタは案内役？」

「はい。」

「俺は、大学の帰りにおやし狩りやってた不良ども見ちゃって口封じにリンチされて死んだ。それであつてる？」

「はい。」

精一杯威厳を保とうと必死なのだろうが、

ずたずた今にも泣きそう、さつきから震えてると三拍子揃つていてはとてもじゃないが威厳は感じない。

「それで、普通の人には死んだあと二つの選択肢があります。」

まず一つ、よっぽど悪い事してなければ天国に行く。

けどあんまりおすすめはしない。

何故なら肉体を失つて魂だけ行くわけだから話す以外基本何もできないから先に死んだ人間と意味もなくくつつちゃべり続けるぐらいしかない。

「天国って言うか天獄じゃん。」

「でしょ?だから普通の人はもう一つを選ぶ。」

もう一つは赤子になってもう一回人生をやり直す。

こつちも天獄よかマシだが、記憶がりセットされてしまうので実質消滅してるようなもんだ。

「けど、若い魂に限ってもう一つ選択肢が有るんです。」

そのもう一つは、

記憶を引き継ぎ異世界に転生し魔王を倒す事。

魔王。比喻でもなんでもなくドラクエやモンハンに出て来るような魔王がいて、剣と魔法と冒険ととある世界が有るらしいのだ。目の前の案内人によれば。

「その世界で死んだ人たちは、

魔王を怖がって転生したがりません。

だからそのうち赤ちゃんやんが産まれなくなつて滅びちゃうんです。」

「だから生に未練タラタラな若い魂を異世界よせから引つ張つてこようど?」

「はい。肉体と記憶とそのままです。」

そんな移民政策が機能するぐらいには国籍とかいい加減な世界みたいだな。

それなりに危ないだろうがこのまま永遠に彷徨つたり消滅したりするよかマシか。

「けど今私はそれ以上に…あなたに転生してもらわないと困るんですううう!」

「な！」

案内役の女は何処からともなく取り出した書類と朱肉をもつて俺に襲い掛かってきた。

「い、いきなり何を?!」

「お願い!この書類にサインか指紋を押しして!

そのまま平和ボケした魂なんか送つても役に立たないから転生者には強い武器を一個持たせるんだけどそれをマナーの成つてない転生者に200個以上もパクられちゃつたの!」

「な、なんだそれ!?そんな奴転生させようとするなよ!

書類いちじ審査で落とせや!」

「虐待といじめを苦しんで死んださえない変な名前のチンチクリンなんか死因を馬鹿にしたぐらいで切られるとか思わないっじやん!」

「お前のせいだよ!書類審査員の人ごめんさい!

全部この面だけの女のせいでした!」

「今顔だけって言った!

水と癒しの女神を顔だけの女って言った!」

「嘘コケ!チンチクリンの陰キャに不意を突かれるような女神が居るか!

「お前なんか良くて二級天使どまりだろ!？」

「嘘じゃないわよ！」

後輩のエリスより信者の数は少ないけどアクシズ教の女神よ！

水と癒しの神アクア様よおー!!」

ぎゃーぎゃーやりながらも俺はこの自称女神に巧みに腕を掴まれ右手の薬指の指紋を書類に押ししてしまった。

その瞬間!部屋に散らばった書類の下から五つの人形が光りを帯びて俺のもとに飛んできた。

「レンジャーキー!そっかあんだだけ派手に暴れば落ちて残ったキーがこれぐらいあつてもいいわよね。」

人形は変形して鍵の形に代わると、俺の上着のポケットに収まり、帯びていた光だけが集まり、奇妙な形のケータイ電話になった。

「なんじゃこりゃ?」

「それはモバイレーツ。」

あなたに託したハリケンブルー、アバレブラック、

デカブレイク、マジイエロー、マジシャインの力を引き出すために必要なアイテム、あなたは今から行く世界では神器に該当するアイテムです。」

さつきまでのギャン泣きモードはどこへやら、

今更威厳を主張するように自称女神は静かに告げる。

「さあ、転生者よ！願わくば、数多の勇者候補の中から、

あなたが魔王を打ち倒す事を祈っています。

……………さあ、旅立ちなさい！」

「は!?なんだ周りが光って!まさかホントに転生!?

嘘だろおいふざけ」

その瞬間、俺は一層強い光に包まれ

「ゴ—!ゴ、ゴ—!」

「ん?なんだお前はいつからそこに居た?」

気が付けばおかしな集団に村が全滅させられる瞬間に立ち会っていた。

2

デカブレイクと呼ばれる姿になったソーイチの奇妙な兜を外す。

あれだけ殴られて蹴られたにもかかわらず綺麗な顔だ。

そんなことを思いながら黄色いジャケットに白いヘアバンドの彼女、ルカは濡らした手ぬぐいで彼の顔を拭いてやった。

「姉ちゃん!水汲んで来たよー!」

バタバタと亜麻色の髪の毛勝りな女の子が同じ髪色で赤いチョッキの弟のとバケツいっぱいの水を汲んで戻って来た。

「ありがとう。」

「どーいたしまして。」

「ねえお姉ちゃん。デカブレイクまだ起きないの?」

「うん全然まだ。やっぱ疲れちゃってるみたい。」

「そうだよね。あんな凄いパンチ使ったらへ口へ口だよね。」

「魔法みたいに早かったもん!」

口々にデカブレイクを称賛する姉弟。

そりやそうだ。この子らにとってソーイチは命の恩人で親の敵を討ってくれた恩人なんだから。

それは昨晚のこと、ルカはアクセルという駆け出し冒険者の街を目指して旅をしていて、その日限界まで進んだ彼女はこのファミーユという村に泊まった。

小さな林業の村で、危険なモンスターや蛮族の気配もない平和な村だ。

けど誰もが寝静まった時、奴らはやって来た。

魔王軍。この世を手中に収めんとする悪の軍団。

しかもどういった訳かここ数年でどこの魔法体系でも造れないような怪物を生み出し、それを行動隊長として各地に放ち、破壊と略奪の限りを尽くしている。

ルカの祖国もその被害にあい滅ぼされていた。

「皆逃げて！魔王軍よ！」

そう言つて回つたが遅かつた。

ブルームと名乗つた片方角の骸骨怪人は女子供だろうと容赦なく殺し、村に火を放つた。

「一人も逃がすな！ひつ捕らえろ！」

ルカは捕まらないことで有名な盗賊だつた。

職業的な意味ではなく、悪徳貴族や魔王軍を相手に盗みを繰り返し魔王軍から1300000ガギンの賞金を懸けられるほどだつた。

しかし世話になつた宿屋の幼い子供を置いて逃げるほど非道ではないルカは2人を見捨てられず、三人で捕まつてしまったのだ。

「ほう、賞金首のコソ泥か。」

こんなガキ2人見捨てられない甘ちゃんだつたとは。

我が軍はこんなのにてこずつていたのか？ん？」

何かに気付いたブルームが右を向く。

つられてそっちを見ると呆けた顔をした自分より一つか二つ年上の青年がいつの間にか音もなくそこに居た。

「なんだお前はいつからそこに居た？」

ブルームに声を掛けられ我に返る青年。

「うわあ!え?ば、化け物!」

「化け物ではない!俺はブルーム!魔王軍行動隊長だ!」

「魔王軍!?!思ってたのと違うなあ……もつとデュラハンとか魔女とかがやつてるイメー
ジだったな。」

「それは幹部のベルディアやウイズだ。」

「あー、そういう感じ?」

「ま、とにかく。見られたからには死ねえ!」

「うお!」

振り下ろされた戦斧を避け、ポケットから何か白い人形のようなものを取り出す!

「あんの自称女神!

いきなり戦いになるならもつとしつかりチュートリアルしろや!」

そう言つて何度も奇妙な折り畳み式の何かと人形を見比べる。

「なに?そのモーファーにレンジャーキー……面白!

おい貴様！名を何という？」

「え？ 七海、総……………」

ナナミ・ソーイチ。耳慣れない名前だった。

黒い髪に茶色い目といい、異邦人だろうか？

「ナナミソーイチ。

それを使ってさつさとレンジャーにモーフインしろ！

直々に叩き潰してやる！」

「レンジャーキー…鍵？て事は……………」

人形を折りたたむように変形させるとブルームがモーフアールと呼んだアイテムにそれを差し込み

「っ！あ、頭に、なんか……………」

え、エマーゼンシ緊急出動、デカブレイク？」

〈デーツカレンジャー！〉

白銀の楯のような光の塊に覆われたソーイチは白いぴつちりと体に張り付いた服に奇妙な兜に覆われた姿に変身した。

「なにあれ!!」

「すっげー！」

「なにあの神器?」

「これが、レンジャー?」

自分で変身したはずのソーイチ含めてブルーム以外の全員が驚く。

「やはりその姿になったかオメガレンジャー。」

いや、デカブレイクと呼ぶべきか。」

「デカブレイク?」

「ああ。では復讐も兼ねて死ね!レンジャー!」

「うわ!あつぶな!」

ブルームに続いて雑兵のゴーミンもデカブレイクになったソーイチに向かっていった。

あつと言う間に人波に消えるデカブレイク。

それから時折人波の中心からゴーミンが弧を描いてぶつ飛んでいく。

そして人波が晴れるころには

「が、あああ……か、身体中が痛い……。」

膝を付き肩で息をするデカブレイクの姿がいた。

「ーッ!」

「ああ!」

「そんな…」

ゴームインの数は半分も減っていない。

しかもブルームもまだ健在だ。

「こんなものか？」

対して期待もしていなかったが雑魚だな。」

「うるせええ…こちとらぶつつけ本番なんだよ！」

「ほう？にしてはやった方が精々あの世で自慢しろ！」

振り下ろされるブルームの戦斧。

思わず目をつぶる三人。しかし聞こえたのは

「なに!？」

ブルームの驚きの声と

「二回も死んでたまるか！」

ゴームインの火を噴く武器で戦斧を受け止めたデカブレイクだった！

「デカブレイク！」

「ぶっ飛べ！」

ゼロ距離で火をブルームに浴びせ、周囲の兵隊が驚いてる間にこっちに駆け寄ると

「退けえ！」

私たちを捕まえていたゴーミンを殴り飛ばすと手を引いて森の方に逃げ込んだ!

「何をしている! 追え!」

ブルームに言われてゴーミンが入ってくる。

「デカブレイク! こっち!」

弟君案内で森を進んでいき

そこそこ深い茂みの中に隠れた。

「大丈夫かしら?」

「流石に森ごと焼いて炙り出すとかはいきなりやらないだろうが、ここもそんなに安全じゃねえな。」

どうしたもんかと頭をひねる4人。

「デカブレイクはアイツらをやっつけられないの?」

「どうだろ?」 対一なら勝負にはなるだろうけど、

さつきみたいに袋叩きにされたらジリ貧だ。くそ!

1日に2回もリンチにあつて死ぬとか勘弁だぞ?」

「じゃあどうする?」

アタシも腕っ節に自信があるわけじゃないわよ?」

俺もお前に戦わせるつもりはないよと、返すソーイチ。

「じゃあこうしよう。姉ちゃん。

俺が適当にゴーミンを倒しながら逃げ回るからゴーミンが薄くなったところを2人連れて逃げろ。」

「アンタはどうすんの？」

「このスーツは見かけより丈夫だ。

中身は打ち身とか痣だらけだけど骨やつたり内臓壊れたりはしてないからあのバケツ頭ぐらいならどうにかなる。」

「無事でね。」

そう言っただけは分かれた。

「おいブリキバケツ！お前らの獲物はここだぞ！」

廃品回収に出して貰いたい奴から掛かってこい！」

デカブレイクがゴーミンを殴打する音がする。

それとは反対の方向に向かって走った。

音がだんだん遠ざかっていき、ようやく出口が見えたとき

「見つけた！」

ブルームが立ちふさがった。

「な！何でアンタが!？」

「一番強い駒の使い方は2つ。

最後まで隠すか、派手に使って囮にするか。

アイツがあれだけ派手に暴れているという事は非力なお前らは逃げに徹した。」
読まれていた。背後から来たゴーミンに再び捕まる。

「すぐには殺さん。

レンジャーの死をその目に焼き付けてやる。」

3

「オラ、こんなもんか!」

三体目から数えるのをやめて派手に暴れることに専念しながら突き進む!

いつの間にか村の広場に出ていた。

構わない。

体力の続く限りなら一度に一定数以上来られなければどれだけでも相手にできる自信があつた。

今自分はそれだけの力を纏っている。

「さあ!次はどうだ!?!」

「そこまでだ!」

村の入り口の方から声がする。

振り向くとそこにはブルームと、再び捕まってしまったあの姉ちゃん達がいた。

「ッ！」

「さて、スパーリングもすんで身体も温まってきた頃だろうし。一つ俺に殺される！レ
ンジャーー！」

「……その後に、その子達も殺す気か？」

「ああ。もちろん。」

平然と言い放つブルームに、俺は自然と頭を下げていた。

「なんのつもりだ？」

「頼む！俺はどうなってもいい！だからその子たちは！」

「アンタ本気で言ってるの!？」

地面につけた俺のメットに石が当たる。

ブルームがやったんじゃない。あの姉ちゃんだ。

「この状態をどうにか出来るのはアンタだけなのよ!？」

もつとしゃんとしなさいよ！頑張って立ちなさいよ！」

「立ってデカブレイク！」

「お願い頑張って！」

無理だ。と俺は思った。

俺なんて変な悪い自称女神に無理やり指紋押されて適当に尻拭いさせられてるだけのそこら辺に居た大学生Aだよ?

デカブレイクだかオメガレンジャーだか知らないけどそんな本物のヒーローに今すぐなれっただって無理だよ!

他をあたつてくれよ!

もつと覚悟とか諦めとかついでる奴をさ!

そこまで思つて自分で気付いた。

この世界を救え得るのは転生者だけなんじゃないかと。

(冷静になってみりゃそんなすごい勇者が魔王に挑むんだつたら転生者要らねえよな? そんなヒーローがないから他所から凄い力持った奴を送り付けてるわけだし。)

という事は今あの三人にとってヒーローは俺しか、いないのか?

「どうした? 無力さにも打ちひしがれているのか?」

「いや。痛感したのは、無責任だ!」

「ほう?」

「俺は、不細工で出来損ないな笑っちゃうようなパチモンかもしれないけど今だけは!」
頭に浮かんだ最高にかっこいいポーズを取りながら名乗る!

「無法な悪を迎え撃ち！恐怖の闇をぶち破る！

夜明けの刑事！デカブレイク！」

「ははははは！そう来なくてはな！

ゴーマンども！」

(b g m デカブレイク全開!!)

一斉に放たれるゴーマンの機銃掃射。

俺は左手の正拳変身ブレスロケットルのレバーを捻り、

エネルギーをチャージした拳をふるう！

「な、なに!？」

「ナンセンス！」

俺にはその程度の弾速、止まって見えたぜ！」

左手でキャッチした弾をその場に捨てる。

「ば、ばかな!？」

「すっげー！」

「いいぞー！」

歓声に手を振り、俺は一気に駆け出す。

「今の俺は脳細胞から体の隅までトツプギアだ！」

興奮しきって豆腐もまともに持てないくらいだ。

絶望まで振り切るぜ!」

再びレバーを捻り、三人を捕まえたゴーミンに飛び切りのをかます!

「剛力拳! パワーフィスト!」

一瞬体が浮いたゴーミンが漫画みたいにぶっ飛んでいった。

驚いて他の二人が手を離れたすきに三人を下がらせる。

「離れてて! こっから先には、絶対行かせないから!」

振り返らずとも三人が頷いたのがわかる。

「さあ、行くぞおおお!」

向かってくるゴーミンを残らず迎え撃つ!

「電撃拳! エレクトロフィスト!」

高圧電流のパンチで焼き殺し!

「竜巻拳! トルネードフィスト!」

暴風で空の彼方にぶっ飛ばす!

「さあ! もうお前を守るゴーミンはいないぞ!」

「ふん! あんな雑兵いなくとも!」

「そうかよ! じゃあくらえ!

灼熱拳！ファイヤーフィスト！」

フェイントをかけてからの炎の拳を顔面に叩き込む！

「ぐわああああ！か、顔が！

顔が焼けるううう！」

「じゃあこれだ！噴射拳！インパルスフィスト！」

火傷を払う様に水圧光線を浴びせ、視界が戻らないうちに全力の拳を叩き込んで叩き込んで叩き込む！

「が、がああああ！」

はあ……はあ……お、おのれ！レンジャーめ！

どんなに時間も世界も超えても邪魔をするか！」

グロッキーになりながら吠えるエンペラーブルーム。

「はっ！なんだその勘違い。」

自意識過剰も程々にしろよ片方角。」

「なんだと!?!」

俺はレバーを捻りながら構えた。

そして拳と、答えを叩き込む！

「レンジャーが邪魔するんじゃない！」

俺みたいな理不尽な一択しか押し付けられない悪に異を唱える者が邪魔をするんだ!

たとえ何度踏んづけられても!」

「うっ!」

「心が折れようとお前の前に立ちはだかって勝つ!」

これ以上無い程エネルギーの漲る左拳を握り締め、
死刑宣告代わりに告げる。

「たとえどんな姿で戦おうと!どんな力を使おうと!

お前の止めるのは特捜戦隊デカレンジャーの!

いや、全てのスーパー戦隊の同志!

恐怖の闇をブチ破る正義のヒーローだ!

そして俺は!重ねて言う!

少なくとも今この瞬間だけはデカレンジャー6人目の戦士、夜明けの刑事デカブレイ
クダ!

覚えておけ!」

「がんばれー!」

「デカブレイクー!」

逃げろと言ったのに戻って来たのか。だが今はその声援が有難い。

ありつたけを乗せた拳を撃ち込める！

まず一発！

「ぐはああ！」

「超高速拳！」

更にもう一発！二発！三発！

「スーパーライトニングファイトオオオオオオ！！！」

「うわあああああ！おのれええええええええええ！！！」

そこからはもう何発撃ち込んだか分からない。

高速を越えた乱打を受け、燃える瓦礫を突き破りながら吹っ飛んでいったエンペラーブルームは爆裂四散して今日最大の火柱を上げた。

「か、勝った。勝てた？俺が？」

信じられないと言ったふうにも何度も自分の手を眺める。

するとブルームが吹っ飛んでいった方向から何かが飛んでくるのが見えた。

それは俺が変身に使ったアイテムと同じ、

レンジャーの姿を模った鍵だった。

ダークブルーと黒にレッドのラインが走り胸にローマ数字で100とある戦士は

「デカマスターのレンジャーキー？」

「で事は俺本当に……………」

4

「う……………」

「あ、起きた!」

「デカブレイク!」

「……………こは?」

「まだ星が見えるからには夜なんだろうが、あの村はどうなった?」
「村はまだ火が上ってて近寄れなかったから川の近くまで運んだの。」

「えーつと、ナナミソーイチでいいのよね?」

「総一でいい。上の名前は呼ばれ慣れなくてな。」

「そう。じゃあ宜しくねソーイチ。」

「ああ。そう言う姉ちゃんの名前は?」

「私はルカ。ケチなコソ泥だよ。」

「そっちの2人はリサとケン。」

「ありがとうデカブレイク!」

「よろしくね!」

「ああ。よろしく。」

後にこの日を俺はこう回想する。

この日こそこの世界の海賊戦隊ゴーカイジャー始まりの日だと。

劍客現る!

1

「俺が勝つたら、俺の子分になってもらう。」

青いマントの劍士、

ジョーが片刃の愛刀を構えながら言う。

対峙する俺、七海総一は黒い鞆の細身の両刃劍を構える。

「俺が勝つたらどうしてくれんだ?」

「お前の魔王討伐の旅を手伝ってやる。」

結局同じじゃんか。したたかな奴め。

そう思いながらも俺は鞆も順手に持ち二刀構える。

それを見てニヤリ、とするとジョーも背負っていた鞆を劍に見立てて構えた。

(おいおい。こいつが強いのは知ってたけど二刀流もいけるクチかよ。)

「それじゃあ、行くぞ!」

何でこんなことになってしまったのか。

それは戻りに戻ってルカと出会ったあの日に戻らなくてはならない。

2

あの後一雨降つてくれたおかげで消化された村を俺たちは探索した。

残念ながら生存者はいなかった。

俺たちは火葬する訳にはいかなかったので土葬で村の人々を吊い今後について話し合った。

「私はここから半年ぐらいかかっていけるアクセルつて街に向かつてるの。」

その先にこの子たちの親戚の家もあるみたいだから、

そのついでに。貴方はどうするの？」

正直返答に困る。魔王を倒すために戦うべき、

ではあるんだが行動隊長程度にてこずる俺にどうこうできるとは思えん。

それに異世界転生とか話すわけにいかない俺は

「それがあいつらに頭バカス力殴られたせいで記憶が結構とんで、魔王を倒そうとしてたこととか、

昔何やってたとかは思い出せるんだけど、国を出てから今までの記憶がすっぱり抜けてて思い出せねえんだ。」

て事にしといた。そうしとけば取り合えずこの世界の常識とかで頓珍漢なこと言っ

でも記憶喪失ってことでどうにかなる。

「ソーイチ記憶喪失?」

「かつこいいい!」

「かつこいいいか?」

「……ごめん。」

「いや、ルカが謝る事じゃねーよ。

まあ、あれだったら俺もちゃんとした身分とか欲しいし、冒険者目指そうかな?」

「本当!?じゃあ今から同業者ね!」

「おう!よろしく!」

そして次に問題になったのは俺の服だ。

今の俺の格好は赤いジャケットに青のジーパン。

緑の運動靴にシヨッキングピンクのタイマーウオッチ。

そして腰に黄色いストラップと聞いてっつきり現代日本な恰好なのだ。

「じゃあこの村から服とか持ってって良いよ!」

「マジか? いいのか?」

「俺らの命の恩人だもん!」

そんな姉弟の好意で焼け残ったのの中から

灰色のズボンに黒いショートブーツ。

白い長そでのYシャツに黒のベスト。

最後に赤い裾の長い上着といったスタイルに着替える。

「おー！」

「冒険者って言うか荒くれ者みたい！」

「それ褒めてないだろ？」

それから持つてくものを選び、最後に墓に一礼してから俺らは村を後にした。

流石に子供らは泣いてたな。

「そう言えばルカ。お前腰に黒鞆の剣下げてるけど昨日持つてたか？」

「これ？……故郷を魔王軍に滅ぼされた夜に、

貴族の蔵から持つてきたの。

私の腕力じゃ扱いにくくてね。

なんならボディガードの代金としてあげようか？」

「いいのか？使わないにしたって売れば結構いい金になるんじゃないのか？」

「いいの。故郷から持つて来た物だから、

色々と思い出しちゃってさ。」

「……そっか。」

それから剣を受け取った俺とルカの旅が始まった。

まず子供たちを叔父夫婦の家まで送り届け、アクセルを目指した。その道は困難を極めた。

最初の一週間。子供らの親戚の村までは安全だったが、そこを出た先は地獄だった。

まず俺は魔王軍に2000000ザギン（日本円でだいたい六百万）の賞金首にされちまったらしく、それ狙いの荒くれ者や、

「見つけたぞ賞金首ども！」

この魔王軍行動隊長のモヤイダ様が相手だ！」

魔王軍の行動隊長だったり

「なんだあのでっかいカエル！」

この世界のカエルってあんなにデカいの!？」

「あれはジャイアントトード！」

打撃効かないだけでそんな強さないから安心して！」

主食は人間とかヤギだけど！」

「何一つ安心できねえ！」

モンスターだったり。

三週間でもうへろへろ。その間に二回も魔王軍行動隊長に出くわして戦い、新たにデカレットとゴープピンクのレンジャーキーを入手した。

「くそ！なんでもよりにもよつて二日に一回ペースで敵と出くわすんだよ！」

魔王軍に例によつてボコボコにされた俺はルカに貫つた変容の薬をかつくらう。

取り合えず傷は塞がるが、痛みは鈍く残る。

それでも動けなくなるよりいいが。

「仕方ないわよ。」

この道アクセルまで一番近い道だけど魔王軍の勢力範囲に近いし街沿いの冒険者ギルドある方の道はだいたい遠回りで一年とか掛かっちゃうもん。」

「マジかよ。」

てか冒険者になるだけならそつちでいいじゃん。」

それは無理。とルカはバツサリ言い切つた。

「私の故郷が滅びる前にね、神託が下つたの。」

「神託？」

「アクセルの街に大いなる水の恵みが現れて魔王を滅ぼすつて。」

「水の恵み、ねえ？」

水と癒しの女神（自称）に無理やり戦いに放り出された身としては信じがたい話だ。

「なに?もしかしてアクシズ教徒嫌いなの?」

「アクエリ教だがポカリ教だか知らんけどアクアって女神は信用できねえ。」

このモバイルレーツとレンジャーキー持たせて俺をこっちに着の身着のまままで放り出した張本人だ。」

「……………!そうなの?てか記憶戻ったの?」

「え?……………少し、な。」

「よかった……………とは言い難いか。そんな記憶だしね。」

「ま、逆恨みの先ぐらいは見つかったけどな。」

そう言つて俺たちは歩き出した。

最初の村を出てから四週間。

そろそろ一月経とうかという今日この頃。

「ダンジョンなんてものまであんのか。」

「初めて見る?」

「ああ。俺の信ぴょう性ゼロの記憶を信じるんなら。」

お宝とか有ったりするの?」

「さあ?まあまあ有名なダンジョンだし、

粗方取り尽くされてんじやない?」

「そっか」

ちよつと残念に思いながらUターンして先を急ごうとした時

「ほう！こんなところで出会おうとは！

賞金首ども！」

「げ！魔王軍！」

一番エンカウントしたくない奴らとエンカウントしてしまった。

「俺はゾドマス！」

お前ら二人まとめてこの剣の錆にしてくれる。」

黒いギンザメみたいな頭のエイリアンみたいな怪人だった。

後ろにはブルームが連れていたほどではないがゴーミンを連れている。

「どうするソーイチ。」

「まともに相手すんのも馬鹿らしい。」

ダンジョンに逃げ込むぞ。」

「それもし迷ったら出られなくなるわよ!？」

「敵もそうなる。」

俺たちはダンジョンに潜った。

敵もそれを追って続々と入ってくる。

「真つ暗でなんも見えないけど!」

「だったらこれだ!爆竜チェンジ!」

〈アアーッバレンジャー!〉

アバレブラックに変身し腰に下げた剣を引き抜き

「ファイヤーインフェルノ!」

刀身を燃やし、松明代わりにする。

「おお!すつごい明るい!」

「逆に言えばゴーマンやモンスターに位置を教えちまう。

そここのところ気を付けろよ?」

「ラジャー!」

その後ダンジョンを進んでいくが、まあ道に迷う迷う!

振り返ったら道が二つになってるぐらいはまだいい方で、

落とし穴や迫る天井とか言ったトラップにモンスターに、

追いかけられてルカとはぐれそうになったり

ゴーマンがモンスターに喰われるところを見ちまったり、散々だ。

それから迷いに迷って時間間隔もなくなってきた

間違いない日付は変わってるはずだ。

「はあ……ルカ、水！」

「もう無いわよ！」

「そう！じゃあ乾パンでもいい！」

「もう全部食べた！」

「あああー！くっそ！」

両ひざと両手をついて倒れる。

いい加減足が棒だし、暗い中戦ってばっかで気がめいつてきた。

「松明ずつと持ちっぱなしで疲れるんだよ！」

しかも例によって俺しか戦ってないし！」

「仕方ないでしょ！剣一本しかないのに変身したらその戦士の武器に変わっちゃうんだから！」

イライラして拳を振り下ろす。

カチャカチャ！と何か小さい物に触れた。砂の付いたそれを拾い上げてみる。

「ボウケンレッドのレンジャーキー！」

「え？嘘?!」

早速キーを取り替えて変身する。

「ボウケンジャー！スタートアップ！」

〈ボー…ッウケンジャー!〉

「熱き冒険者! ボウケンレッド!」

名乗りと決めポーズの後にメットのヘッドライトが白く発光する。

「おお! 光った!」

「松明より良さげね。」

「武器は…銃、いや剣にも変形するのか。」

腰に下げられたサバイバスターをサバイブレードに変形させながら色々と試している。

「これなんだろう?」

スコープショット、と、名前だけは頭に流れ込んで来て分かる装備を手取る。

「先っぽ尖ってるけど何かな?」

「なんか飛び出るとか? えい!」

スイッチを押して暗闇に向かって発射する。

ワイヤーアンカーが飛び出した。

「ゴ!」

「あ、なんか刺さった!」

試しにもう一回スイッチを押すと巻取りが始まり、引つかかっていた何か……小さい

兎型のモンスターにかじりつかれたゴーミンが出て来た。

「はは！大物だな！そら！」

「ゴーーーー！」

部屋の隅に向かって放り投げてやった。

「ゴッ！」

そこにあつた宝箱みたいな箱にぶつかって止まった。

そのゴーミンがこつちに気付いて立ち上がるうとした時。

「ゴ？g」

部屋の隅が急に怪物の口のような形になり

ガブリンチョ！とゴーミンを人のみで食べてしまった。

「……………ソーチ貴方まさか」

「狙ってない！あんなん初めて見た！」

何アレ!?!初見殺し過ぎでしょ!?!こっわ！」

「多分ダンジョンに生息するモンスターで初級冒険者やそれに寄せられてくる他のモンスターを捕食するタイプの奴ね。」

「何それ怖……………それさ、気付いたら俺らモンスターの腹の中に居ましたなんて落ちとかない？」

「一応聞いたことはないけど……出ない?」

「だな。こうゆうのは壁に手を当てながら進んでいくのが定石」

そこまで言ったところでパラパラ、と天井から粉が降ってきた。

「……ルカ。俺は何も触ってない。お前は?」

「私も何もしてない! 貴方じゃないなら誰!」

若干ヒステリックにルカが叫ぶと天所が崩れて来た!

とつさにルカを引き寄せ物陰に潜む。

「えーい出てこい賞金首ども! いらないのか!」

さっきのギンザメ頭がダンジョンの分厚い天井を切り裂いて大穴を開けて俺たちを探しに来ていた。

一番合いたくない奴に出会ってしまったが、あれ?もしかして脱出のチャンス?

そう思った俺はメットのライトを消してスコープショットを構える。

「ちい! ここの外れぐう! な、なんだ! 肩に刺さって」

「よっしやこれ得意かも!」

俺はスイツチをもう一回押してワイヤーを巻き取り、

ギンザメ頭を叩き落とす!

そして今一度ルカを抱えて天井にアンカーを撃って飛び上がる!

「初ダンジョン大脱出成功！」

ルカを抱えたまま飛び降り、空を仰ぐ。

お天道様が一番高い所にあった。

「よし、結果良いレンジャーキーの試運転になったな。」

そう言つてそのまま去ろうとした時

「はあ！」

壁を突き破つてギンザメ頭が戻ってきた。

「コケにしてくれたな賞金首！許さんぞ！」

「は、勝手にダンジョン入つて自爆したただけだろ！」

ギンザメ頭は剣を、俺はハサミ型のボウケンボーを取り出し激突する！

「このー！」

「む！中々やるが槍さばきが甘い！」

「ぐわ！」

吹っ飛ばされケータイ電話型のアイテムを落としてしまうが、拾つてる余裕はない。

「このー！」

「ふん！」

剣とはさみが交差する中、ルカはボウケンレッドが落としたアイテム、アクセルラー

を拾い上げる。

「これ、動く?」

ディスプレイを変形させると銃のような形になった。

「もしかして攻撃できるかも!」

動体視力に自信のあるルカはゾドマスを狙い撃つ。

アクセルラーから発射された紫色の光はゾドマスを照らしただけだった。

しかし戦っていたレッドは気付いた。

ゾドマスの右わき腹に何かがあつてそれに光ろが反応していることに。

「そこだ!」

俺はボウケンボーをそこに押し当て、がっちりと掴むと内蔵された刃を伸ばした!

「ぐうう!こ、このあ!離せ!」

「いいぜ。ほら!」

「う!」

急に離され尻もちをつく格好で落とされるギンザメ頭。

そこに俺は容赦なく剣を閉じたボウケンボーを今さっき作った傷に挟り込む!

「う!おおお!……ああああ!」

「そらあ!」

そしてその奥にあつた光に反応していたそれを引っこ抜く！

「あ、ああ！返せ！」

「レンジャーキー！」

緑色の顔に漢字の『木』とあるレンジャー、シンケングリーン、レンジャーキーだった！

「よっしゃお宝ゲット！ルカ！ずらかるぞ！」

おう！と返事するルカと共に俺は走り去った！

「ま、まてえ！俺の力の源を返せえええ！」

叫ぶゾドマスだがそれで戻って来るわけではない。

「く、くそ！ゴーミンどもはそう簡単に戻って来るとは思えんって戻って来た！なに？ダンジョンの中でレンジャーキーを見つけた？でかした！それを俺に！」

渡されたシンケンゴールドのレンジャーキーを取り込んで回復するゾドマス。

「よーし！ゴーミンどもの結集を待つて賞金首どもを追う！各員準備を進めておけ！」

この水の女神による解説を！

1

あー、暇ね。

今日のノルマは終わったしいいお酒が……ん？

あら、何あなた？ 迷い込んで来ちゃったの？

え？ あの世界で死んだ？

い。
だったらエリスの所に行くはずなのに……ま、いいわ暇だし私の晩酌に付き合いなさ

女神の晩酌に付き合えるなんてそうそうない名誉よ？

話下手？ そんなのいいのよ、

アンタの死に様でも話してくれば。

元冒険者？ 魔王軍の行動隊長に殺された？

………なに？ 最後に何であいつ等があんなに強かったか知りたいって？

いいわ。教えてあげる。私が調べられた限りだけど

2

「まず、奴らの力の源になつてるのはレンジャーキー。

これはここじゃない別の世界で戦つた戦士たちの力がこもつてゐるわ。

同時に、それと戦つた敵のデータも戦士たちの経験値としてね。」

だからレンジャーの敵を再現することが出来る。

例えばアバレンジャーのキーからは邪命生命体が主に呼び出されるわ。といつて一息つくアクア。

「それから例外的にジュウレンジャー以降の戦隊は一部を除いて彼らが活躍したのと非常によく似た戦士、パワーレンジャーと戦つた敵のデータを引き出せるわ。デカレンジャーは特に。」

とは言え変則的な使い方だからレンジャー五人で倒した敵が精々レンジャー一人か二人で倒せるくらいには弱体化しちゃうけどと付け足すアクア。

「とは言えレベル低い冒険者にはキツイわ。」

一般戦闘兵ならレベル10いかない冒険者でも一対一なら負けないけど、上級兵のスゴミンはレベル20〜30代がギリギリ勝てるレベルで、行動隊長クラスともなればどんなに弱くてもレベル45はあるわ。」

しかも正しい命じゃないから、復元に過ぎないかつて命だった者ですらないから斃したところでレベルも大して上がらないし、はつきり言つて相手にするだけ損ね。と、た

め息交じりに言うアクア。

「じゃあレンジャーキーを奪えばいいと思うかもしれないけど、奪うだけじゃエネルギー切れで動かなくなるだけで死にはしないわ。

別のレンジャーキーをいれられれば即復活よ。」

そこまで説明したところで彼女は魂が震えていることを察した。

すると慈愛に満ちた笑みを浮かべ、魂を招き寄せると

「大丈夫よ安心なさい。冒険者シエロ。」

私はこれ以上あなたのような犠牲者が増えない為に一人の勇者にレンジャーの力を正しく使える神器を託して送り出しました。

今はまだまだ未熟ですが、きつと最後にはあなたの敵を討ち、見事魔王を打ち倒す事でしょう。安心なさい。」

心の平安を取り戻した魂はアクアに深々と頭を下げると本来尋ねるべきエリスのもとの向かった。

「さて、私もそろそろ仕事に戻りますか。

えー、書類書類………プークスクス！

何この死因!? カッコ悪! まあいいわ。私が導いてあげましょう。」

そう言ってアクアはその魂を招き寄せると営業モードに戻り

「佐藤和真さん。」

ようこそ死後の世界へ。

あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。
短い人生でしたが、

あなたのせいは終わってしまったのです。」

シンケン勝負の邪魔する奴は!

1

何とか一番近くの村に到着した俺たちは早速手ごろな飯屋を見つけて、そこで一番高い肉を頼んだ。

「くう〜! やっぱ空腹は最高の調味料だ!」

「うんうん! 偶には贅沢しないとね!」

一日飯抜きでダンジョンを彷徨っていた俺たちはあつと言う間に完食!

「ご馳走様でしたー!」

「したー!」

そして宿屋を探すべく街に出ると

「なあルカ。なんか皆俺たちのこと見てねえか?」

「多分あれが原因だよ。」

ルカが指さす先を見ると俺たちの手配書が張られていた。

「ダンジョンで会ったギンザメ頭、

この街通って来たのか。」

魔王軍に自ら向かつて行くこうなんて奴らはそう居ない。

奴らは人知を超えた力を持ち、

並の冒険者なんて歯牙にもかけないからだ。

だから街にも警備の奴らこそ囲んでいくけど通り過ぎるだけなら怖がつて引つ込んで閑散とした街を通してしまふ。

その途中で手配書を張るつてのも見逃してしまふだろう。

「それで問題は！」

背後から振り下ろされた剣を剣で受け止める！

かかつて来たのは如何にも人が悪そうな剣士だ。

「賞金につられる馬鹿！」

剣をはじいて渾身の左ストレートを浴びせる！

しかしそれくらいでは諦めないつもりらしく、立ち上がりかかつて来るが

「はあ！」

割り込んできた青いマントに長髪を後ろで束ねた青年剣士にたたつ斬られた。

「正進怒涛流、真つ向唐竹斬り！」

顔面に縦一文字の傷を付けられた剣士は顔を抑えながら人並みの中に消えていった。

それを見送ると長髪の剣士は俺たちの方を向き

「お前は賞金首のナナミ・ソウイチ。

後ろの女は同じ賞金首の盗賊ルカだな？」

「そう言うお前は？」

「俺はジョー。正進怒涛流の剣士だ。

お前に折り入って頼みが有る。」

「頼みって？ 助けてくれた側としてはなるだけ聞いてあげるけど？」

「俺と勝負をして欲しい！」

2

てなわけで町の外の平原にて今に至る。

勝負はいたってシンプル。

真剣で斬り合って相手の服を斬るか、

どっちかがギブアップするまでエンドレス。

最初はくぐった死線の数的に俺が有利だとおごっていたが

ジョーの使うこの正進怒涛流、

無名なだけで恐ろしく実戦向きの剣法だ。

「ハハのー」

「ふっ！久しぶりに骨のある奴と戦えて嬉しいぜ！」

「そりゃあ！曲がりなりに魔王を倒したいからな！」

鞘と鞘がぶつかり合い、剣と剣が火花を散らす。

躲す受けるで精一杯なこっちに対してジョーは怒涛の攻めを続けている。

一度仕切りなおすため何とか距離を取る。

「はあ、はあ、はあ……ある意味魔王軍行動隊長より強いよお前。」

「そうか、けどそれじゃ足りない。」

俺は絶対魔王を倒さないといけない。

師匠が残してくれたこの正進怒涛流で。

最強を証明する！」

鞘を捨てて、両手で構えたジョー。

ジョーは鋼みたいな細マツチヨで身長も180近くある。

その全力の一撃がくる。

(この剣と鞘は結構無茶な使い方しても壊れない。

けど、俺の腕はそうはいかない。

だったらジョーの一撃を食らう前に倒すしかない！)

俺は二刀構えたままジョーに向かって走った。

ジョーは、その意気や良し。とばかりに微笑む。

「正進怒涛流、望月狼輪！」

身体を捻って技を出そうとするジョー。

そこに

「はあ！」

一閃の金色の斬撃が飛んできた!

「うわあああ！」

「ぐう!何者だ!？」

「ゾドマス様だ！」

レンジャーキーをぶっこ抜いてやったのにしぶとい奴だ。

「ゴーマンもそこその数を連れている。」

「魔王軍!師匠をだまし討ちで殺し真剣勝負まで邪魔するか!何処まで剣を愚弄すれば気が済む!」

「ふん!剣なんぞ戦いの一手段でしかない!

最終的に勝てば全部金と出世で帰ってくるのだ!」

「貴様あ!」

激昂するジョー。今にも突っ込んでいこうとするが

「待てジョー。」

「なんだ!？」

「これ、と俺はモバイルーツとシンケングリーンレンジャーキーを渡した。

「これは？」

「アイツらと戦うためにアクアって自称糞女神が押し付けてきた神器だ。

「これを使えば奴らと同じ土俵で戦える。」

「……アクシズ教徒からの贈り物？大丈夫か？」

「というかお前のを俺が使っていていいのか？」

「一応。このままじゃお前収まりつかないだろ？」

「……ああ、恩に着る!」

俺は簡単に使い方をレクチャーして

ギンザメ頭の方を向く。

「作戦会議は終わったか？」

「ああ。ここからは派手に行くぜ!」

「モバイルーツ!一筆奏上!はあっ!」

〈シーッテンケンジャー!〉

緑色の『木』の字型のエネルギーに包まれジョーはシンケングリーンに変身した!

「シンケングリーン！ジョー・ギブケン！参る！」

「やれ！ゴーミン！」

ルカは街に増援を頼みに走り、

俺はジョーの梅雨払いのためにゴーミンどもを引き受ける！

「さーて、生身でどこまでやれるか。良い試運転だ！」

3

シンケンマルとゾドマスの剣。

二つの剣がぶつかり合いながら戦場は小さい規模ながら激しさを増していた。

「はあ！たあ！」

「ぬ！うう！」

怒りと一度剣を交えた友から託された期待に応えたいという思いがジョーの剣を研ぎ澄ましていた。

これにはゾドマスも

「中々やるな！そのままその神器をもってこっちにこい！」

行動隊長クラスのなら簡単になれるぞ？」

「断る！俺はこの剣で最大の悪を斬り、

最強になると誓った！」

「愚か者め！ならここで死ね！」

ゾドマスの背中から無数の刃が飛び出し、ジョーを襲う！

「うわああああー!!!」

「ジョー！この！退けえ！」

ジョーを救出しに行きたいがゴーミンどもがそうはさせない。

「くっそ！せめてもう少しこっちにも戦力が有ればー！」

「戦力ならあるぞー！」

ヒュン！と一矢の弓が飛んできて総一が相手にしていたゴーミンに突き刺さる。

ルカが街から増援を連れて戻ってきてくれたようだ。

数は、ざっと100人。小さめのパーティー三つぐらいか。

「よし、こっちは行ける！ジョーは？」

4

「う、うう……。」

「ふふ。……までだな。」

とどめを刺さんとゾドマスはゆっくりと近づいて来る。

「ま、負けて!負けてたまるか!

俺は、今だけは負けられない!」

ジョーはバツクルから一枚の刀の鏢の様なアイテム秘伝ディスクを、『双』のディスクを取り出しシンケンマルにセット!

モジカラを開放し、二本目のシンケンマルを召喚する。

「なに!?貴様二刀流だったのか!」

「正進怒涛流の剣士は皆そうだ!」

焦って刃を繰り出すゾドマス。

それをジョーはクールにはじいていき、

最後に二本のシンケンマルにセットした熊ディスクを回転させ

「木枯らしの舞!二連!」

見事ゾドマスを叩き斬った!

「ぐおおおお!!おのれ逆賊どもおお!!」

爆裂四散。レンジャーキーを残し今度こそ消滅した。

5

助けに来てくれた冒険者達にはルカがザンギャックから盗み出して来た宝石を渡し

て報酬とした。

「助かった。これは返す。」

とモバイレーツとシンケングリーンのと、新たに手に入れたシンケンゴルドのキーを受け取る。

「で、どうする勝負だけど今からやってもお互い納得出来ないよな？」

「ああ。だからこうしよう。」

ジヨーは俺を真っ直ぐ見据えると

「お前は俺が師匠以外ではじめて勝てなかった相手だ。」

だからお前は必ず倒す。

だから俺以外には倒させない！」

「それってさ、

お互い背中を預けるって事でいいのか？」

「好きに受け取れ」

「………わかった。よろしくな！ジヨー！」

少女と賞金首

1

「なあジョー、ルカ。」

「なんだ？」

「何よ？」

「本当にこれで道あつてる？」

「谷底一本道なんだから間違えるはずないでしょ!？」

ジョーを仲間に加えてから四カ月。

俺の異世界生活五カ月目の今日。

俺たちは相変わらずアクセル目指して旅をしていた。

あれから四カ月。いろいろな事が有った。

例えばジョーも俺たちの仲間として指名手配され

200000ザギンの賞金を懸けられ、

俺とルカは1000000ザギンづつ賞金単価が跳ね上がって三人合わせて5300

00ザギンの賞金首になってしまった。

それだけならまだいい。

問題は挑んでくる魔王軍の行動隊長や荒くれ者の数が阿保みたいに増えた事。

そして何より

「ジョー！ステイスティ！」

お前は何でこうも好戦的なんだあああ！」

ジョーが敵と出会う度に戦おうとするから大変なのだ。

そうなる俺とルカも付き合わされるわけで毎日へロへロ。

レンジャーキーをゲットできたとしても釣り合わないぐらいに疲れる。

しかもジョーだけは最後まで生き生きしてるから質が悪い。

しかしそんなジョーも乗り気じゃない時がある。

「おいルカ！」

悪徳貴族だか何だか知らんが相手にするだけ損だぞ!?

王国からも賞金首にされたいか!!」

ルカが悪徳貴族の宝石が欲しいと言いだす時だ。

何で知らんがルカはそれだけは譲らない。

まあ、もともと彼女光物は好きだが

「何よジョー。普段貴方みたいなイノシシ武者に付き合っただけであげてる身としては安いも

んでしょ?」

そう言われるとジョーも強く出れない。

そして嚴重な警備に最後見つきり

「忍風! シノビチェンジ! はあ!」

〈ハリーツリケンジャー!〉

「水が舞い! 波が躍る! 水忍!

ハリケンブルー!」

専用グライダーのブルーウインガーで逃げる。

ここまで一つの流れだ。

おかげでハリケンジャーには大勢の前で変身出来なくなってしまった。

しかも大抵盗んでくるものが金属だったり寶石だったりするので重いしかさばる。

そんなこともあつて俺が一日ぐらい休みたいと言うと

「駄目だ。俺たちは一刻も早くアクセスに向かわないといけない。」

「駄目に決まつてるでしょ!?! 水の恵みが何だか知らないけど魔王軍より先に見つけな

きやいけないのよ!」

「じゃあ余計な戦闘とか不要な冒険とかしないでさっさと行けばいいじゃん!」

「「なんか言つた!?!」」

この一言で黙らされる。

はつきり言つて理不尽である。

俺なのに。

一番戦つて一番荷物を持つてるのも俺なのに。

そう言う訳でショートカットのために谷底の道を一週間かけて進むと言われた時に

駄々をこねにこねて馬を購入した。

初老の元農耕馬だ。パワーがあつて体力がある。

まさに何かを引つ張るのにお誂えな馬だ。

「なあ、この馬の名前ジョールカにする？」

それともルカジョー？」

「その名前にしたら叩つ切る。」

「その名前にしたら顔がアイスクリームの化け物みたいになるまで殴る。」

そう言われてドンという名前を付けた。

小まめに休憩をしたがるがその分働き者だ。

で、谷底に入つて早三日。

永遠続く同じ景色になかなか当たらない日光。

水も持つてきてる分しかないから風呂も無い。

俺たちのストレスは限界値に達そうとしていた。

「なあ！折り返し地点には橋が架かっているんじゃないの？」

さつきから青いお空しか見えねーだけど。」

「うるさい！」

そんなこと俺に言われても分かるわけないだろ!？」

「いや、分かったかもしんない。」

「どうしたルカ？なんか見えるのか？」

ルカは目がいい。

遠い物も暗い所でも動くものでもすぐに見つけられる。

なんでも弓の師匠に鍛えられたとか。

「向こうに壊れた馬車みたいなのが有る。」

「向こう？あの若干盛り上がって見えるところ？」

「貴方達にはそう見える？」

「ああ。」

「行くか？」

「どうせ通り道だしな。」

俺たちは少し道を急いでその壊れた馬車を目指した。

そこには本当に上から落つこちて来たらしい馬車に頭が変な方向に曲がった馬に、何枚か板が落ちていた。

「橋ごと落つこちてつて感じか。」

瓦礫を見ながらジョーが言う。

ドンは、馬の死体を見てか近づこうとしない。

「ジョー。ドンを繋げたら、馬の死体をわきの方に。」

俺とルカで馬車の中を探る。」

「分かった。」

「オツケー」

まずは散乱したものをどかし中を見ると

「女の子がいる！傷が深そう！」

「よし来た！ダイノ！バックラー！」

〈ジューーッウレンジャー！〉

俺はマンモスレンジャーに変身して自慢の怪力で潰れた入り口を押し上げる！

その間にルカがその怪我した少女を引っ張り出す。

俺は馬車を入り口が上を向くようにひっくり返した。

「とお！ルカ！その子の傷は？」

「結構深い。」

「変容の薬は？」

「もともと五瓶しかなくて、ここ最近戦闘激しくて消耗速いから……この傷の深さだともう開けてる奴全部使っちゃうかな？」

「あと一瓶か。」

「どんなに多く見積もっても五回！キツイな。」

ルカはその女の子に変容の薬を飲ませる。

苦しそうに呻いた後、みるみる傷が塞がっていく。

「こうして見ると、結構可愛い顔だな。」

穏やかにはいれないが、眠る少女は艶やかな長い黒髪に、整った顔立ち。

クール系の動きやすい衣装といい総じてかっこいい系の美人だ。

「う……うん？」

「あ、気が付いた。」

「!!？」

起きた少女は俺を見ると恐怖に顔を引きつらせ、下がろうとしたが

「!!? ……ああ！」

「まだ動いちゃダメ！傷は塞いだけど痛みは残るし、

出血しちゃった分の血は戻らないから！」

少女を落ち着かせる。

彼女はキツ！と俺たちを睨み上げ

「魔王軍……私を治してどうするつもり？」

「魔王軍？俺たちが？」

思わず笑ってしまいメットを被っててよかったと思った。

顔を元に戻すとメットを脱ぎ

「逆だよ逆。俺らは魔王軍に喧嘩売った賞金首だ。」

俺は手配書を見せた。

「ええ？……本当だ。」

まだこちらへの警戒は解いていないようだが、

とりあえず魔王軍でないことは分かってくれたようだ。

「見りゃわかるけど、俺は七海総一。」

こっちの喧嘩っ早いのがジョー・ギブケン。

で、その手癖悪いのが盗賊ルカ。」

「喧嘩っ早いジョーだ。剣の修行をしている。」

「手癖悪いルカよ。」

悪者から財産ふんだくるのが趣味。貴方は？」

「私は、リア。」

取り合えずここに留まる訳にもいかなかった俺たちはリアをドンに乗せて、リアの分と合わせて四人分の荷物をもって先を急いだ。

そしてその日限界まで進み、星が瞬きだった頃

「ここをキャンプ地とする！」

テントを張つて火をおこし、休息を取った。

「リア。酒は飲めるか？まだ一瓶だけあるんだが。」

「ジョー！なに病み上りに飲まそうとしてんのよ！」

「酒は百薬の長だ。だろソウイチ？」

「酒かあ、飲んだことないな。」

「お前いくつだ？」

「そろそろ19。ジョーは？」

「今年で21だ。ルカは？」

「17。リアは、15ぐらい？」

「ええ。その位の、はず。」

「はず？」

「どうした歯切れ悪いな？」

「実は…私は覚えてないんだ。」

「何でここに居たのかとか。どこから来たとか。」

「ええええ!!」

まさかのネタ被り。俺は帰れない理由として使ってるだけだけど、リアは状況的にマジっぽいな。

「このリアって名前も、本当の名前かどうか…」

「何か断片的にでも覚えてることはないのか？」

「……踊り子の仲間、紫色の魔導騎士、

それから…最後に落ちていく感覚…。」

「なんだそりゃ？」

「思ったより深刻だな。」

「いや、通貨の単位とかそういうのは覚えてるんだが…」

「ソーイチとは逆ね。」

え？といつてこつちを振り向くりア。

俺も記憶喪失なんだ。自分の事とかは覚えてるんだけど、お前とは逆にこの世界の常識とかは分かんない。

と言うと少しはこつちに親近感を持つてくれたみたいで、そうか。と興味を持ったような視線を向けてくる。

「こつち来てから覚えてるのはこれの使い方だけだな。」

そう言つてモバイレーツとレンジャーキーの入った袋を取り出す。

「それは？」

「アクアとかいう糞女神から押し付けられた呪いさ。」

「これが有るから魔王軍に狙われて、これが有るから戦える。」

「その、人形で？」

「ああ。見るか？」

そう言つて試しにさつき変身したマンモスレンジャーのキーを渡す。

「これ、知つてるかも。」

「え本当？」

「うん。でもこれじゃない。」

「この中にあるか？」

とここの五カ月で三十本に増えたキーを一個ずつ見せていく。

「ゲキレツド？」

「違う。」

「ニンジャホワイト？」

「違う。」

「イエローライオン？」

「全然違う。」

「ビッグワン？」

「ちよつと似てるけど違う。」

「アバレキラー？」

「それ！」

そういつてキラーのキーを取るリア。

「それを、見たこと有るのか？」

「うん。多分どこかで……」

けどそれ以上は出てきそうにない。

それ以外のレンジャーキーも見せてみたが見覚えが無いとのこと。

「よく分からんが、もしさつき言つてた紫の魔導騎士が魔王軍なら、リアが襲われた理由はレンジャーキーについて何か知つてたからかもな。」

「だとすれば……魔王軍の奴らに聞けばいいのか？」

だが相手は魔王軍だ。

聞いて素直に答えてくれる訳がない。

そうなると戦うことになるだろうが、

彼女1人ではキツイだろう。

「だったらさ！ 私たちと一緒に来ない？」

「え？」

「私たち、本気で魔王軍を潰すつもりなの。」

「俺たちは魔王軍に勝てるかもしれない切り札を探してアクセルつて街に向かっていく。」

「ここからなら一月掛かる掛からないかだ。」

「お前も来ないか？」

「……分かった。連れて行ってくれ。」

私は自分が知りたい！」

「そっか。よろしくなリア！」

2

「魔王様？ よろしいでしょうか？」

魔王軍の城。魔王城。

その上空に陣取った魔王の旗艦ギガントホースの指令室にて。
「どうした？」

魔王は席から立たないまま高圧的に入ってきた占い師に問いかけた。

「アクセルという街に神々しき光がありました。」

放置しておけば何があるか分かりません。

「どうかご一考を。」

「なに？」

魔王はすぐに幹部のベルディアを呼び出した。

「お呼びでございましょうか魔王様？」

「なにやら占い師どもが騒がしい。」

アクセルという街に神聖な何かの痕跡が無いか調べてこい。

近場の行動隊長も向かわせる。」

「御意！」

ベルディアを下がらせると一人ほくそ笑んだ。

「人と同じところまで堕ちた気分はどうだ？」

水の女神アクア。」

ここで会ったが100年目!

1

長い長い半年だった。

散々寄り道して遠回りして不恰好で無様だったが遂に

「アクセル~~~~ッ来たあああああ!」

遂にとうとうアクセルにたどり着いた!

まさかスタート地点に立つまでに200本中35本も集まるとは思わなかったけど

!

何とかここまでやって来た。

「いや〜ここまでですでに達成感!」

「満足するな。」

俺たちの目的は最終的に魔王を倒す事。

満足してちゃ進めないぞ?」

「だってそうは言ってもさ!」

誰かさんが好戦的だったり誰かさんが宝石好きなせいで散々寄り道」

「そこまで言ったところでルカとジョー誰かさんに締め上げられる俺。
ちよつとルカさんジョーさん！」

「総一さんの身体螺子きれちやいます！」

「いいのよりア！」

「こいつはこれ位しないと駄目なんだから！」

「そうだリア。」

「普段俺に次いで戦つてくるくらいで生意気だ。」

「ひどい理不尽！総一さん大丈夫ですか!？」

「ああ……お迎えの天使が俺の顔を覗き込んで……。」

「総一さん！」

「阿保やつてないで行くぞ。」

「そうね。」

切り替えの早い二人の先導の元街に入り冒険者ギルドを探す。

丁度いい機会だし俺たちが今持つてるレンジャーキーを紹介しよう。

まずあの自称水の女神に持たされた五本。

ハリケンブルー、アバレブラック、デカブレイク、

マジイエロー、マジシャイン。

次に交戦した魔王軍行動隊長から奪ったキー。

ビッグワン、バトルケニア、デンジブルー、

イエローライオン、マンモスレンジャー、

レッドレーサー、メガレッド、ゴーピンク、

ハリケンイエロー、デカレッド、

デカマスター、シンケンレッド、

シンケングリーン、シンケンゴールド。

入ったダンジョンとかその他襲ってきた山賊が持っていたレンジャーキー。

ニンジャホワイト、リユウレンジャー、オーレッド、

オーピンク、タイムイエロー、ハリケンレッド、

アバレキラー、マジレッド、ボウケンレッド、

ゴーオンレッド。

地味に一番ゲットするのに苦労したどっかの御神体とかになってたキー

アカレンジャー、ブラックコンドル、アバレブルー、

デカイエロー、ガオレッド。

と言ったラインナップだ。

「それで、ずっとまっすぐ進んでるけどどの建物だと思う?」

「いや考えて無かったのかよ！

てかそんなの街の人に聞けばいいだろ？」

「それだ！」

いやそれだ！つて……。普通だろ？

前世（？）での話になるが俺だつて初めていった街で駅の方向があつてるか不安になれば道行く人に尋ねたぞ？

「リア、ソーイチ。聞いて来てよ。」

「俺ら？」

「言い出しつぺだからな。」

「なんで私も？」

「リアは可愛いから総一だけで行くより警戒されないから！」

なんか取り方によつてはすごい失礼な事言われた気がするが、ここで議論しても仕方ない。

「すみませんそこのご婦人。」

「なんでしよう？」

「俺たちこの街で冒険者になる手続きが出来ると聞いたのですが何処に行けばいいでしょうか？」

「そういう事でしたら少し戻って左に行けば看板が見えるわ。ようこそ駆け出し冒険者の街アクセルへ。」

「がんばってくださいね。」

「はい!ありがとうございます!」

「頑張ります!」

俺たちはルカとジョーの元に戻り、

教えて貰った方へ行く。

教えて貰った通り看板が出て来る。

『冒険者ギルド』

この手の世界を舞台にしたゲームなら真っ先に何の危険もなく行けるはずの場所だが、俺の場合レベリングと資材収集の方が先だった。

(コンティニューみたいな気の利いたことは出来ないだろうけど、まあセーブポイント的な憩いの場所が出来るのは良い事だ。)

ドンを繋いでおける場所があったのでそこにドンを預けてからドアを開けると

「あ、いらっしやいませー!お食事ならこちらのお席へ!

お仕事案内なら奥のカウンターへどうぞー!」

中は半分レストラン、というか椅子のある立ち飲み屋みたいになって、奥にカウ

ターが有り、その前に何組かテーブルがある。

「俺たちは奥だな。」

「でもこつちからすつごいおいしそうな臭いしますよ?」

「ちよつと早いけど登録済んだらお昼いこつか?」

「はい!」

そう言っておくに行くと、カウンターの一個から人が二人飛び出して来る。

一人は、凄く見覚えのある青髪的美少女。

もう一人は、天ねん茶髪の青少年で、緑のジャージを着てる。

「三人ともちよつと待っててくれ。」

「ソウイチ?」

困ってる様子の少年に声をかけた。

「なあ、そのジャージ少年!」

「え?は、はい!」

「その服つてもしかして、君日本出身か?」

「!じゃああなたも?」

少年が嬉しそうに笑う。

「ああ。冒険者登録はまだなんだが、

半年ぐらいこっちで生活してる。

七海総一だ。よろしく。」

「佐藤和真っていいいます。よろしくお願いします!」

固い握手を交わす。

いやあ、彼とは赤の他人なんだがそれでもこう、

久々に同郷の人間に会えると懐かしく感じるものだ。

「ん?」

て事はあなた私を送ってやった転生者ってことよね?

ならちよつと2000エリス程貸してくれない?

素晴らしき力を託してやったお礼と思つてさ!」

何やら偉そうのことを言っている糞女神。

ゆーっくりと振り向く。

俺の顔は結構怖い顔になってるらしい。

後ろにいる和真君が後ずさったのと、

女神の笑顔がだんだん引きつるので分かる。

「え、え〜つと、あの?」

「ああ感謝してるよ。」

ロクに使い方も教えないまま魔王軍が欲しがってる神器を持たせて魔王軍の目の前に着の身着のまま放り出して散々死にそうな目に合わせてくれて有難うなこんの自称元女神いいいいい！」

俺は渾身のバックドロップをお見舞いした。

シーン…と静まり返る。俺の愛すべき仲間たちの方を見ると、

ジョーは何とも言えない表情のまま固まり、

ルカは結構驚いた表情で、怖がって後ろに隠れたりアをかばってる。

「和真君。」

「は、はい！」

「何があったか知らないけどこの阿保女のせいで苦労してるな。」

多分君も着の身着のまま放り出されそうになってこいつも無理やり連れて来たって感じだろ？」

（ち、違うんです…：…そいつ、俺が転生特典で連れて来たんです。）

「本当に大変だったな！」

これ、少ないけど使いな。」

そう言つて俺は和真君に5000エリスほどお金を握らす。

「え!? いや、そんな！」

和真君は、それはそれは申し訳なきような顔をしていたが

「返さなくて良いし返すとしても余裕が出来てからでいいよ。」

(すいません! 本当にすいませーん!)

そう言つて俺は仲間たちの元に戻った。

「さー俺たちも登録行こうぜ。」

「あ、ああ…。」

「貴方、切り替え速いわね。」

お前ら程じゃないと言つてやりたかった。

2

み、皆様はじめまして。佐藤和真です。

先輩転生者の七海先輩にお金貸してもらつて無事に冒険者登録できました。

で、問題は

「おかしいと思わない!?! 私女神! 女神なのよ!?!

私に触れるなんて一生に一度あつたら生涯自慢できる事柄なのよ!

それなのにあの冒険者の男がやったことは何!?!

バックドロップ! バックドロップよ!?!

しかも私が上級僧侶アークブリストになったって自慢したら

最弱職のくせに！『どんなに上級職でもこんななんも悟ってない僧侶とかご利益あるの？』って笑いやがったのよ！ありえない！ありえないわ！」

この愚痴の止まらないアクアだ。

え？なんでこいつが下界に居るかって？

それは俺が異世界へ持っていける者としてこいつを選んだからだ。

なんでこいつを選んだかって？

死因を馬鹿にされてムカついたからだけど？

「兎に角カズマ！」

あんたはあの男と同じ最弱職の冒険者だけどあいつが初めからレベル26だったのに対してあなたはまだレベル1よ！何としてもアイツより強くなりなさい！」

「そうは言うけどまだロクな装備も整ってない、

パーティーさえ持ててない、

極めつけは現在所持金3000エリス。

これでどうしろって言うのさ？」

「そ、それは……幸運値だけは無駄に高いアンタが宝くじに全額突っ込むとか！」

「次に破滅する奴のアクションじゃねーか！」

駄目に決まってるだろ!

借りてる金でそんな事してみろ。

お前が抜けた代わりにその座に収まった女神に罰当てられるぞ?」

「まだ辞めて無いわよ!

現在進行形で女神よおお!」

喚くアクアを無視して俺は掲示板にかかっていた戦わないで済む依頼の中から出来るだけ安全で給料のいい依頼を探した。

冒険スタートアップ！

1

「お疲れ様でしたー！」

今日の分の仕事を終え、

親方から日当を受け取り大衆浴場に向かう。

俺、佐藤和真とアクアはここ2週間、最低限の装備代とその日の飯代を稼ぐ為^に街の土木工事に従事していた。

「あー、極楽。どこの世界でも風呂はいいもんだな〜」

「へー、ニホン？つていったか？にも風呂は有るだな。」

「ジョーさん！お久しぶりです。」

「ああ、勝手に隣に座らせてもらってるぞ。」

この人はジョーさん。この前金を貸してくれた七海先輩のパーティーメンバーで職は上級剣士だ。
ソードマスター

レベルは31とパーティー内で一番高いらしい。

「冒険者生活はどうだ？」

「どうだって言われても、

まずは装備を整える為に土方やってますよ。

後1週間も頑張ればショートソードが買えるんで、

そしたらなんかクエスト受けるつもりです。」

「ほう。なら今度剣の手解きをしてやろうか?」

「いいんですか?」

「減るもんじゃないからな。」

「まあ、減るのは俺のスキルポイントだけですからね。」

この世界にはスキルという概念がある。

倒した魂により得られる経験値、スキルポイントを消費してスキルと呼ばれる魔法を習得できる。

それは職によって様々で例えばジョーさんのソードマスターは最高の攻撃力の職業。

スキルとしては『片手剣』などの覚えるだけで人並み以上に剣が使えるようになるなどかなり便利だ。

「いや、俺は剣術のスキルは全く取ってないぞ?」

「え!? そうなんですか?」

「ああ。俺は正進怒涛流の剣士。」

下手にスキルを覚えて他の流派の動きが混じれば腕が狂う。

その分『筋力強化』や『俊敏向上』のスキルを取ってる。

後は普通は剣士系の職なら誰でも取れるが聖騎士クルセイダーしか取らない様なスキルも幾つか取ってるな。」

「なるほど、けど俺はなるべく早く覚えたいんでスキルで取っちゃうかな?」

なんで手解きはまたの機会に。

そう言うところとジョーさんは少し残念そうだったが

「そうか。まあ、戦い方は人それぞれだ。

同じ剣使いとして応援してるぞ。」

そう言ってるジョーさんは先に上がって行った。

俺もちよつとしてから上がってアクアと合流して夕飯を食べに食堂に向かう。

「アクア、今日は何食べる?俺は肉の気分なんだ。」

「私も!スモークリザードのハンバーグ食べたい!」

「じゃあ宿屋の親父にそう頼むか。」

「はあ?!何言ってるのよカズマ。」

先週の事をもう忘れた訳?」

「先週?.....ああ!今日はあの日か!」

「その通り！楽しみにしてたんだから！

さ、行くわよ！」

2

話は1週間前に遡る。

その日も土木工事の終わりに大衆浴場に行こうとした時の事。

「そこの二人！」

馬を連れた黒髪の美少女に呼び止められた。

「あーアンタはあのバックドロップ男のパーティーの！」

「リアっていいます。」

リアは俺より一個歳下で職業は前衛職のランサー。

なんでも昔薙刀を習っていたとの事で、

七海先輩と同じ神器使いだそうだ。

今日は馬のドンと荷物運びの仕事を済ませて来たところらしい。

「あの時は総一さんが本当にごめんなさい！」

「本当よ！ちゃんと首輪をつけておきなさい！」

アクアはまるで自分に非が無いみたいに言ってるが、

果たしてどうだろうか？

人の死因を馬鹿にして異世界に道連れにされるような女神だからなあ……。

「お詫び言つては何ですが、これを。」

そう言つて渡されたのは二枚のチケットのような物だった。

「これは？」

「実は私、そのバーで歌わせてもらつてるんです。」

「へえ！すごいな。」

スポーツ、しかも武道系が出来て歌が上手くてこの美貌。

俺がもし同じ学校だったらリアを見るために不登校になんなかったかもしれない。

「と言つても私なんかまだまだ……たまたま店長に気に入られただけで」

「兎に角ありがとう。これ何時使える？」

「一週間後です。楽しみにしててくださいいね。」

てなわけでリアのお陰でいつもの料金でいつもよりいい所でいい飯にあり付けた俺たち。

「ん〜！やつぱ自分で稼いだお金で食べるご飯は美味しいわね！」

「ああ。俺もずつと日本に居たら味わえなかつただろうな。お、リアの出番だ！」

一週間前に出会つたのと同じ衣装でリアが出て来た。

リアが歌ったのは、アイドル的に言えばクールに分類される曲だったが、リアは本当に歌えることが嬉しくて嬉しくて仕方ないと言う様に身体中から生き生きと歌った。

「すっげえ……すげえ！リア！サイコーー！」

「ええ！その自分の浪漫にどこまでも真剣な声！」

「気に入ったわ！」

それは本当に真摯な気持ちで、

俺たちまで嬉しくなれる素晴らしい歌だった。

「凄いじゃないのあの子！」

あの男のパーティーなんて辞めて踊り子にでもなればいいじゃない！」

「流石に言い過ぎな気もするけど確かに！」

俺の元居た世界ならCD出せるよ！」

久々に、もしかしたら生まれ始めて始めて歌で感動したかもしれない俺たちは満ち足りた気持ちで寢床として借りてる馬小屋へ。

「あく明日からも頑張れる気がする。」

「本当ね。歌は世界を救うのね。」

「ああ。お休み。」

「ええ。今日も良く働いたわ。」

3

やあ皆。総一だ。

アクセルの俺たちの家に初めてお客様がやって来た。

え？冒険者は皆金が無いから基本馬小屋暮らしなんじゃないかって？

俺らの場合ルカが悪徳貴族から盗んできた宝石とか貴金属が有るから四人家族用の家を買えたんだ。

宝石売るって言った時ルカはかなり渋ったんだが

「お前のリスクの方が明らかに高い我儘に付き合っただけだと思えば安いだろ？」

というジョーの一言でだまった。

そんなこんなで俺たちが冒険者登録を済ませてから3週間。

初めてのお客様はお金を返しにやって来た和真君だった。

「いらつしやい和真君！

時間あるかい？ゆっくりしてきな？」

「あ、いえーこれからクエスト受けに行くんで。

あとこれ、借りてた5000エリス。」

「いいのになんくらいい。」

私、盗賊ルカは仲間のソーイチが気にかけていた少年がジャイアントトードに追いか
けられてるのを腹を抱えて笑ってる自称女神の頭が可哀そうなプリーストという光景
を見せつけられていた。

「貴女、アクアって言ったわよね？」

仲間が食べられそうになってるわよ？ 助けないの？」

「知らないわよ。」

それに女神が武器をぶん回して暴れるなんて絵になんないじゃないの。」

「アクアー!! アクアー!!」

いつまでもその通りすがりの人と話してないで助けてくれよおお!!」

「まずは私をさん付けするところからねー!!」

「アクア様ー!!」

彼女の事をソーイチが嫌ってる理由がわかった気がする。

きつとカズマ少年をいつか顔に甘い汁を塗ってアリの巣の横に頭だけ出して埋めて
やるとか考えてるに違いない。

「しようがないわねー!!」

いいわ、助けてあげるわヒキニート!

その代わり、明日からはこの私を崇めなさい!

「街に帰ったらアクシズ教に入信し」

私は背後から迫る影を感じて素早く逃走スキルを使い潜伏スキルで岩陰に隠れた。

「ごはんの時には私が欲しいと言ったおかずを抵抗せずに素直にぎゅぶー」

「あ、アクアー！」

口から青い物が生えたカエルに向かってショートソードを片手に突っ込んでいくカズマ少年。

彼の前途は多難の一言なんだろうなど、

崩れ落ちるカエルと号泣する念液まみれのプリーストを遠目に見ながらルカは何もしてやれない代わりに今度自分の盗賊スキルでも教えてやろうと思うのだった。

爆裂！中二娘！

1

「だ、大丈夫かアクア？しつかりしろ……………」

その、今日はもう帰ろう。

請けたクエストは三日でカエル五匹の駆除だけどこれは俺たちの手に負える相手じゃない。

もつと装備なり仲間成り集まってからにしよう。」

正直言つてあのカエルに獲物を捕食すると食べきるまで動かなくなる習性が無ければ仕留められなかつただろう。

流石に元気に動き回るカエルに向かって行く勇氣は俺にはない。

「賢明ね。」

アクアの背後にカエルが来た瞬間に逃げ出した女の人が戻つて来た。

「通用の戦闘には前衛職が、

ダンジョン攻略には盗賊が必須。

冒険者とプリーストじゃアンバランスすぎるしね。

それに相手はジャイアントトード。

呪いを使ってくるような敵じゃないし、

回復魔法が必要な斬撃攻撃をしてくるような敵じゃないしね。」

「……てことはなんだ？」

アクアお前はこの手のクエストで何の役にも立たないってことか？」

ビクツ！と座り込んだままのアクアが震える。

「流石に蘇生とかもカエルに消化されちゃったら無理だろうからね。」

「つまりなんだ？」

お前が余裕ぶっていたのはそもそも戦闘に介入する余地が無かったってことか？

そうか。

だったら助けてくれなんて無茶な要求して悪かったな。」

「さつきから…舐めるのもいい加減にしなさい！」

粘液ぬるぬるのまま、

身体中をテカらせたまま勢い良く立ち上がるアクア。

そして遠くに居たジャイアントトードをキツとにらむ。

「アクア？お前まさかあいつと戦うつもりか？」

「やめときなさい！また食べられて終わるだけよ！」

「カエルにも最弱職にも盗賊にも舐められたままで引き下がれるもんですか！」

俺と女の人の忠告も無視して全力ダツシユで駆けていくアクア。

カエルもこつちに気付いてアクアに向かつて行く。

「私はもう、穢されてしまったわ。」

たかがでつかいだけのカエルにここまで目の遭わされて引き下がったなんて知れ渡れば信仰心なんてダダ下がりよ！これでカエルに引き下がったら美しくも麗しいアクア様の名が廃るつてもんよ！」

心配するなアクア。

日頃おっさんたちの数倍の荷物を運んで汗を流し、

ふろ上がりの晩飯を何よりの楽しみにし、

馬小屋の藁の中でよだれ誑して寝る姿を見れば念液まみれなんて今更だ。

「冒険者より土木工事の方が長い奴が何言ってるんだか。」

隣の女の人もだいたい同じようなことを思っていたらしい。

「ゴッドブロー!!」

「おおー！」

「なにあれ!？」

拳に白い光を纏ったアクアがジャイアントトードに飛び掛かる。

「ゴッドブローとは！」

女神の怒りと悲しみを乗せた必殺の拳！

相手は死ぬ！」

そして拳はぶよんと柔らかい腹にめり込みカエルは何事も無かったように……。

「か、カエルってよく見ると可愛いと思うの」

……俺は動かなくなった二匹目のカエルを討伐して

念液まみれで泣きじゃくる女神を連れてその日のクエストを終えた。

2

「て事が有ってね。」

「やっぱり苦労してるか。」

「ま、あの塵女神がお荷物になって二匹も討伐できるんだから大したもんだ。」

夜、俺、七海総一たちは新居にて夕食を取っていた。

作ったのは俺。

ジョーはケーキとかなら作れるがそれ以外からつきしのスイーツ系剣道男子で、ルカとリアはそこら辺の女子力底辺なので必然的に夕飯は総一が作る事になるのだが、

(俺だってそんな美味い訳じゃ無いよ。

たまたま大学遠かったから一人暮らししてただけで

二刀流スキルに中級以上の魔法も相性良かった火と雷は取れたし、少しなら身体強化系も取ったし、

もうちよい余裕出来たら料理スキルでも取るか。

そう思いながら自分で作った大して美味くないサンドイッチを平らげる。

「私たちも和真さん達を手伝った方がいいんでしようか？」

「そうね、あの子達、最後にパーティーメンバーを募集するって言ってたから誰も集まんなかったら手伝うぐらいはしてもいいんじゃない？」

なんて冗談で話していた。

だってジャイアントトードだよ？

魔王軍相手にし過ぎて感覚麻痺つてると言われればそれまでだけど、ただなのでつかいカエルよ？

それ倒すだけなら適当に暇な奴が先輩風吹かせて手伝ってやると思っていたが。

「だれも来てないね。」

「来てませんね。」

和真君達のテーブルに近づこうとするものは一人もいなかった。

他のパーティーは二、三言で終わる面接で握手からの即出発って感じだが

「いくらズブの素人しかないとは言えジャイアントトードよ？」

そりゃ打撃技はどんなに強力でも効かないけどそんな強敵って訳でも」

「……いや、これ見てみる。」

ジョーに言われて和真君達が張ったと思われるパーティー募集の依頼を見る。

「目的魔王討伐って……」

「最終目的そこでも一足飛び過ぎでしよ?」

「しかもこの上級職限定って……」

「うちのパーティーだったらジョーしか当てはまる奴いないじゃねーか。」

幾らなんでも話が飛び過ぎだ。

ジャイアントトードにてこずってて募集するレベルじゃない。

「あ、でも一人凄く背の低い魔法使いウィザードの子が。」

ぱつと見小学生くらい、精々中学一年生位の背格好の

とんがり帽子に黒マント黒ブーツ。

そして自分の背丈ぐらいの杖を携えた何処から見ても魔法使いの少女だ。

「我が名はめぐみん！」

紅魔族随一の魔法使いにして爆裂魔法を操りし者!」

少女は和真君達を前に高らかに名乗った。

「ほおー、紅魔族か。」

「なにそれ？」

「生まれつき皆高い魔力と高い知性を持ってて、

大抵上級魔法使いになれる資質を持った一族だ。」

「その名の通り極上のルビーみたいな真つ赤な目をしてるの。」

「ルカさんはすぐそれですね。」

「宝石は浪漫よ？お金と違って暴落しないからね！」

さてうちのパーティーが仲が良いのが再確認できたのは良しとして、和真君達も頼もしい仲間を見つけられたようで、早速食卓を囲んでいる。

「さて、

なんでもこの辺りでゴーミンが目撃されたらしい。

偵察クエスト出てたから行こうか！」

3

やあ皆！カズマだよ。

俺たちは満腹になったためぐみんを連れてジャイアントトードにリベンジに来ていた。

「爆裂魔法は最強魔法。」

それ故準備に結構時間がかかります。

準備が整うまであのカエルの足止めをお願いします。」

気付いた一匹が向かってくる。

だが更に逆からも別のカエルが向かってくる姿が見える。

「じゃあめぐみん。

あつちの距離ある方の奴を頼む。

近い方は…おいアクア!

今度こそリベンジだ。お前、一応元なんたらなんだろう?

偶には元なんたらの実力を見せてくれ!」

「元って何よ!前にも行ったけど現在進行形で女神よ!

アークプリーストは仮の姿よお!」

「……女神?」

「……を自称する可哀そうな奴なんだ。

時々こういったことを口走るがそつとしいてやってくれ。」

俺の言葉に、同情の目でアクアを見るめぐみん。

「なによ!打撃が効き辛いカエルだけど今度こそ女神の力を見せてやるわよ!

見てなさいよ2人とも!

今のところ活躍してない私だけど今日こそは！」

そう言ってカエルに突貫していき頭から齧り付かれたアクアはやがて動かなくなつた。

学習能力のない女神さまのお陰で俺は難なく通算3匹目のカエルを討伐できた。

そしてめぐみんの方は

「見ていてください。」

これが、人類が行える中で最も威力のある攻撃手段。

………これこそが爆裂魔法です！」

マントの内側から赤、黒、青、黄、桃色の五つのカギの付いた数珠のようなアイテムを取り出す。

そして何やらカツコ付けたポーズを取った後、

空気が、変わった。

めぐみんの呪文が紡がれるごとに周囲は震え、

鍵束から出る黄金の光は輝きを増し、杖にビリビリと力が漲っていく。

魔法をよく知らない俺でもよく分かる。

これは、凄い。

めぐみんの杖先に灯がともった。

膨大な光をギュツと濃縮した様な、とてもまぶしい小さな光。

めぐみんが、赤い瞳を鮮やかに輝かせ、カツと見開く。

『エクスプロージョン』ッ!」

平原に一筋の閃光が走りぬける。

めぐみんの杖先から放たれた光は吸い込まれるようにカエルに刺さると……!」

それは開花した。

目もくらむような強烈な閃光と轟音。

そして吹き荒れる風さえ殺傷の力を秘めてるのでは?

と思わせるほどに強烈。

俺はなんとかぶっ飛ばされない様に踏ん張り、嵐が過ぎると立ち上がった。

カエルは塵も残らなかった。

軽く50メートルは出来たクレーターの下にさつきめぐみんが狙っていたのとは別のジャイアントトードの腕が、

辛うじて遠目から色がわかる程度に残っている。

「……………なんじゃこりゃ?」

おそらく乾かない様に潜っていただろうが、

その為にさつきの破壊の嵐の餌食になってしまったのなら同情する。

「おいめぐみん！」

お前さつき何処にも入れてくれるパーティーが無いとか言ってたけどこんだけ強いなら何で……………」

振り向くと、

そこには完全に脱力して動かなくなつたためぐみんがいた。

白目を剥いて口から泡を吹き、

血色の無くなつた肌は人形の様だ。

「まさか、燃料切れ？」

俺はカエルの念液まみれになつて泣きじゃくるアクアと辛うじて心臓と肺だけは動いているめぐみんを背負つて俺たちはギルドに帰還した。

4

「う……………ん？」

「目が覚めたかめぐみん？」

気が付くと、私はギルドでカズマさんのおかしな上着をかけられてギルドのベンチに寝かされていた。

カズマさんはずっと付き添つてくれていたそうで、

アクアはカエルの粘液を落としに大衆浴場に行ったそうです。

「爆裂魔法が一発撃つたらああなるレベルの魔法なら先に言ってくれ。

本当に死んだかと思つて心配したじゃないか。」

カズマさんは口調こそ叱るような言い方ですが安心したように笑いながら言いました。

「ええ。すいません。」

まさか私もああなるとは思わなくて」

「え?まさか爆裂魔法を今日始めて撃つたのか?」

「違います!私は爆裂魔法しか使いたくなくて!」

爆裂魔法を極めるために冒険者になつたんです。

今回は、あのお守りを使って初めて撃つたんです。」

「お守りつて、あのマントの内側に入れてた鍵束か?」

「はい。あれは、故郷を出るとき拾つたんです。」

出発の前日。夜空を見ていたら、

流れ星にしては大きい光が有るなと思つたそれが落ちて来て、行つてみたらこの鍵を見つけたんです。

見た瞬間、私はこれに惹かれました。それで、持つて帰つてお守りにしたんです。」

そう言ってお守りを取り出し、カズマに見せる。

「私の爆裂魔法はどうでした？」

「ミサイルでも落ちて来たかと思っただぞ？」

50メートルぐらいクレーター出来てたし。」

「50メートル!?!」

以前の私なら精々20メートルのクレーターを作るぐらいで、魔力切れでも自力で立てない程度にししか消耗しなかったのに……。」

「どうやらやはりこの空からのお守りには私の爆裂魔法を底上げする力があるようです。」

「兎に角、もし使い続けたらお前の命が危ないかもしれない。」

もうそれを使って爆裂魔法を撃つのは辞めておけ。」

「え? いや、でも…:そ、それは……。」

私は爆裂魔法を極めたくて冒険者になったのにこれでは…

「そんなに悩むんなら妥協案だ。」

「妥協案?」

「それを一本貸してくれ。」

危ない物かどうか俺が調べて来てやる。」

それまでこれを使うのは控えてくれるか？」

「……わかりました。お願いしますね調査員さん。」

そう言って私は五本の中から黒い一本を外してカズマに託しました。

この時はまだ知りませんでした。

私の拾ったこの鍵、レンジャーキーが世界の命運を左右するほどの力を持ったものと。

これのせいでカズマ戦いの運命に晒されてしまったのだと。

翼の覚悟

1

「あ、来た来た！和真君ここ！」

「七海先輩！すいませんお待たせしてしまつて。

俺から誘つたのに。」

「いいって。俺も丁度同郷の君とはいつかじっくり腹を割つて話したいと思つていたから。」

俺は総一さんからめぐみんが持っていた鍵の事を聞くべく、俺とが違つて真つ当に転生特典を貰つた筈の七海先輩に聞くことにした。

「しかし和真君から誘つてくれるとはな。」

「この店来たこと有るの？」

「前にリアがチケットくれて。」

「なるほど。因みに今日も出番あるぜ。」

と言つて俺が奢るつもりで来たが俺の分までチケットをくれた。

金だけは自分で払つた。

「先輩どれにします?」

「今日は海老みたいのが食べたい気分だからなあ……。」

先輩は海老に似たモンスターの丸ごと湯でを、

俺は川魚のソテーを注文しリアの歌を聴きながら乾杯した。

「いや、和真君から誘ってくれるなんて嬉しいね!

ジョーは酒は好きだけど寡黙で全然喋らないし、

ルカは酔うと手が付けられなくなるからさ。

リアは未成年だし」

そう言つて七海先輩は酒のお代わりを注文する。

「いいですね総一さんのパーティーは優秀そうで。

うちなんかプリーストの癖に敵に向かって行く馬鹿に、

魔力切れでぶっ倒れるアークウィザードですよ?」

「確かにあの顔だけの女神を手元に置き続ける君は勇者だよ。

何たってテメーの尻拭いのために他人に神器持たせて異世界送りにして

それで済ませようとするやつだよアイツ?」

「そうそう……いやちよつと待ったその話詳しく。」

その後七海先輩は時折酒を一气飲みしながら語った話を要約すると

1、アクアはへまやつて転生特典を持ち逃げされた。

しかもその原因はアクアが俺の時みたいに死因を馬鹿にしたから。

2、それでアクアは七海先輩に書類に無理やり指紋押さ

せて転生させた。

3、しかも詳しい説明一切なし。

「最悪だなアイツ！」

「だろ!? そりゃ俺だつて生まれ変わるか転生するかだつたら転生の方を選ぶさ！」

けどそれも自分で選んだんなら途中で投げ出したいか思っても自分で選んだんだからつて踏ん張れんじゃん!?

けど俺の場合半ば無理やりなわけよ!

もし本当につらい事が有った時にさ!

自分で選んだんじゃないして諦めちやつたらダメじゃん!

相手は魔王軍だぜ? もし俺が戦わなきゃ誰かが死ぬ状況でそうならつて思うと

さー!

怖いんだよ! 諦めそうな自分がいて!

そんな保身的な本音が出て来る時点で!

こうして酒に頼ってる時点でさあああ！お代わり！」

途中から情緒不安定になった七海先輩は泣きながら飲んでいた。

もう俺はアイツのパーティーメンバーとして、

身内が迷惑かけちゃった立場として、

なにより後輩異世界転生者として七海先輩が酔いつぶれるまで付き合った。

店長につけを頼むと俺は先輩を背負って帰路に就いた。

2

「遅いな、総一の奴……。」

一人でカードをいじっていたジョーさんが呟いた。

確かにただ夕飯を食べに行くにしては遅い。

「確かに。」

そう言えば同郷の子と食べていくって言ってたわよね。

酔いつぶれてその子に迷惑かけちゃってるかもよ？」

「あの総一さんがですか？」

普段から明るくてその一方で真面目で最年長でも無いのにこのパーティーを纏める総一さんがそうなる所は正直想像できない。

「酒には魔力がある。

時として人間を骨抜きにしちまうもんさ。」

そう言つてジョーさんは剣をもつて立ち上がりました。

「ギルドの周りを探してくる。留守は頼んだ。」

「私も行きます!」

「リア……分かつた。けどジョー。

残るなら貴方が残つて。私が行くわ。」

「なんでだ?」

「貴方が残るんなら空き巣に入ろうとするやつはいないでしょ?」

いざとなつたら私は潜伏スキル持ちだし、リアには神器が有るわ。」

「分かつた。二人とも頼んだぞ。」

ルカさんはギルドの方に、私は歌わせてもらつてるバーの方に戻つて総一さんを探した。

「総一さーん! 総一さーん!

大丈夫かな……あ、アクアさん!」

探しているとき、丁度一ブロック先にアクアさんの後姿があつた気がたが

「あれ? 人違いじゃないよな?」

気付かなかったのかな? ……………。」

なんだか強い違和感を感じてアクアさん(?)を追って進みた。

その先で見たのは

〈ラーツイブマン!〉

見たことのない海豚イルカのようなメットの青い戦士に変身したアクアさんと

「な、なんでお前が!?!」

総一さんを背負った和真さんがいた。

3

半日ほど時間を巻き戻し、アクセルの某所。

薄暗く沈んだ地下の部屋。

黒いローブ姿の若い女が一人佇んでいた。

「……………来たか」

ガサガサと耳障りに聞き取りづらい声で女は呟く。

その後ろには

「はい。魔王軍行動隊長、

デンソーツノー、ここに。」

女は懐から一本の黒いレンジャーキー、
ライブマンのブラックバイソンのキーを取り出しそれをデンソーツノーの中に入れ、
代わりに元々あつたブルードルフィンレンジャーキーを抜き取る。

「もう行つて良いわ。」

「ははあー！」

デンソーツノーが自身の転移能力で去つて行つたのを確認すると女は懐からモバイ
レーツに酷似したアイテムを取り出す。

総一の持つモバイレーツとは色が違つた。

金色のはずの海賊マークの部分と

本来赤の部分は毒々しい紫色に、

本来銀のラインが走つてる部分と

青の部分は鮮血のような赤。

名付けるなら、

ダークモバイレーツとも呼ぶべき代物だ。

それに女は、緑色のレンジャーキーを構え！

「臨気外装！」

〈ゲーーーーッキレンジャー！〉

獸人メレに変身した女は擬態で姿を消すと、
街に出て目的の者を探した。

4

「全くカズマの奴遅いわね。」

女神を待たせるなんて大罪よ?」

ぶつぶつ文句言いながらもアクアは酔いつぶれて帰れなくなってるのでは?と心配するぐらいには和真と仲間と呼べる関係になつていた。

(それに飲みに行くんなら私も誘いなさいよ。

めぐみんはまだ飲みに行けるような歳じゃないとしても私は良いじゃない!)

かまつてちゃんやんで意外と寂しがりなアクアとしては今回のような事はなるだけ辞めて欲しいと思うのだった。

(そりや付き合いあるのは分かるわよ?)

けどこんだけ遅くなるってどうゆう事よ?

ヒキニートで貧乏の癖に酔いつぶれるまで飲むとかどうゆう了見?)

「全く、もつと私を敬いなさいよ。」

「その欲を満たす方法、教えてやろうか?」

「誰!？」

辺りを見回すが、声はするが姿は見えない。

「誰だか知らないけど、アンデッドの分際で女神に何を教えるっていうのかしら?」

「カントンなことだ。お前の力を見せつけてやればいい。自分こそが必要なのだとわからせてやればいい。」

背後から腕を掴まれ、何かを握らされた。

ダークモバイレッツだ。

それから一気に紫色の瘴気の様なものが吹き出す。

「あ、あぐーん、これは……………ツ!」

ピュリフイケーション!ピュリフイケーション!

並の穢れならこの程度でも祓えるが、

これから噴き出る瘴気は異常だ。

(ピュリフイケーションが通じない?)

もしかして相性最悪の大地の呪いがベースなの?

だったら今の弱体化した私じゃここまで侵食されたら!

「さあ、楽になりなさい。己が欲のままに。」

あなたが人間に教えたことよ?」

そう言われてレンジャーキーを渡された瞬間、
アクアの意識は反転した。

5

俺は酔い潰れた七海先輩を背負って夜道を歩いてた。

結局めぐみんの持ってた鍵については何も聞けなかったが、それでもこの先輩が信頼にたる善人であると分かったただけ収穫だっただろう。

「結局この鍵はなんだったんだろ……ん？」

狭い道に入ったところで反対側から見覚えのあるシルエットがフラフラと歩いてきた。

「アクア？お前どうしたんだ？なんかフラフラしてるぞ？」

まさかお前も酔ってるのか？」

流石に酔っ払い二人は面倒見切れないぞ。

七海先輩は思ったより軽いけどお前までは背負えないからな。

「カズマ……………」

俺の名前を呟いた後ボソボソと何か言ったが聞き取れない。

「どうしたアクア？大丈夫か？」

よく見たら顔昼間のめぐみんより真っ白じゃねーか。」

「うるさ………ダーク、ゴークイチェンジ！」

そう乱暴に言い捨てるアクアはポケットから毒々しいオーラのケータイ電話のよ
うなアイテムと、めぐみんが持っていたのに似た青い人形を鍵に変形させる！

「まさか！」

「ああああ！」

〈ラーツィブマン！〉

アクアはイルカみたいな青いメットの戦士に変身した。

その様子は、明らかにおかしい。

一か月も無い付き合いだが分かる。

今のアクアは苦しんでる。

「な、なんでお前が!？」

「ああ！」

腰のホルスターから銃を抜き、こちらに向けるアクア！

「ま、マズい！うわああ！」

エネルギー弾？が足元に炸裂し、すっ転ぶ俺。

「総一さん！和真さん！」

いつの間にか後ろにいたリアが応戦してる。

が、リアの神器は鍵盤で奏でた音色を増幅させて魔法の壁として撃ち出す防御全振りの武器だ。

リアに攻撃手段がない以上、長くは持たない。

(俺も応戦しないと！)

そう思つてショートソードを引き抜くが、振り返つたアクアの銃に撃ち抜かれてバラにされてしまった！

(マジかよ！なにか、武器！武器はないのか？)

そう思つて酔い潰れた七海先輩の服を漁ると、アクアが持っていたのと色違いのケータイのような道具が出てきた。

それ以外にも俺がめぐみんから預かつて持っていたのとは別の鍵が出てくる。

「まさか先輩の神器つてこれなのか？」

俺は恐る恐るケータイを開いた。

アクアみたいに黒いオーラが噴き出るような事はなく、
持つていても何ともない。

「俺にも、出来るのか？」

果たして俺に神器が使えるのか？とか、

めぐみんみたいな事になったり、

最悪代償で死ぬとか漫画でよく見る展開にならないか？

とか不安は有るが

「流石に仲間が人殺しになるのを、

止めない訳にはいかねーな！全くしようがねえ！」

俺は七海先輩から借りたキーをポケットにしまい、

めぐみんから預かっていた黒い鍵をケータイに差し込み捻る！

「はぁー！」

〈ダー……ツイナマン！〉

俺は黒い戦士に変身した。

両手にはV字型のブーメランが握られている。

まずはそのうち片方を投げる！

アクアの後頭部に当たった！

「ツ……カズマー！」

「お前の相手は俺だ！リアー！」

下がってろ！応援を呼んでくれ！」

リアが頷き、通りに消えていくと同時に

唸りながらアクアは銃を捨てて剣を引き抜き迫って来る！

「あああー！」

「うっ！つくうー！」

ギリギリと黒いブーメランとアクアの剣がつかひ競り合う！

「なんで、そいつなの……」

この距離でなければ聞き取れない程小さな声でアクアは言った。

「カズマは、もっと敬つてよ。」

私は女神……アクシズ教の御神体なのよ？」

「しるかよー！」

だからってやっていい事と悪い事が有るんだよ！」

「なんでよ？……私は悪い事してない……」

したとしても、その男を送るみたい……」

「いや自分の後始末を他人にさせんなや！」

言っておくけど真の平等主義者たる俺は女子にも

全力でドロップキックを浴びせられる男！

たとえ相手が女でも男でも女神でも男の神でも言うべきことは言わせてもらおうし！

ムカつかされたからにはぶっ潰す！」

俺はアクアの剣を弾いて一発強烈な蹴りを浴びせる！

しかしアクアは倒れながらも弓矢を出現させ、

俺の武器を撃ち落とした！

(マズイ！アクアはすぐ立ち上がって来る！)

武器を取りにしゃがんだらやられる！)

俺は懐から適当に選んだ鍵を取り出す。

大丈夫だ。この鍵は俺と相性抜群か、

アクアと相性最悪のどちらか！

時々とんでもない厄介ごとに巻き込まれちゃうが、

その後の運の良さだけは人一倍強い！

それがこの佐藤和真だ！

「第二ラウンド行くぜ！」

〈ジエーターマン！〉

俺は再び光に包まれ、鳥を思わせる嘴の飾りが付いたメットに黒いスーツに変身した。

「!?」

「わりいなアクア。着替えさせてもらったぜ。」

折角お前みたいな顔だけは良い女とこんな夜にデートだ。

いや、人生に三回くらいしかデートし無きそうなお前にはわかんないか。」

「——ツツツ!!!」

(bgm 炎のコンドル)

どうやら今の挑発に冷静さを欠いたらしいアクアは再び剣を構えて突っ込んできた

!

俺は腰に下げられていたビーム銃を撃つ!

「うわあああ!」

身体にびつちりついたスーツの割には丈夫らしく、

火花を散らしながらぶつ飛んだわりにはアクアはに傷らしい傷は無さそうだ。

けどダメージは与えられてる!

「そらそら!ハチの巣にしてやるぜ!」

俺は銃をもう一丁構え、アクアに向かって突き進む!

ギリギリまで接近してナックルダスターを装備し、

アクアを天高くかちあげる!

「ぐわあああああー!!」

俺は腰の剣を引き抜き、翼を広げて天高く舞い上がる!

「コンドル！フィニッシュ！」

袈裟斬りに切り裂いた！

変身が解除されたアクアをキャッチしながら降り立つ。

「たく、人騒がせな女神さまだ。」

心なしか安らかに眠るアクアを見ながら俺は一人呟いた。

ホットミルクとマツカラン

1

気が付くと、そこはミッドナイトブルーのバーだった。

静かな水底のさらに奥のような、

静かさだけが染み入る場所で、俺、佐藤和真の目の前で一つのトランプ勝負が行われていた。

向かって左に座っているのがゆったりとした白い羽衣を身にまとい、長い白銀の髪と白い肌の少女だ。

向かって右に座っているのが、

上下黒の衣装にオールバック気味の髪形。

東洋系のイケメンダンディだ。

傍らに置いた楽器ケースの中身はサククスだろうか？

客としても、奏者としても、

この空間になんの不思議も無くびたりと当て嵌まる。

「では、よろしいですね。」

「ああ。俺が勝つからな。」

まずは少女がカードをオープンする。

もうカードの交換は済んでるらしい。

「♣ A K Q J 10。」

ロイヤルストレートフラッシュ。」

少女が出したのは最強の一手だった。

思わず「おお！」と声をあげそうになったが、

なぜか体が動かない。視線を動かす以外何もできない。

「……エリス、お前は幸運の女神の癖に弱いな。」

「カードをオープンする前からそれを言いますか？」

「ああ。俺は負ける賭けはしない。」

そうやって男がカードをめくる。

「♠ 5、?? 5、♦ 5、♣ 5、JOKER。」

ファイブカード。」

「な、なんと!」

少女が美しい青い瞳を真ん丸にして驚く。

「言ったろ? さ、約束だ。」

「仕方ありません。少しだけですよ?」

そう言つて穏やかに笑いながら、少女が指を鳴らすと

「うおお!? 動けた……。」

「おい少年!」

「は、はい!」

「ちよつとこつち来い。」

俺は賭けに勝つた男に招かれるまま男の隣、少女とは反対側に座つた。

「お前が仲間をぶん殴つてでも止めようとしたところ、

全部見てたぜ。

女に手をあげるのはいただけねえが、

お前の戦い、俺の知つてるレッドレンジャーには及ばねえが魂こもつてたぜ。」

そう言つて俺の腰を指さす。

そこには下げた覚えのない昨日アクアと戦つた時、

もつと言えば鳥人の黒い戦士に変身した時に使つた剣が下げられていた。

「いつの間に!?!」

「ブリンガーソード。」

俺たちジェットマンの武器、お前に預ける。

武器つてのは女だ。

構ってくれねえと機嫌悪くするから気を付けろよ?」

「は、はい……あの、あなたは?」

「結城凱。見ての通りの気前がいい上にいい男だ。

マスター、少年に砂糖抜きホットミルクを。

こつちにはマツカランのストレート!」

俺の前にホットミルクが、凱さんの前にお酒が注がれる。

「頑張れよ、この世界のブラックレンジャー。」

「は、はい!」

なんだか大先輩が頼もしく見送ってくれるような感覚になりながら俺と凱さんはグ

ラスとカップを打ち付け合い、

中身を煽る。

「さて、ワンゲームじゃそろそろ時間か。

最後にそうだな、性格はあれだが、

お前の女、大事にしろよ?じゃあな。」

そう言つて笑つた凱さんの声がだんだん遠ざかつていく。

そして俺は……

2

俺はいつも通り馬小屋で目を覚ました。

(……夢か。まあそうだよな。)

昨日は爆裂魔法に、操られる女神に、

最後にやスーパーヒーローに大変身だ。

変な夢みつるぐらいに疲れたって……)

かちやり、と腰に変な物が着いてるのが分かった。

それは白いホルスター付きのベルトだった。

そのホルスターに収納されていたのが

「ブリンガーソード……」

間違いなく俺が昨日使った剣だった。

夢で見たままの形でそこにあった。

「反対側にもホルスターが……これは？」

それは昨日七海先輩から勝手に借りたケータイ電話と全く同じ形の物が収まっていた。
た。

ただし色は違って、金と銀の部分が逆転している。

「よく分かんないけど、

とりあえず昨日のこともあるし先輩たちのところ行くか。

おい、アクア！起きろアクア！」

「う……へっほへっほお！ぐおっほごっほ！」

「へ？え、えつとアクア、様？いかがなさいました？」

「やあ……何でよお……女神なのに、風邪ひいたあ……」

3

「いや、家は駄女神専門の医者じゃないんだけど？」

「いや先輩。そうは言っても医者に行けるような持ち合わせがなくて、ここくらいしか頼れるところが無くて！」

俺はアクアを担いで途中で合流したためぐみんと共に七海先輩達の家に行った。

「うう……ほ！風邪引いた……げほ！」

女神なのに風邪引いた！げっほごほ！」

「おいウイルス女神！」

和真君の顔を立て寝床貸してやってるんだから大人しくしてろ！」

誰かこの中で看病とか出来る奴は？」

と七海先輩が尋ねると

「生まれてこの方、骨折と打撲と刀傷の手当てしかした事がない。」
と、ジョーさん。

「多分経験ないです。」
とリア。

「妹の看病とかは何回か。」

とルカさん。

「私も少し。」

とめぐみん。

「よし、ならルカと和真君とこのアークウイザードちゃんに任せた。

リアは街で薬かなんか探して来てくれ。ジョーとリアは」

「今日の飯代ぐらいなんかしらクエストで稼いでくる。」

「ドンも走らせてあげないとストレス溜まっちゃいますから。」

「頼んだ。」

全員が出て行くとそこに残ったのは俺と七海先輩。

アクアが本当の女神だと知る2人だけ。

「和真君。やっぱりあいつのアレってさ」

「あの黒いケータイぐらいでしようね。」

2人とも同じ考えだったらしい。

俺たちは物置に聖骸布で封印された黒いケータイを取り出した。

「直接触るのは駄目ですかね？」

「多分な。逆にウイルス女神が使ってたレンジャーキーはなんの異常も無かったから、もしアイツに何か干渉したとすればあの黒いモバイルーツだ。」

「モバイルーツって、これの名前ですか？」

俺はホルスターから自分のモバイルーツを取り出す。

「そうそう。つてえ!?和真君それは？」

「朝起きたらこの剣と一緒に持つてて。」

何か、あるんじゃないかって。」

「あの駄女神の体調がマシになったら色々聞きたいことが増えたが、まずはこつちだな。」

七海先輩は自分のモバイルーツとレンジャーキーを構え

「天空聖者よ!我に魔法の力を!」

天空変身、ゴール・ゴル・ゴルデーロ!」

へマールツジレンジャー!」

金色の戦士に変身した！

「輝く太陽のエレメント！」

天空勇者、マジシャイン!!」

「う、うわあああ！なんですか!？」

なんですかそのカッコいいの極みみたいな口上は！

凄い！凄いです！

爆裂魔法とは別系統でカッコいいです！」

いつの間にかいたためぐみんは大興奮…てかめぐみんいつからそこに？

「変身するところからです！」

ルカさんに1人でいいから2人とクエストにでも行っていいと言われたので来てみたら！

ソウイチさんがカッコいいことに！」

目をキラツキラさせながら満面の笑みでマジシャインを見上げるめぐみん。

「和真君もやる？」

マジレンジャーのキーは後二本あるけど？」

「え？」

「カズマもやるんですか？やれるんですか？」

やれるんならやって下さいお願いします！」

「わーっ！分かった！分かったから落ち着け！」

俺は七海先輩に差し出された二本のキーのうち赤い方を受け取り、ケータイを、モバイレーツを開く。

「天空聖者よ！我に魔法の力を！」

魔法変身！ マージ・マジ・マジロー！

〈マージレンジャー！〉

赤い魔法陣に包まれ、俺も変身する！

「燃える炎のエレメント！」

赤の魔法使い、マジレッド!!

「最高！最高ですよカズマ！」

ちよ、ちよつと兜脱いで貰えますか？

私も被つてみたいです！」

めぐみんにマジレッドのメットを渡してやり、

俺たちは黒いモバイレーツに集中する。

「これどうしましょうか？」

「なんかしら呪詛が刻まれてるのは間違い無いから

「マジレンジャーの力で浄化しよう。」

2人がかりで浄化魔法をかけて、黒い瘴気を祓う。

めぐみんの興奮が落ち着いた頃、浄化は完了して、黒かったモバイレーツは俺のと同じカラーリングに変化した。

「さて、問題はこれをちゃんと使えるかどうかだな。」

「誰かでテストしないと駄目ですよね？」

「だったら私！私がやりたいです！」

やらせて下さい自分の鍵もありますから！」

そう言つてめぐみんはあの時の鍵束を見せる。

「ダイナマンのレンジャーキー！」

「これを何処で？」

「故郷で拾ったんです！」

「……これは、問い詰めなくちやな。」

あの駄女神様をよ。」

貧乏店主と冒険者

1

やあ皆！総一だ。

モバイレーツを無事浄化した俺たちは魔力の回復を待つてめぐみんを加えてある実験を行うことにした。

音とか万が一戦闘になった場合を配慮して先日と真君達がカエルと戦った辺りに来ている。

「大丈夫かめぐみん？体震えてるぞ？」

「武者震い！武者震いですよ！」

だつて考えてみてくださいよ！

あんなに格好い名乗りを出来るんですよ!？」

「わかったわかった！」

顔が近いぞめぐみん落ち着け！」

「それじゃあ、行くぜ！」

「応！」

三人でレンジャーキーを構え

「「ゴーカイチェンジ！」」

〈ダーツィナマン！〉

俺、和真君、めぐみんちゃんと並ぶ後ろに赤、黒、桃色の派手な爆発が起こる！
そして俺たちの身体は強化スーツに包まれた！

「ダイナレッド！」

「ダイナブラック！」

「ダイナピンク！」

爆発！科学戦隊！」

「「ダイナマン！！」」

最後に背後で派手に爆発が起こり、俺たちの結集を知らせる狼煙となった。
「くううううううう！！かっこいいい！」

これに勝るものは有りません！」

「よかった、めぐみんも問題なさそうだし、

浄化はうまく行ったみたいですね。」

「ああ。」

て事はレンジャーキー自体はデータの塊みたいなもんで、

それをライトサイドかダークサイドかどっちかに偏って

抽出、出力するのがモバイレツってことか？」

「それはアクアに聞いてみない限り分かんないですけど、

取り合えずその解釈で良いんじゃないですか？」

「だな。それよりこの後どうする？」

俺は兎も角今日和真君達はクエスト一つも受けて無いんだよね？お金平気？」

「俺はまだ幾らか蓄え有りますけどめぐみんは…」

「わ、私は本当に少ししか」

そう言った経緯で俺たちはギルドでなんか知らくクエストを受けることにした。

「つつても簡単なのは粗方今日の分は終ちやつてるか。」

「逆に爆裂魔法が活躍しそうなクエストは行くだけで日付が変わっちゃまいそうなのばっ

かだし。」

どうやらボードに乗ってる以来で良いのは無きそうだ。

諦めるか？と思っていた時

「皆さんアレを」

めぐみんが指さす先にはおどおどした様子のプリーストの少女が依頼書片手に冒険者たちに声をかけてるが相手にされていかない。

「いってみますか?」

「話くらいはいいんじゃない?」

和真君が先陣を切って少女に声をかける。

「お嬢ちゃんどうかしたのかい?」

何か困っていることが有るならお兄ちゃん達が力になるよ?」

「本当ですが!?!実は私駆け出しのプリーストで、

この街にも来たばっかで知り合いも居なくて…それでお金もあんまりなくて…」

クエストが受けられなかったそうだ。

今度回復魔法が使える奴を探してたパーティーに声を掛けておいてやろうと思いな

がら話を聞く。

「それで、このクエストを受けたかったんですけど、

どうしても前衛になってくれる人が必要で……」

依頼内容はゾンビメーカーの討伐だった。

ゾンビメーカーってのはその名の通りゾンビを従えた悪霊の一種で、手下を作り出すことから分かる通り本体はそんなに強くないが、ゾンビの方は結構タフなため攻撃力無いプリーストには少々キツイ。

「いいぜ。報酬は俺ら三人に半分寄せせ。」

「そしたら露払いをつめてやるよ。」

「それだけでいいんですか!？」

「取り合えず今日食える分だけ貰えればいいからね。」

「爆裂魔法の出番は無さそうですが、

パーティー加入の時にそれ以外では荷物持ちでもいいと言ってしまったからね。

カズマ、いざとなったらモバイレーツ借してください。」

「あ、モバイレーツで思い出した！」

和真君。これ、渡しとくよ」

俺は和真君にブラックコンドルとマンモスレンジャー、

アバレブラックのキーを渡す。

「いいんですか!？」

「俺が持つてるより君が持つてる方がいい。」

「ありがとうございます！」

「いいって。でもそうだな。」

お礼について訳じゃ無いけど、

いい加減下の名前で呼んでくれ。

七海先輩はなんかむず痒い。」

「じゃあ俺の事も呼び捨てにしてくださいよ。」

「なんかよそよそしいですし。」

「わかった。じゃあ、改めてよろしくな和真。」

「はい！総一さん！」

2

「夜の墓地つてのは不気味なもんだな。」

「ゾンビが出るのも納得だ。」

「そう眩きながら俺たち、」

「佐藤和真と愉快的仲間たちは街外れの共同墓地を目指していた。」

「しっかし、」

「なんでゾンビメーカーなんて出たんでしょね？」

「こういうった所はそれぞれの地区の協会に所属するプリーストが定期的に巡回に来るはずなんですけど。」

「めぐみんが思ったことを口にするのとプリーストの女の子が」

「多分、あまり家に余裕がなくてちゃんと弔いが出れない人がいるんだと思います。」

「それが化けて出るって分かってるんならちつとは葬儀代まけてやれって話だけだな。」

総一さんが吐き捨てると、入り口が見えて来た。

一旦立ち止まって空を見上げる総一さん。

「どうかしました?」

「今日は成仏させてやるにはいい日だなと思って。」

確かに空には綺麗に月が昇っている。

雲も少なく星明りも明るい。

「今日より星は大分少なかったけど、

町医者だった俺の祖父さんが逝っちまった時こんな空だったんだ。」

そう言うとき総一さんは腰の剣を引き抜き、

鞘を逆さまに持ち先頭に立って進んでいく。

俺もならってプリンガーソードを引き抜き進む。

後ろにリーストの子、めぐみんと続く。

「……………」

「……………」

誰もが無言のまま進んでいく。

少しずつ自分の心臓の鼓動が大きく、

よく聞こえてくる様に感じる。

「!」

先頭に立っていた総一さんが止まった。

俺たちも止まって様子をうかがう。

角の先には、青白い巨大な魔法陣の先に成仏しきれない霊が集まっていて、その中心には黒いローブの若い女が立っていた!

「行きましょう。」

「ああ。」

俺と総一さんは武器を構えながら走り出し

「え!?だ、だれで」

「問答無用だこの悪霊!」

「くらえ!」

総一さんの剣と俺のブリンガーソードが空を切る。

びつくりしてしゃがんだ拍子に転んで避けられたのだ。

すぐさま足で急ブレーキをかけて反転し

「ああー!魔法陣を乱さないでください!」

「この霊たちを成仏させれなくなっちゃいます!」

「はあ?」

「え？アンタ、討伐依頼が来てたゾンビメーカーじゃないのか？」

「ゾンビメーカー？違います。」

私はウイズ。ウイズ魔道具店の店主です。」

「その魔道具店の店主様がなんでこんな夜中にプリーストの真似事してるんだよ？」

ウイズというこの女性が言うには、

この墓地には昔はエリス教のプリーストが来ていたが、

担当が変わってから滅多に来なくなっちゃってしまい、

こうして時々浄化に来ているらしい。

「つまりなんですか？」

「この教会の担当はゾンビメーカーが出るって嘘についてギルドにクエスト発注させて体よく義務を押し付けてるって訳ですか？」

そういうとめぐみんは杖を構えて荷物をプリーストの子に持たせると一人外に向かい始める。

「おいめぐみん！どこ行くんだ？」

「その教会です。」

ダイナマンのレンジャーキーも使って塵も残さず消し飛ばして差し上げます！」

「馬鹿止せ！」

あの威力の魔法を街中でぶっ放したら二次被害だけでどんだけ死人が出ると思ってるんだ！

駄目に決まってるんだろ!？」

「ですが許せることではありませんよ！」

そう言つて実際に騙されたプリーストの子より、役目を押し付けられたウイズより悔しそうな顔で言うめぐみん。

「落ち着け。」

むかつ腹が立つてるのは俺も同じだ。」

そう言つてめぐみんをなだめる総一さん。

「じゃあどうするって言うんですか!？」

「もちろん派手に行くのさ。」

そう言つて三本のレンジャーキーを取り出す！

「という事は！」

「えつと、ウイズ！」

「は、はい！」

「浄化が終わつたらその子を送つてあげてくれるか？」

「いいですけど…あなた達は？」

「これから忙しいんで！」

そう言つて俺たちは三人一列に並び

「「忍風！忍チェンジ！はあ！」」

〈ハーツリケンジャー！〉

俺たちはグライダーを召喚し、空を飛んでいった。

3

「ん？あれは……」

夕飯を食べた帰り、クルセイダー聖騎士の少女、ダクネスは空の彼方に三角形の何かが飛んでいくのをたまたま目にした。

（空飛ぶ三角形の……まさか！）

ダクネスは三角形が飛んでいった方向、街の教会の方に向かって走った。

クルセイダーとあつてダクネスは重い鎧を着こんでいたが、それでも走れるぐらいに速かった。

「おい誰か！誰かいらないか?」

ダクネスは力任せに扉を叩く。

何事かと教会の神父が飛び出て来た。

「一体何事ですか？」

「何って始まるのさ、成敗が！」

何処からともなく声と、薄ピンクの花びらが舞ってくる。

声の主は屋根の上に月光を浴びてしゃがんでいた。

奇妙な丸い傘を回しながら仰々しく舞う三つの影は

「お前たち！」

「何者！」

「風が啼き！空が怒る！空忍！」
そらにん

傘を放り投げポーズを取る赤い兜にスーツの異形。

「ハリケンレット！」

「水が舞い！波が躍る！水忍！」
みずにん

同じように傘を投げ高らかに名乗る青い兜にスーツの異形。

「ハリケンブルー！」

「大地が震え！華が唄う！陸忍！」
おかにん

額を叩くような仕草をする黄色い兜とスーツの異形。

「あ！ハリケンイエロー！」

「人も知らず！」

「世も知らず！」

「影となりて悪を討つ！忍風戦隊！」

「「ハリケンジャー！」」

「あ、参上！」

見えを切った三人は教会の責任者とダクネスを見下ろし

「貴様だな！ゾンビメーカーが出ると嘘をついてギルドに依頼を発注して共同墓地の浄化を体よく押し付けてる悪徳プリーストってのは！」

「な、何を言う?!」

うろたえる神父に青い異形は問いただす様に

「こっちは確信持つて行動してるんですよ！」

お前が本部の方から貰ってる給料はお前の贅沢に消えてるんでしょ!?

その分今まで騙してたプリーストたちに配らせてもらいます！」

よく見ると黄色い異形の足元に金貨の入った袋が有る。

「な、何を勝手に！」

「勝手？ああ勝手さ。」

法が悪を裁かねえから俺たちがやるのさ！」

「そういう訳だ。それでは、成敗バイ！」

三人は煙幕弾を投げると空の彼方にピラをばら撒きながら消えていった。そのピラには神父の悪行を糾弾する内容が書かれており、教会の神父が以前の担当に戻るのは時間の問題だった。

このトラブルメーカーな女神と答え合わせを！

1

「て事が有ってさ。」

「おかげでハリケンジャーは王国の方から指名手配されちゃった。」

まあ元々ハリケンブルーはルカ達と悪徳貴族の館に盗みに入ったりした時に結構な頻度で使ってたから元々だけど。

まさか三人合わせて500000000エリスになるとは思わなかったが。

「アンタたちが寝込んでる間にとんでもない事してるのね。」

まだちよつとダルそうな水の女神様が横になるベッドの横で俺、七海総一と頼れる後輩の佐藤和真は昨日の顛末を女神に聞かせていた。

ついでにこいつが暴れた夜何があったか、とか。

「それで、いくつか聞きたいことが有るんだが、

いいか？」

「ええ。」

まずレンジャーキーについて。

これは俺の予想通り、俺たちが元々いた地球とは別の地球で悪の軍団から世界を守っていた正義のヒーローたちの力を凝縮したもの。

そしてモバイレーツとあの黒いモバイレーツは

「私も知らないわ。黒くない方は説明できるけど。

まずソウイチの使う金に銀のラインの方はモバイレーツの大本。

使うレンジャーキーの使用者との相性まに関わらず100%のパワーを発揮できるわ。」

「じゃあ和真のは？」

「相性がもろに出るわ。」

ものによっては半分もポテンシャルを出せないけど、

本当に相性のいいキーは100%以上の性能を発揮できる。

例えばカズマがやってみるみたいに各レンジャーの大きいなる力の一部を武器にして変身前でも使えたりね。」

「これそうだったの!？」

驚きながらブリンガーソードを引き抜く和真。

となると、彼が夢で会った結城凱という男は本家本元ブラックコンドルだったのかも
しれない。

「それで、あの黒いのは？」

お前の使った感じでいいから教えてくれないか？」

「そうね……あれには私と相性最悪の大地の呪詛が仕込まれてた。

いくら私の浄化能力でも弱体化している今なら防御に集中してない間に仕込まれたら抗うのは難しいわ。

かなり高度な呪いだっし。

おかげで免疫下がって人生で初めて風邪ひいたわ。」

「つまり魔王軍か？」

「私に無理やりアレを握らせた奴もそうなんだと思う。」

そうなるといよいよ敵さんもこっちにターゲットを絞ってきてることになる。

「どうする和真？お礼参りにでも行くか？」

「その日の飯代で手いっぱい俺たちがですか？」

流石に今の戦力では現実的とは言えない。

だけど何もしない訳にはいかない。

「アクア。俺たちは取り合えずめぐみんに総一さん達となんかクエスト受けてくる。なんか欲しいもの有るか？」

「シャワシャワ。」

「酒なんか病人に飲ませられるか!

ジューズで我慢しろ。」

「なによ! カズマの癖に……いえ、カズマだから意見するのよね。分かったわ。」

「「え、?」」

「何よ……私だって大人しくする時ぐらいあるわよ?」

それから七海総一

「なんだよ?」

「……悪かったわね、尻拭いまかせつきりで……」

「……お前、黒いモバイルーツに仕込まれてた呪詛まだ脳に残ってんじゃねーの

?」

「何よ揃いも揃って失礼ね! ほら出てって!」

アンタ達といると治りが遅くなるわ!」

2人を追い出し、アクアは寝返りを打って再び眠りについた。

2

「な(ハハ)ハ?」

私、アクシズ教の御神体にして水の女神アクアは目を覚ました瞬間、そこらじゅうピ

ンクの謎空間にいたわ。

「ここはあなたの夢の中！」

天界のあなたの殺風景な部屋そっくりだったから芳香ちゃん魔法で素敵な空間にしてあげたよ！」

そう言つて小躍りしながら出て来たのは

「その衣装…あなた魔法使い？」

「そ、魔法戦隊マジレンジャーのマジピンク！」

おそらく後輩のエリス辺りが気まぐれで死者と賭けでもして負けたんだろう。

きつとカズマが会つたと言つた様子で芳香はアクアに近付き

もう待ちきれないと言つた様子で芳香はアクアに近付き

「素敵ない子選んだね！」

同じ魔法使いとしてはお父さんと同じ烈火のエレメントのあの子を応援したいけど、

頑張つてねアクア様！

これ、私のレンジャーキー！」

そう言つてマジピンクのキーを渡す芳香。

「……!?!いや待ちなさいあなた何か勘違いしてない？」

「うんうん分かるわアクア様！」

初めての恋って素直になれない物よね?

でも安心して。このキーを託すからには恋のキューピットである私がついてるも当然!」

「いやそうじゃないわよ!

まさかアンタ私がかズマに惚れてるとでも思ってる訳!」

「違うの?」

「違うわよ!なんで女神の私が!」

「勇者候補と!?ある訳ないでしょ!」

「ほぼ毎日一緒に夕飯食べに行って隣で寝てたのに?」

「それは不可抗力って言うか!」

「あれくらい素敵な人はそう居ませんよ?」

「だ・か・ら!」

「はいはい終わりませんから!」

そう言って割って入ったダークグリーンの上着の茶髪の男は

「あんたは救急戦隊ゴーゴーフアイブの!」

「ゴーグリーンの変鍾です。」

ピシッと敬礼し、レンジャーキーを渡す。

そして最後に

「我々にできるのはここまでです。」

「テイラノレンジャーゲキ！あなたまで！」

一体どうやって!?! そう問いただすと三人ともバツの悪そうな顔をして

「いや、ブラックコンドルの結城凱先輩がズルしてエリス様に七回連続ポーカーに勝った褒美ってことで…」

「七回目で遂にばれちゃってたけどね。」

「それまで俺たちもエリス様も全く気付かなかったが…」

全くエリスってば情けないわね。

それで無駄にパットの癖に肩張ってるから女神の約束を反故にできないとかで七回分我儘聞かされたの何回か分がこれって訳ね？

「俺たちの力、あなたに託します。役立ててください。」

「ええ。有難く受け取っておくわ。」

そして私は目を覚ました。

このドMクルセイダーと魔王軍撃退を！

1

俺、佐藤和真と七海総一さんは何かクエストを受けようとギルドに来ていた。

「あ、カズマにソウイチ。おはようございます。」

「おはようめぐみん。」

「ああ、おはよう。」

今日はジョーは一人で息子に剣を教えるに欲しいと言う依頼を受けてある裕福な家に。リアは隣のエリス教会の聖歌隊に一人病欠が出てしまったとかでピンチヒッターに。

そしてルカはアクアの看病で残ってくれている。

「という訳で、どれのクエストを受けようか？」

カエル…は先日の件が有るから遠慮しておこう。

今の俺にはブラックコンドルのキーが有るからいざとなれば射程外まで飛んで逃げるけどけどそういう問題じゃない。

他のクエストもみてみると

『森に悪影響を与えるエギルの木の伐採。

報酬は出来高制。

迷子になったペットのホワイトウルフを探して欲しい。

魔法の実験台を探しています。

※要、強靱な体力が強い魔法抵抗力を持つ方に限る。』

「じゃあこの魔法の実験台ってやつ行ってみようか。」

「いや総一さん!？」

「正気ですか!?!死に行きたいんですか!?!」

「なんでだよ?」

マジシャインの鎧が有れば何も問題ないだろう?」

「日銭を稼ぐためにあのかっこいい鎧を使わないでください!」

めぐみんの猛抗議に渋々引き下がる総一さん。

「じゃあこの起動要塞デストロイヤーの偵察か、

魔王軍行動隊の偵察のどっちかに」

と総一さんが言いかけた所で

「すまない。ちよつといいだろうか?」

掲示板の前に立っていた俺たちに声を掛けて来たのは、

女騎士。

それも飛び切り美人の。

ぱつと見身長170cmで、

金髪碧眼に金属の鎧を着こんでいる。

「このメンバー募集はまだやっていないだろうか?」

鎧を着こんでいてわからないが、

相当なグラマーなんだろう。

それにしても、なんでかな?

凛々しいのになぜか加虐心を煽られるって、見とれてる場合じゃない。

「そうですけどあなたは?」

「私はダクネス! ^{ナイト}騎士の上級職のクルセイダーだ。

先日そのウィザードの少女が気絶してるのを君が連れてるのを見た!

弱きの盾になるのがクルセイダーの役目!

ぜひ私をパーティーに入れて欲しい!」

胸に手を置きながらグイグイ迫って来る。

言ってることはまともなクルセイダーなんだが、

なんだろうこの強烈な違和感は。

「いいんですか？かなり問題のあるパーティーですよ？」

爆裂魔法しか使えないアークウィザードに、

打撃効かないモンスターに打撃技で向かって行くアークプリーストに

最弱職の冒険者のパーティーですよ？」

「おまけによくつるむパーティーは

雷魔法しか能のない冒険者に

敵を見たらどんなに不利でも突っ込んでいくソードマスターに

防御無敵の代わりに攻撃全然できないランサーに

人型じゃないモンスター相手にロクに戦えない盗賊ときてるがどうする？」

「な、なんだその理想のパーティーは！

戦闘中にどんなトラブルが起きるか想像するだけでエクスタシーが……」

「今エクスタシーって言ったか？」

「言っていない。」

「今エクスタシーって言ったよな？」

「言っていないな。」

「今エクスタシーって言いましたよね？」

「言っていない。」

俺たち三人はこのクルセイダーに、

ダクネスに聞こえないように話し合う。

「あの人、落ち着いたお姉さんかな？」

と一瞬思ったけど……」

「私の考えてることが正しければ……」

「まさか、ドマゾなのか？」

三人で振り返り、まるでボールを待つ犬みたいな顔でこつちを見てくるダクネス。

「どうする？」

「一回クエスト受けてみて考える、

というのはどうでしょう？」

「まあそうだな。

性格アレでもめぐみんなみたいにある局面では役に立つてくれる能力があるなら、まあな？」

2

なんて思っていた時期が俺にもあったよ……。

やあ画面の前の諸君。七海総一だ。

俺たちは今最悪の事態に遭遇している。

「スゴスゴスゴ！まさか偵察任務に鈍重、しかもロクに攻撃系スキルを取ってないクルセイダーを同行させるなんてお前ら馬鹿スゴ！」

・・そのやけに饒舌な強め^{スゴ}の雑兵^ゴの言う通りだった。

彼女、クルセイダーのダクネスはきつと生まれついでの子のドマゾだったのだ。

捕まる直前、彼女はこう言っていた。

「世界征服を企む魔王軍に捕らえられる女騎士…相場を考えれば私がどうなるかなど明白！」

ああ・考えただけで武者震いがあ！いつてくりゆ！」

そして偵察任務のはずなのにスゴーミン三体とゴーミンの群れに飛び込んでいき、

攻撃にこそ耐えていたがまともに一撃も浴びせられず数に押されて捕まって今に至る。

「ああ…素晴らしい！シチュエーションだ！」

カズマ！ソウイチ！めぐみん！

遠慮なく置いて行ってくれ！

私のことなど気にせずいつそ爆裂魔法でもぶつ放してくれ！」

そして捕まってなおこれである。

こいつ、下手したらあの風邪引き女神より頭おかしんじゃないか？
だつて見ろよ。

捕まえた側のスゴーミンやゴーミンたちも若干引いてる。

「どうしますカズマ？ やつちやいますか？」

爆裂魔法撃つちやいますか？」

「そうだなさつさと殺つちまおう。」

和真はやけに早口で言うためぐみんを抱えて全力で走りだした。

「え早ーてか和真ちよつとまつた！」

そう言えば和真の奴ジョーから腕力強化と脚力強化のスキル教わってたんだっけ？

冒険者だとそこそこスキルポイントくうけど、

それなりに実用性と有用性有るから取つてる冒険者は多い。

「なーま、まてえー！」

高速移動モードに変形可能なスゴーミンは兎も角、

普通のゴーミンに追いつかれるような速度ではない。

そして人質を連れているスゴーミンはどうしてもゴーミンにスピードを合わせるし
かない。

和真は一瞬振り向いて俺が安全圏にいると確認したんだろう。

「めぐみん！今だ！」

「ふふ！本来ならちやんとカツコよくポーズ取って決めたいところですが魔王軍とのデッドレースなんてそうそう出来るものではないので良しとしましょう！」

エクスプロージョン。

人は人類が出来る最強の破壊の大輪をそう呼ぶ。

レンジャーキーの加護がなくてもその威力は絶大だ。

ド派手な爆音をバツクに吹き抜けていく爆風に吹っ飛ばされる和真とめぐみんだったが

「クロスチェンジャー！」

〈ジエー！ツトマン！〉

ブラックコンドルに変身し、空中でめぐみんをキャッチし、華麗に降り立つ。

「さて、総一さんとダクネスは？」

「お前の左足の下だ。」

見下ろすと爆風にまきつ込まれて半分土に埋まった総一さんが喋っていた。

「うわああ！大丈夫ですか!?!」

「何とか五体満足だ。で、あのドマゾだけど…」

俺たちは爆裂魔法が炸裂した後のクレーターを見下ろす。

その中心ではゴーミンの残骸に埋もれたダクネスがアへ顔快樂に負けた面、抜け面を晒している。

「こ、これが爆裂魔法……まるで物の様に無理やり空にぶん投げられる感覚に、着地の衝撃、後から降って来る瓦礫や土……しゅごいいい……」

「よどみねえな。」

「よどみないな。」

「よどみないですね。」

俺たちは三人同時に呟いていた。

一周回って変態女と罵倒するより、

表彰ものだなと感心さえできる。

「貴様らあ！よくも部隊を全滅させてくれたな！

許さんぞー！」

どうやらしぶとくも生き残っていたスゴーミンがいるらしい。

数は二体。なら、アレが有るか。

「めぐみん、走れるか？」

「まだきついです。」

「じゃあモバイレーツ貸してやる。」

変身すれば、後で反動来るけど少しは体力も補助される。」

「助かります。」

ダイナピンクに変身するとめぐみんはクレーターの底に滑り降りていった。

「和真、前にレンジャーキー使った時に頭痛がしたことってあるか？」

「え？ありませんけど？」

「じゃあ覚悟しろ。」

俺は懐からゲキレッドのレンジャーキーを投げ渡し変身の構えを取る。

「……っ！これっ、て？」

「いろいろ流れ込んできたろ？」

俺はレッド以外のキーで結構そうなる。」

レンジャーキーからそのレンジャーのデータがラーニングされる時、

相性によって頭痛がする。

俺の場合レッドのキーと、和真の場合ブラックのキーと相性がいいらしい。

「それじゃ行くぜ！ガオアクセス！」

サモン！スピリットオブジァース！」

「たぎれ！獣の力！ビースト・オン！」

俺は百獣の力を授けられた戦士に、

和真は激獣拳の正義の力の戦士に姿を変えた！

「灼熱の獅子!ガオレット!」

「体に漲る無限の力!

アンブレイカブルボディ!

ゲキレット!

「燃え立つ激気と!」

「正義の雄叫び!」

「スーパー戦隊ビーストレット!見参!」

俺はライオンフアングを、和真はゲキセイバーを構えてそれぞれゴーミンに対峙する
!

「牙吠!」

腕がデカい分、大降りになるスゴーミンの攻撃を軽快に交わしカウンターパンチを叩き込む!

「しゃ!よくわかんないけど!

ニツキニキのワツシワシで戦うぜ!

二本のゲキセイバーでスゴーミンの攻撃をいなし、

守り、生まれた隙に刃を滑り込ませていく!

「ならこれスゴ!」

二体いるうち片方が高速モードに変形し、

その上に乗ったもう一人が上空から砲撃を仕掛けてくる。

「うおお！和真！タイミング合わせよう！

俺は上！お前は下だ！」

「了解！」

俺はライオンフアングをしまつて、

フアルコンサモナーアローモードを構える。

和真もゲキセイバーを一つに合体させる。

スゴーミンどもが接近してくる・・・今！

「フアルコンサモナーアローモード！」

俺は仮にスゴーミンの狙撃を食らったとしてもコースも威力も落ちないパワーでエ

ネルギーの矢を放つ！

上に乗ったスゴーミンを見事撃ち落とした！

そして残った一体を

「ゲキセイバー！波波斬！」

横一文字の必殺斬りが炸裂！

二つに分かれたスゴーミンは背後で派手に爆発した！

「ふう…お疲れ。」

「うっす。」

変身を解除し、レンジャーキーを返却される。

「それじゃめぐみんとダクネス拾って帰りますか。」

「だな。」

この銀髪盗賊からスキル伝授を！

1

「アクア様ふっかーっ！」

翌日の昼、俺たちは全快したアクアと、新たに仲間になったダクネスと共にクエストを受けにギルドに向かったが

「カズマ！カズマ！」

「カズマです。」

「白狼の群れの討伐！一撃一撃がすさまじく気持ちいい」

「却下。病み上りがあるんだ。」

駄目に決まってるだろ。」

「くう！正論で無碍にされるのもまたっ！」

「カズマカズマ！」

「カズマだよ。」

「これはどうですか？一撃熊の討伐！」

「それこの前ジョーさんがやりに行こうって言って総一さんとリアに全力で止められて

た奴じゃねーか!

ダメに決まってるだろ!」

「カズマカズマ!」

「カズマです。」

「これとか良いじゃない!」

鏡から出て来る人食いモンスターの討伐!」

「それ作者の前作な!」

このssちゃんと世界観新しくなってるからな!

ていうか、いつもより危険な依頼の方が多いい気がするんだが、なんでだ?」

俺は依頼選びを三人に任せて他の冒険者たちから話を聞くことにした。

「それでなんか知りませんか?」

「そうだな、俺が聞いた話だと魔王軍の幹部がこの辺りに引越してきたらしくてさ。

それで行動隊も結構な数付いて来たらしくてな。

それで弱いモンスターは怖がって隠れちゃったらしいぞ。」

俺は礼を言っつて三人の元に戻る。

「て、こことらしい。」

「そうか、だとするともうジャイアントトードの討伐ぐらいしか残ってないぞ?」

めぐみんは兎も角アクアが拒否反応を起こしたのでその日はクエストを受けないことにして

「なあ、気になったんだけど皆はどんなスキル持ってるんだ？」

この三人の持つスキルの中で俺でも使えるような物はないだろうか？

因みに総一さんのパーティーは総一さんがマジイエローのキーを使い続けた影響で使えるようになった雷魔法が中級までで、それ以外に身体強化系のスキルを取ってて、

ジョーさんも同じようなラインナップだ。

あの人はスキル無しでもかなり強いが。

リアは神器使りの事が多いからあまりスキルを取ってないとか。

「そうだな。私は各種異常耐性、

物理耐性など防御スキルは大方全て取っている。

鎧なしでもそこらのモンスターの殻より硬い自信があるぞ？」

「攻撃系スキルは？」

「取らない。簡単に勝ってしまっってはつまらないからな。

もつとこう、ギリギリで踏ん張って蹂躪されてしまう感じがたまらな」

「よし分かったためぐみんお前はどんなスキルを持つてる？」

「もちろん高速詠唱や爆発系魔法威力上昇など最高の爆裂魔法を撃つためのスキルです！」

「中級魔法とかを取るつもりは？」

「ありません。浮気はしませんから。」

「そうか、これからもこのパーティーの最高^{切り札}火力として期待してるぞ。」

「はい！」

「くう！同じ一点特化なのにこの扱いの差、いい！」

勝手に興奮してるダクネスを無視して俺はアクアにも問いかける。

「お前はどんなスキル取ってるんだ？」

「私？最初からレベルもスキルポイント高かったからプリーストスキルと宴会芸スキルと水系魔法は全部取ったわ。」

「水系魔法！いいじゃんそれ！」

後で総一さんから雷魔法教えて貰えば組み合わせたりで応用できるかも！

教えてくれよスキルポイント少な目でお得なやつ！」

俺の期待の込めた顔に気を良くしたのか、

アクアはコップを取り出す。

「……しようがないわね」。言っとくけど、

私のスキルは半端ないんだから！

本来ならそう簡単にホイホイ教える物じゃないんだから！」

なんだか無駄にもったいぶった言い方。

ちよつとムカつくが教えを乞う身なのでここは我慢だ。

「それじゃあまず、クリエイトウォーター！」

アクアは初級の水生成魔法、正確には空気中の水分を純化してかき集めてるんだろうけど。

で、コップに水を入れる。

「さ、まずはこれを頭の上にのせて。

落とさないようにね？」

少し人目は気になったがまあこれからお得なスキルを教えて貰う訳だから我慢だ。

「そこに一発でこの種を指で弾いて入れるとくくあら不思議！コップの水を吸い上げて種はニヨキニヨキと……」

「だれが宴会芸を教えろって言ったこの駄女神いい！」

「ええー！？」

何故かショックだったらしいアクアはテーブルに撃沈した。

しょんぼりしながら種を手で転がし始める。

「あっはっはっは！面白いね君！

君がダクネスが入りたがってたパーティーの人？

有用なスキルが欲しいなら盗賊スキルなんてどうかかな？」

急に横から話しかけて来たのは、

隣の席に座った革の鎧を着た女の子だ。

ほおに小さな刀傷が有るちよつと擦れた感じだが、

サバサバした明るい雰囲気的美少女だ。

(あれ？どこだったかな？この子見たこと有る気が…)

「クリス！」

「ダクネス知り合いか？」

「ああ。私の友人でな。そうだな、

防御スキルを取らないつもりならば非クリスに盗賊スキルを教わると良い。

畏発見、畏解除、敵感知などスキルポイントが少なく済むスキルばかりだからな。」

「今ならクリムゾンビア一杯でいいよ？」

クリムゾンビア一杯でスキル伝授。

親切で言ってくれてるみたいだし、

それに総一さんのパーティーと違ってうちには盗賊いないし丁度いいだろう。

「すいませーん！この人に冷えたクリムゾンピアを！」

2

俺たちは冒険者ギルドの裏の広場に出ていた。

途中で会った総一さんにジョーさん、リアも一緒に立ち会っている。

「さて、まずは自己紹介だね。」

私はクリス。見ての通りの盗賊だよ。

そっちの三人は？」

「俺は七海総一。冒険者。」

「相性良かった雷魔法と火の初級魔法以外はそこのジョーと同じラインナップを取ってる。」

「ジョー・ギブケン。正進怒涛流の剣士だ。」

「職業はソードマスター。五刀流までなら使えるぞ？」

「私はリアです。特技は歌で、職業はランサー。」

「神器頼りなんであんまり強いスキルはとってないです。」

「我が名はめぐみん！」

「紅魔族最高の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りし者！」

「私はダクネス。クルセイダーだ。」

硬さには自信が有るから遠慮なく肉壁として使ってくれ。」

「うつつす!佐藤和真です!職業冒険者!」

よろしくお願いします!」

しつかりと挨拶を終え、俺のためにみんながスキルを見せてくれた。

え?アクア?落ち込んだまま動きそうになかったから置いて来た。

「まずは俺の雷魔法だな。」

と言っても和真には初級のこれしか使えないと思うけど。」

そう言っつて総一さんは手を軽くグーパーするとジョーさんの首筋に向けて指を向け

る!

「いったあ!何する!?!」

「実演なんだからやって見せなきゃ。」

ムカデに刺された程度には痛いだろ?」

「.....ああ、それじゃあ俺の筋力強化スキルも見せないとな!」

「え?いやジョー?」

それは背骨が折れぎやあああああー!!」

.....よし。雷魔法と筋力強化はオツケーだ。」

「え、えっとそれじゃあ私のスキルですね！」

リアが見せてくれたのは俊敏強化スキルだ。

最速の職業に相応しいスピードを上げるスキルで、
軽快なダンスの様なステップを披露してくれた。

「最後に私の盗賊スキルだね。

取り合えず敵感知と潜伏やろうか。

ダクネス、ちよっと反対向いてて。」

そう言われて反対を向いたダクネスから離れて、

歩いて行った先にあつた樽に入り、

上半身だけを出し、小石を投げる。

ダクネスの頭に当たつた。振り向く瞬間に樽に隠れる。

……まさかこれが潜伏スキル？

「潜伏スキルは触れてる人にも使えるよ！」

次に敵感知、敵感知……！

ダクネスの怒りのカオスをひしひしと感じるよ！

え？いやまって怒ってる？怒りすぎじゃない？

わ、分かつてるよね？これはスキルを教えるために仕方ないやあああああああああ

あああああ!

ぐるぐるぐるぐるまわってるうううううううう
隠れていた樽ごと転がされて悲鳴を上げるクリは。
こんなんでスキル習得できるの?
!!!

3

「そ、それじゃあ最後に窃盗^{スティー}だね。」

これは一押しのスキルで、相手のレベル差や使用者の幸運値にもよるけど、相手の持つてる物をどんなものでも一つ奪うことが出来るスキルだよ!

例えば相手の武器とか、大事にしまってる切り札とか!」

おお!それは期待できる!

俺は幸運値だけはブツチギリで高いんだ。

それを生かせるのなら強力な武器になってくれるだろう。

「それじゃあ早速やってみよっか!スティー!」

クリスの手が光り、俺のポケットが軽くなる。

「ああ!俺の財布!」

「どう?いいでしょスティー。それじゃあ財布は……」

そこでクリスはニヤリと笑い

「ねえ、ここは一つゲームをしない？」

「ゲーム？」

「カズマがステイールを使って私から持ち物を一つ奪っていいよ。

この薄い財布より私のほかの持ち物の方が服一つでも高価だしね。

何を盗ってもこの財布と交換。どう？」

な、なんだそれは！この世界に来てから変身して洗脳されたアクアと戦ったり魔王軍と戦ったりしたけど、冒険者同士のそれでは一番冒険者らしいかんじだ！

こういうのをやりたかったんだ！

「ほう、見ものだな。」

「いいのか？法律に触れないか？」

「俺らが黙ってりゃいい。」

五人は観戦に回るらしい。

干渉してくるつもりはないらしい。

「よし乗った！何盗られても泣くんじゃねーぞ！」

俺は冒険者カードを取り出し、スキル欄を見る。

雷魔法（初級） 1ポイント

水魔法(初級) 1ポイント

潜伏 1ポイント

敵感知 1ポイント

窃盗 1ポイント

筋力強化 2ポイント

俊敏強化 2ポイント

花鳥風月 5ポイント

……この花鳥風月ってまさかアクアのあの宴会芸か?

たいそうな名前だしスキルポイント高っ!

これ一個で今あるスキルポイント全部使っちゃうじゃねえか!

俺は1ポイントで済むスキルを全部取る!

「よし、覚えたぜ!行くぞ!」

「いいねいいね!今なら財布が敢闘賞、

大当たりはこの魔法を付与したダガー。

40万は下らない逸品だからね!

で、外れはさっきダクネスにぶつけるように多めに拾っておいた小石だよ!」

「ああ!きつたねえ!そんなのアリかよ!」

「これも授業の一環だよ。どんなスキルも万能じゃない。

こうやって対策可能だし、そこのお兄さんみたいにスキル無しでも強い人だっている。

覚えておきたまえ。さ、行こうか！」

畜生再認識したよ！

ここは弱肉強食の世界。

日本の様にはいかない、騙される奴が悪い世界だ。

「でも俺、勝てない賭けと納豆だけは食べない。

やってやるぜ！運の強さ見せてやる！ステイール！」

半分は凱さんからの受け売りだが啖呵を切ってスキルを発動！

俺の手にないか握られる。

一発で成功してくれたらしい。

俺はそれを広げてマジマジと見つめる。

それは…

「え？あれってまさか…」

「い、衣類も持ち物に含まれるのか…」

「な、なんと！」

空飛ぶキヤベツ狩り

1

スキルを習得し終え、店内に戻ると唯一置いて行かれたアクアを中心に人だかりができていた。

「アクアさん！お願いです！」

幾らでも出すんでもう一回！もう一回花鳥風月を！」

「何言つてんだよ！金より飯の方がいいですよね？」

俺、何でも奢りますよ！」

「そう言つて宴会芸をせがむ冒険者たちにアクアは駄目よ。」

小粋なジョークはその場限りだから面白いのよ！

うけたからつて同じ芸を何回もやるのは三流芸人。

それに私は芸人じゃないからお金は受け取れないわ！」

アクアにしてはまともな事を言つてるような気がする。

「ふーん。芸か……おい！お前ら注目！」

急に総一さんが声をあげた。

「ここにいる俺の自慢の後輩が早速習得した窃盗スキルを使いたいの事だ！
宴会芸の女神！ちよつと実験台になってくれよ！」

「おー！それは良いね。」

さあ！私のパンツの次は何を盗るのかな!？」

総一さんだけじゃなくてクリスまで何言ってるんだ!？」

ああ、周囲の女性冒険者と一部男性冒険者から刺さるような視線が！

「お、おいクリスお前！」

「これ位の復讐はさせてね。」

と小さくウインクするクリス。

「ま、そのカズマにステイールを伝授したのはこいつなんだがな。」

「ちよー！ジョーさん！」

一部女性達がクリスの事も白い目で見始めた。

「か、カズマにクリス羨ましい！」

私もみんなにあんな冷たい視線を……ッ！」

「ダクネス貴方……」

「ジョーさん？なんで私の目を塞ぐんですか？」

「リア。まだお前には早い世界だ。

これでお前を俗世間に染めちまったとなればルカに合わせる顔がない。」

そして仲間からも散々な扱いを！

「へえ〜？カズマ、夜中に先輩と潰れるまで飲んで探しに行った私を路地裏で乱暴する以外にそんな事までやってたんだ？」

「ええ!!？」

「アイツそんな事まで・・・。」

「お前まで誤解を招く言い方するんじゃないやねえ！

あれは最初暴れたのお前だろ!!」

もう頭きた。周囲の男性冒険者のステイールコールも、

女性冒険者からの視線も気にするか！

もうなるようになれ！

「アクア、その態度は何盗られても文句ないって意味だな!？」

「もちろん！低レベルのカズマに負ける訳ないじゃない！

そうね…失敗しても三回までなら笑わないであげるわ!」

「その言葉忘れんなよ！ステイール!」

まず一回目！俺の手に赤い人形のようなものが握られる。

「レンジャーキーー！」

「な!?せ、成功したの!？」

しかも私のティラノレンジャーのキーー！」

いきなり大当たり!
ジャックポット

さてはアクアも寝込んでる間に凱さんみたいな人に会ってたな。

それで貰ったんだろう。

「さーて、アクアさんよ?あと二回!良いんだったな!」

「ま、待って!」

「ステイール!」

続いて俺の手に緑色のレンジャーキーが握られる!

前に総一さんに見せてもらったゴーピンクのキーに似てる、ゴーグリーンか!

「よしよし!それじゃ最後の一回!」

「ま、待ってカズマ!お願い!お願いよ!

もう最後の一本しかないの!こ、これ以上は!」

「女神が泣きごとと言うな!ステイール!」

最後の一回!今度も硬い感触が・・・感触が?

「なんだ?最後だけ柔らかい肌触りが!」

俺はそれを広げて掲げると

「いよっしやああああ!!!」

最後の最後も大当たりだあああ!」

「いやあああああああああああああああ!」

パンツ返してえええええ!!!」

「だれが返すか!」

男の下着はただの布だが女の下着は家宝にできるんだよ!」

一応聖布ってことになるから神棚にでも飾っておくかなあ!?!」

「う、うわあああああああ!」

カズマが意地悪するううう!!!」

流石にアクアがギャン泣きしたところで男性冒険者からも俺を非難するような視線が向けられだす。

流石にやりすぎたか?

……………と、その時

『緊急クエスト!緊急クエスト!』

街にいる冒険者の皆さんは至急ギルドに集まってください!』

街中にアナウンスが響き渡った。

原理は魔法なんだろうが、この世界にも拡声器ってあったんだな。

「ジョー、リア。ルカは今日なんかクエスト受けてたか？」

「いや、特になかったはずだが？」

「宝石店で鑑定のバイトでもしてるんじゃないですか？」

「なら行けるな。蛮族か、モンスターか、それとも魔王軍か。どれだと思う？」

ついさつきまで誰よりも悪乗りしていた総一さんが一気に真面目モードになる。

半年だけとは言え、先輩冒険者とあつて面構えは中々だ。

「どれでもない。多分キャベツの収穫だろ。」

「は？きや、キャベツ？」

「キャベツってあの、緑色の丸っこい奴で、

千切りにして揚げ物の付け合わせとかになつてるアレか？」

「アレだ。」

「それを取りに街中の冒険者総出で農家のお手伝いに行くのか？」

困惑する総一さん。

そりやそうだ。俺だって困惑している。

リアだってなんだかよく分からんって顔をしている。

しかしジョーさん以外の冒険者は、

なんだか浮足立ってるように見える。

「まさか、お前の住んでたニッポンとかいう国のキャベツは飛ばないのか？」

「野菜が飛んでたまるか！てかなんだそれ！？」

「この国のキャベツは飛ばぬのか!？」

「外側の葉っぱが羽みたいになるとかですか？」

「ああ。にしても飛ばないキャベツがある国か。」

「流石はニッポン。根っこを食べる国は違うな。」

「だからアレはゴボウって言ってれっきとした食べ物だ。」

「とにかく行くぞ。魔王軍よりは楽な仕事だ。」

倒せば経験値になるし、捕まえて持っていけば、

近年は出来がいい年が続いてるから一玉7000エリスは下らないぞ。」

「キャベツ一個に7000エリス!？」

「そんなにするんですか!？」

そう言つて困惑する総一さんとリアを引つ張つ張つジョーさんは店を出ていった。

2

「何が悲しくてキャベツと追いかけてこしないでいけななんだよ!」

「文句言うな！一玉100000エリスだぞ！」

ジョーさんの叱咤を背中に聞きながら俺は早速覚えた潜伏スキルを使って潜み、敵感知で動きを補足。

そして窃盗で他の冒険者を攻撃するキャベツを回収するを繰り返していた。

「お願いキャベツマスター！こつちにも手を貸して！」

「キャベツマスター！こつちも！」

「その見知らぬ魔法使いと剣士！」

俺に不名誉なあだ名付けんじゃねえ！

助けにいつてやらないぞ！」

「お願い後でスキル教えてあげるから！」

その言葉忘れんなよ！

と叫び俺は2人のもとに駆け付ける。

もうこんなことを10回は繰り返していた。

キャベツの群れとそれを追ってやって来たモンスターの数は留まることを知らない。

「めぐみんの方はうまくやってるんだらうな？」

これは後から聞いた話だが

「よーはあーそらそらー！まだまだ行くわよー！」

「キャベツより断然やりがいあるぜ！はあ！」

「くうううう！雲霞のごとき敵！」

猛スピードで容赦なく突っ込んでくるキャベツ！

この感触たまらないっ！」

めぐみんを高い所に配置した総一さん、ルカさん、ダクネスの三人はキャベツを追ってやって来たモンスターを一か所に集めていた。

「真面目にやればかドマゾ！」

「んっっっ!!！」

ダクネスが悦んでるのはもうあきらめた二人は他の冒険者たちと協力し

「頼むぞー！」

「ふっふっふーそれでは！」

義を貫きし魂の爆裂道を極めし勇者たち、

科学戦隊ダイナマン！

今こそその加護を我に！

見るがいい！感じるがいい！後悔するがいい！

汝らが受けるは我が力のみにあらず。

星を救いし1つの英雄譚！

そしてこれより最強を証明する伝説の序章！

『エクスプロージョン』ッ！』

ダイナブルー、ダイナイエロー、

ダイナピンクのレンジャーキーのパワーを上乗せした爆裂魔法をぶっぱなす！

これは俺も遠目に見ていたが、レンジャーキー3本でもそれは天を焦がし、物を消し飛ばし、見る者を圧倒する破壊の炎嵐だった。

「はは！相変わらずとんでもねえ威力！」

ルカ大丈夫か？啞然としたまま動けないぞ？」

と言った具合に各々キャベツ狩りを思い思いに有効利用していた。

「うひゃあ！あ、アクアさん話してください！」

キャベツが！キャベツが迫ってきますから！」

「嫌よ守って！」

あなたの神器なら守れるでしょおー！！」

アクアはまあ、リアに散々迷惑かけたらしい。

単独任務と女神の危機

1

キャベツ狩りから数日。

俺たち冒険者に報酬が支払われた。

「分かんねえ。なんでこうなるんだ？」

キャベツで小金持ちになっちまった。」

「そんなに？」

私らはモンスターの相手してたからそんなに貰えなかったわ。」

そういつて話しかけて来たルカさんの指には新しい指輪がはめられている。

そりゃ金もなくなるわ。

「まあ、俺もそんなに多くないな。

あぶく銭だしさっさと使っちゃおうか。」

「ソウイチお前本気か!？」

60000エリスだぞ！そんな一気に何に使うんだ？」

「この前付けにした分を引いても550000エリスは余るから…また酒かな？」

「・・・俺が飲ませといて悪いが、

お前な、金は酒のためにいるんじゃないぞ？」

「ああ知ってる。金は天下の回り物だ。

だからどつかに回って行かないうちに使っちゃまうのさ。」

「金の切れ目は縁の切れ目だぞ。

リア、お前は どうする？」

「槍が古くなってきたので買い替えようかと。」

「どうやら総一さん達のパーティーは大体金の使い方を決めてるらしい。

俺は、特に決めてないな。

「カズマカズマ！」

「ダクネス？ どうした？」

「この前の報酬で鎧を新調してみたんだが、どうだ？」

「なんか、成金の悪趣味って感じになったな。

ボンボンが見栄で着てそう。」

俺が思ったままを述べるとダクネスは以外にもしゅん…と項垂れて

「カズマはいつだって容赦がないな。

私だって素直に褒められたい時ぐらいあるんだぞ？」

なんだこのめんどくさいDM。

会って一週間足らずで分かる訳ないだろ。

「それより問題なのはあそこで新品の杖に頼りしてるアイツじゃないか？」

そう言つて総一さんが指さす先を見ると

「はあ……はあ……はあ……はあ……」。

この、魔力溢れるマナタイトの杖……たまらないです！

これでキーの力も上乘せして爆裂魔法を放てば！」

あの爆裂脳は何やら高ぶつて仕方ない。

あの調子ならレンジャーキーを使つて爆裂魔法を撃つても歩いて帰つてこれるん

じゃないか？

「なあ、マナタイトつて魔力増幅器の事か？」

「いや、絡繰りじゃない。鉱石だ。」

「少量でも効果が有つて、

今回の報酬ならまあまああの量買えるかな？」

と説明する2人。

それにほー、とうなずく俺、総一さん、リア。

「あとはアクアだけか。」

「ざつと10000000」

「「「ひや、ひやく！」」」

驚きたじろぐ五人が下がったが、アクアは前に出て

「ねえカズマ！アンタって、こう……えつと、えつと！

良いところいっぱいあるわよね！

例えば……ほら！あー、きつちり意見することか！」

「褒めるところが思い浮かばないなら褒めるな。

言つとくけどもう使い方決めてるから一銭も貸さないぞ？」

「お願いよカズマああああ！

私今回の報酬が相当になると踏んで有り金全部使っちゃったの！

ついても1000000ぐらい貯まっちゃってるの！

つけ払える分だけでいいから！

お願いよカズマ！カズマさん！

アナタだけが頼りなの！可哀そうな私を助けてよ！

かっこいいブラックレンジャー！」

本当に後先を考えない女！

抑えたこめかみがジンジンと痛い。

「お前なあ…今回の報酬は山分けにしないで各自の分ですって言いだしたのお前だからな!?」

と言うか、いい加減拠点が欲しいんだよ!」

「別にいいじゃない!」

拠点持つてる冒険者なんて窓の外のアイツぐらいじゃない!」

それはその通り。

持つてる総一さん達が特別、

言い方悪いが奇特で、普通は馬小屋暮らしだ。

だけどレンジャーキーを持つ以上、誰でも入ってこれる馬小屋では防犯上よろしくない。

「だ、だけどお……」

「はあ、アクア言わせてもらおうけど、

定住も出来ず、まともに自分で財産も管理できない様な奴が魔王なんて倒せるのか?

お前帰りたくないのか?」

流石に皆の手前、天界という単語は使わなかったが意味は伝わったらしく、ピシッと動かなくなるアクア。

「例えばジョーさんにめぐみん、あとダクネス。

三人とも合理的とは言えないが自分なりに自分の一番の武器を理解してそれを伸ばしている。

使い勝手は悪いけど、

ある局面ではまあ違いなく役に立つ。」

私の事をそんなふうには？

とでも言いたげにうれしそうに満面の笑みを見せるめぐみん。

子どもは素直でよろしい。

ダクネスとジョーさんはめぐみん程素直じゃ無いが、嬉しそうだ。

「それに比べお前はなんだ？」

出来ることと言えば回復魔法。

近接戦闘向きじゃないから通常戦闘ではとてもレベルは上がらない。

しかも自己管理も出来ず、強い冒険者たちを纏めるようになりリーダーシップも無し。

時々悪乗り過ぎるけどしっかりあの三人を纏めてる総一さんややるべきところ

しっかりアシストしてくれるルカさんやリアより役に立っていると云えるか？

ま、いいさ。

回復魔法だけで魔王に挑みたいならまず馬車に乗れるお小遣い貯めなきやな。

商店街の親父がコロツケの売り子探してたぜ？

応募してみれば？

面だけはいから採用されるかもよ？」

そこまで言つてアクアの方を振り向くと、目に涙を溜めに溜めたアクアが光る、拳を

：

「ゴッドブロオオオオオ！」

「へばああああ！」

想いきり殴り飛ばされた俺は転がりながら地面に倒れ伏した。

「いいわよーつけぐらい自分で払つてやるわよー！」

たまには元anntたらの実力でも見せてやろうじゃないの！

アンタの前に大金を積んでやろうじゃないの！

カズマなんていなくても出来るわよー！ばーか！

女子に殴られて死ね！」

俺は一切身体を動かさないからわからないが、

アクアが何やらまだ怒鳴り散らしながら去つて行くのが分かった。

「な、なんで？」

「いやカズマ。仮に事実だとしても私でもあそこまで言われればああするぞ。」

「正論は暴論より人を怒らせる。だな。」

2

ようやく回復した俺、七海総一は、ぶち破った窓を弁償すると三人の元に戻った。和真たちはと言うと、アクアは一人で依頼を受けて残る3人は手頃な物件を探しに行ったらしい。

「さて、俺らはどうしようか。」

「どうするも何も、もう手ごろな依頼は残ってないぞ。」

なんでもこの先の丘を登ってきた所に有る廃城に魔王軍の幹部が来たせいらしい。

「……ん？ 待てよ。じゃああのレタスの女神が一人で受けられるようなクエストって

…」

「さっき和真さんが言ってたように商店街のバイトぐらいしか…」

少し嫌な予感がしないでもなかった俺は受付のお姉さんに聞いてみた。

「なあレディ。さっきこんぐらいの身長の青い髪の毛の泣き虫プリーストが依頼を受けていかなかったか？」

手で高さを示して、分かりやすい特徴も説明する。

「アクアさんですか？」

でしたらお一人で湖の浄化に。」

湖の浄化。

なるほど確かにプリーストにしか受けられないクエストだ。

「ヤバイな。」

「ヤバイですね☆」

「ルカさん？」

「え？あ……んっんん！

兎に角、それだったら助けに行った方がいいわね。」

「助けに？」

「穢れるとは言えただの湖なんじゃないんですか？」

「そういう場所には好んで住むモンスターがいる。」

「しかも群れでね。」

浄化すればどっか行っちゃうけどそれまでは永遠追いかけてこよ。」

「……………どうします？」

「ふむ、そうだな……………」

3

「ううう……………うう！カズマの馬鹿！

あんなにボロクソ言わなくてもいいじゃない！

私を誰だと思ってるのよ！

アクシズ教の御神体にして水と癒しの女神アクア様よ！

あんな口をきいたことを後悔させてあげるんだから！」

私は、アクアは胸にたまったモノを全部そこに吐き散らしながら湖を目指したわ。

もうそうでもしないと色々我慢できなくなる気がして、兎に角！

私は歩いて歩いて湖を目指したわ。

それでその途中で

「ドッゴーン！いいから寄せ！」

1つの村が魔王軍の小隊に襲われていたの！

（赤いスゴーマイン？）

初めて見るけど行動隊長はいないみたいだし、私でも！」

「やめなさい！」

私は略奪を続ける魔王軍の前に飛び出して言っちゃったわ。

「私はアクシズ教の御神体にして水と癒しの女神アクア！」

これ以上私の目の前で乱暴狼藉続けようものなら女神の鉄槌くらわすわ！」

「はあ!?何言っちゃがる？」

頭のおかしいアクシズ教徒の相手などするだけ時間の無駄だ。

「ゴーミンども！」

「「ゴー！」」

私はまず向かってきたゴーミンの殴打を避けてその汚い尻に一発蹴りを入れてやったわ。

次に来た奴は腕を蹴り上げて武器を離れたところを奪ってあのダサイバケツ頭を殴り付ける。

そして最後に着た三体目はいなただけだった最初の一人が戻って来た時に盾にして二人まとめて蹴り倒す！

「こんなものかしら？」

「ほう、頭はおかしいが冒険者としては中の上って所か。

ゴーミンども、ここは俺がやる。押収を続けろ！」

「略奪の間違いでしょ！」

私は渾身の左ストレートを繰り出す！

「ふん！悪くないが所詮女の細腕だ！」

「嘘でしょ！」

腕を掴まれた私は脛、膝、脇と蹴りを食らい

「いったい痛い！髪を掴まないで！あぎゆうー！」

事も有ろうに私の御尊顔を殴りやがったわこいつ！

もう手加減してやる必要はないみたいね！

「こんのお！……ゴツドブロー!!!」

「そんなもんか！」

赤いスゴーマンは槍を取りだして稲妻を繰り出した。

「う、うわあああああー!!!」

流石のダメージに私は吹っ飛ばされたわ。

幾らこの服が神衣で、この羽衣が一級品の神器でも私に合わせてスケールダウンして
るわけだから流石に防御面ではあんまり当てにならない。

「ふんー！」

そこらの冒険者にしてはよくやったと言ってやるが、

所詮そんなもんか。ゴーマンども。

後はお前らで適当に楽しんで捨ててやれ。」

バケツ頭達がまるで寝る前にごそごそしようとする時のカズマのような目で私を見
てくる……え？いや嘘でしょ？

ま、まさかそんなエツチな漫画みたいなことしないわよね？

いくら原作の私が抜けないからってそれは無いわよね？

「い、いやあ！ヤダ助けて！」

スカート引つ張らないで！助けてカズマ！

カズマ様ー！！」

「呼んだかアクア！フリーズ！」

目の前のゴーミンに氷結魔法を浴びせながら現れたのは、

真後ろのゴーミンにラリアットを浴びせながら現れたのは、

横のゴーミンにキックを浴びせながら躍り出たのは、

「カズマ！ダクネス！めぐみん！」

「遅くなってすまん！」

「一人で突つ走るからですよ。」

パーティーなんですから私たちも道連れにしてください！」

そう言つて私に手を差し伸べる2人：私泣きそう。

「ひつぐう…ありがとう、あ、り、がどお、お、お、！」

「泣く元気が有るんならお前も戦え！」

たく、おいそこの茹蛸みたいに真つ赤なの！

女から無理やり…：奪おうとするなんて持てない奴のすることだぜ！」

そう言ってモバイレーツを取り出すカズマ。

「その神器は！ゴーマンども！奪え！」

赤いスゴーマンの命令でカズマに向かって突っ込んでくるゴーマン

「正進怒涛流、真空十字斬り！」

「おらおらどいたどいた！」

「はあ！はあ！」

「はあああああああ！」

二本の海賊刀を構えたジヨーが、

黒鞘の細い両刃剣を構えた総一が、

潜伏スキルを使って死角から現れたルカの矢が、

リアの薙刀がゴーマンをせき止める！

「貴様らは、賞金首の逆賊ども！」

たじろぐ赤いスゴーマンに堂々と告げる総一。

「おい色違い。」

あのポンコツ女神は俺の後輩の玩具なんだよ。

勝手に遊んだからにはなあ、

しつかりレンタル料払ってもらうぜ！」

そう言つて私とめぐみんにモバイレーツを投げてよこす。

「感謝しますソウイチ！」

「うお！貸一つにしてあげるわ！」

そして私、めぐみん、カズマと並んだところで。

「そのクルセイダーさん！」

「私か？」

「これを！」

村の神父らしき男がダクネスにもう一つモバイレーツを投げてよこしたわ。

「これをどこで!？」

「つい数日前エリス様の信託と共に」

「感謝をささげよう。」

ダクネスも加えた四人で並び立つ私たち。

私とダクネスは総一からレンジャーキーを受け取り

「ダイナブルー！」

〈ダイナブルー！〉

めぐみんはダイナブルーに。

「デンジスパーク！」

〈デーンツンジマン！〉

カズマはデンジブルーに

「爆竜チェンジ！」

〈アーツバレンジャー！〉

ダクネスはアバレブルーに

「ブルードルフィン！」

〈ラーツイブマン！〉

私はブルードルフィンに変身！

「スーパージン！」

「『ブルードルフィンジャーズ！』」

さあ、反撃開始よ！

魔劍の男

1

戦闘が始まった。

半分は生身で戦う総一さん達が引き受けてくれている。

もう半分は俺たちの仕事だ。

「ブルーfrisビー！」

「ドルフィンアロー！」

めぐみんとアクアは遠距離武器で遠くの敵を

「デンジパンチ！」

「トリケラバンカー！」

俺とダクネスは近距離戦で進む！

「オラオラオラオ~~オ~~オラオラ！」

「退け退け退けえ！」

「うおおおおおアバレモード！」

「今よ！ダクネスに続いて！」

アバレモードの猛進に続いて俺はデンジスティックで弾き洩らしを、
アクアとめぐみんはライブラスターとダイナロッドで遠距離から狙う敵を倒しながら色違いのスゴーマンにむかって進む！

「調子に乗るな！」

自ら槍をもつて挑んでくる赤いスゴーマン。

まず突っ込んできたダクネスを投げ飛ばし、

次いで近接で飛びついて行ったカズマとめぐみんを旋回斬りで吹っ飛ばす。

「この！ライブラスター！」

「効くかそんなもの！」

槍から赤い雷を放ちブラスターのエネルギー弾を弾きながら私にヒット！

「きゃあああああ！」

「ドッゴーン！」

この魔王殿下直属の親衛隊であるこのドゴーマンがただのスゴーマンに手こずる奴らの寄せ集めが変身してたつて敵う筈が無かるう！」

「くっそ！強いな……ダクネス。」

一秒でいいからアイツを抑え込んでくれ。

作戦が有る。」

「わかった！本気爆発！アバレモード！」

再びアバレモードになったダクネスがドゴーミンに組み付く！

「む！まだ悪あがきを！」

「それはどうかな!? 『クリエイト・ウォーター』！」

俺はドゴーミンの顔面に水流を浴びせる！

「ぶっふ！み、水!?!」

「よくやったわカズマ！ゴッドプロオオオオ！」

「うばあ！」

怯んだすきにアクアのゴッドブローが炸裂する！

「俺がやりたかったのとは違うけどナイスと言っておくれアクア！」

『ライトスパーク』！」

顔を抑えてまだ狼狽えるドゴーミンに雷魔法を当ててやる。

「うううお!?!」

ずぶ濡れの顔を電気が走り、さらに混乱したところを

「喰らえアバレイザー！」

「ブルーフリスビー！」

動かないとなれば攻撃スキルの無いダクネスでも当てられるのか、アバレイザーのエ

ネルギー弾とブルーfrisビーが胸部に炸裂！

「まだまだお代わりだ！『フリーズ』ッ！」

「ーッッッウ!!!」

顔を氷結させて視界を奪う！

「流石カズマ！何というサドで鬼畜な作戦！」

「よくやったわカズマ！」

トドメはブラックに譲ってあげる！」

「よし来た。皆これを！」

俺は三人にレンジャーキーを配る。

「ダイノ！バックラー！」

ダクネスはマンモスレンジャーに。

「ダイナマン！」

めぐみんはダイナブラックに

「爆竜チェンジ！」

アクアはアバレブラックに

「クロス！チェンジャー！」

俺はブラックコンドルに変身！

「モスブレイカー！」

「クロスカタター！」

「スプラッシュインフェルノ！」

「スマッシュボンバー！」

俺とダクネスの強力なビームが炸裂し、最後にクロスカタターを伴った水の竜巻がド

ゴーミンを取り込み！

「ど、ドツゴーローン!!!」

天高く舞い上げ地面に激突させ、爆散した！

「やったー！あ、あれ？」

変身が解除され倒れ込むアクア。

「うわつとと！キャッチ！」

「危ない！」

俺とダクネスでキャッチし、何とか背負う。

「たく、一人で突っ走りやがって。

・・・今日は休ませてやるか。」

「カズマは酷い事遠慮なく言う割に優しいですね。」

「ソウイチに言われるより早くアクアを探しに行こうとしてたしな。」

「うるせえ。俺は、ブラックレンジャーらしいことをしただけだよ。」

「照れてるな。」

「照れてますね。」

「やんやんやと騒ぐ四人を背後に総一たちは散って行ったゴーミンたちを追い立てていた。」

「どうします？」

「今からでも一回モバイレーツ取りに戻りますか？」

「いや、今は帰らせてやろう。」

「ですね。」

2

帰り道、アクセルの街に入った。

「なあダクネス。いい加減腕が疲れて来た。」

「アクアおぶるの代わってくれよ。」

「駄目だ。今回のアクアの独断先行にはお前にも責任の一端が有るんだから最後まで面倒見るんだ。」

「ドMの癖にまともな事言いやがって……」

「ドMは関係ない。」

そんな話をしながら歩いていると

「アクア様?! アクア様ではありませんか!

いったいなぜこんなところに!?!」

急に人ごみの中から飛び出て来た紫の鎧の男がアクアに駆け寄ってきた。

「おい! 私の仲間! 何の用だ?」

ダクネスが前に出る。

そのどこに出しても恥ずかしくない真剣そのものの眼差しと雰囲気は立派なクルセイダーだ。

普段からもう少しでいいからこうでいてくれたらいいのに。

男はダクネスを一瞥すると、厄介ごとは嫌いだが出方ないとも言いたげに首を振る。

普段は受けの方が好きなダクネスも力チンと来ている。

俺はアクアをめぐみんに預けると

「お前、アクアの知り合いか?」

ダクネスを諫めながら前に出た。

「そう言う君こそ何者だ?」

「佐藤和真。立派な先輩に何故か気に入られただけの最弱職の冒険者だよ。」

「…………と、いう事は君も日本から？」

僕は御劍響夜。ミツルギキョウヤ レベルは37。

職業はソードマスター。アクア様から魔劍グラムを頂いた者だ。」

なるほど、多分俺の時とは違ってあの一番最初の営業モードのアクアにこっちに送り込まれたクチか。

「さて、自己紹介も済んだところで要件をいいかな？」

アクア様は何でそんなにポロポロなんだ？」

俺はざつとアクアを連れてきた経緯や今までの事を説明すると

「……馬鹿な。あり得ない！君は何を考えてるんだ！」

女神をこの世界に巻き込んでしかも一人で魔王軍と戦わせるだなんて！」

俺はいきなりミツルギに胸ぐらをつかまれる。

それを見たダクネスが止めに入ろうとするが

「君は最低だな。どう丸め込んだか知らないが、

アクア様への不当な扱ひ、見過ごすわけにはいかない。」

それより先に今度は両手で俺の胸倉をつかみ上げる。

「貴様さつきから黙っていればなんなんだ！」

初対面で礼儀知らずにもほどがあるぞ！」
ダクネスがミツルギの手を捻り上げる。

めぐみんもアクアを背負つて都合上何も出来て無いが、
居殺さんばかりの鋭い視線を向けている。

「クルセイダーにアークウイザード？」

しかも随分綺麗な人達じゃないか。

彼女らも馬小屋に住まわせてるのかい？」

パーティーメンバーに恵まれてるくせに恩知らずだね。

そう言い放つとミツルギは2人の方を向き

「君達、僕のパーティーに入ってくれないかい？」

ソードマスターの僕にクルセイダーにランサー。

盗賊にアークプリーストにアークウイザード。

今からでも魔王を倒しに行けそうなお誂えなパーティーじゃないか。」

「断る。カズマ恩知らずかもしれないが、

礼儀知らずでは無い。それにこれでも騎士の端くれ。

仲間は裏切らん。」

「ダクネス、ダクネス。」

ちよつとアクアを預かっていてください。

今の私でもレンジャーキーでブーストかければ一発なら爆裂魔法撃てます。」

めぐみんそれは辞めろ。俺たちも死ぬから。

てかお前ら……てつきり心少しは動くかと思つたが全然そんなことないじゃねえか。

どうやら俺はミツルギの言う通り仲間に恵まれたらしい。

「どうやら、寝てるアクアは兎も角、

それ以外も満場一致でお断りみたいだぞ？

話はここまですべてことごとく

そう言つてまたギルドに向けて進もうとした時

「どいてくれますか？」

「断る。僕に力をくださったアクア様が劣悪な環境にいることを見過ごせない。

……なあ、君は転生特典としてアクア様を選んだんだよな？

この魔劍の様に。」

「そーだよ。」

漫画やアニメでよくある展開的にこの後の事が想像できてしまう。

こいつ、この後絶対………！

「この魔剣と、アクア様をかけて勝負しないか？」

「よし乗ったさあ行くぞ！」

俺は即答すると腰のブリンガーソードを引き抜き、

一も二もなくミツルギに斬りかかった。

いい加減頭に来てたし、レベル20も差がある相手に、

しかも格下に上級職が最弱職に勝負を挑む方が卑怯つてもんだ。

「え、ちよ……ま、まて！」

流石に返事と同時に攻撃されるとは思わなかっただろうが、そこはベテラン。

俺の剣を避けながら素早く魔剣を引き抜く。

『クリエイト・ウォーター！』

俺は水魔法を唱え、ブラインドにする。

平で受けるミツルギだが

「ステイール！」

手にはしりと重い感覚。

やっぱり一発で成功してくれたぜ！

呆けた顔で無防備になったミツルギの頭に俺は容赦なく魔剣を叩き下ろした。

漫画だったら頭の周りをヒョコが飛び回ってる様な状態になったミツルギが九十度

に倒れる。

「はあ……………」

「は、はは。流石カズマです。」

もうこう、存在自体が道化師のような男ですね。」

「褒めても何も出ないぞ？」

「アクアの全快祝いまではな。」

新拠点と呪いのシャワシャワ

1

「ふわあ〜よく寝たあ……あれ？」

起きるとそこは見知らぬ部屋だったわ。

確か私は…あの後ドゴースンとか言うのを倒した後過労がたたって…

「アクアアアアア!! 助けてアクア様ー!!」

「え?! な、なに!?!」

見ると真つ青の顔をしたカズマとめぐみんが転がり込んで来たわ。

2人とも寝間着姿で肩で息をしている。

「二人とも大丈夫!?! 何があったの!?!」

2人は呼吸を落ち着けるとぼつりぼつりといきさつを説明してくれた。

「昨日、臨時収入があったからそれとキャベツ狩りの1000000000エリスと合わせて

このいわゆるつきの物件を買った訳だよ。」

「家具付き一軒家で、時々貴族の隠し子の亡霊が悪戯するぐらいならアクアがいればど

うにかなると思っただんですが……」

「昨日！まさにお前がダウンしててダクネスがいけない間に現れやがったんだよ！心霊現象が！」

曰く変な気配を感じてそっちを見ると初めからはそこになかったはずの人形がじつとこつちを見ていて、

無視しようとしてもどんどん増え始めて逃げ出したはいいが、

どんなドアにもロックがかかり、

窓を突き破ってみようにも窓という窓に人形がまるで黒いGの様に埋め尽くす様に蠢いている有様で眠れぬ夜を過ごしたらしい。

「あんの幽霊人様が墓場の手入れまでしてやったのに恩をあだで返しやがって！」

「次奴らが現れたらターンアンデッドを願いますね!？」

飛び切り強力な奴を！

「まあ、それは良いけど…一個質問いい？」

「なんですか？」

「さっきこの家を買ったって話の時に臨時収入って言ったじゃない。

それなんなの？」

すると急に黙り込んだカズマとめぐみんはゆっくりと視線を合わせ

「……言っちゃいます？」

「できれば言いたくない。」

2

ヤツホー皆。カズマだよ。

話は昨日に遡り夕方。

俺たち4人は不動産屋と話をつけて屋敷を購入した。

「悪いなダクネス。金貸してもらっちゃって。」

「構わん。金は持ち続けてたって仕方ない。」

使うべき時に使わないとな。」

そう言ったダクネスを先頭に屋敷に入ろうとした時、

「あ、いたわよキョウヤ！」

「見つけた！サトウカズマ！」

2人の女性冒険者を連れてやって来たのは、名前は忘れたが前に喧嘩ふっかけて来た紫の鎧のアイツだ。

「なんだ、お前か。」

思いつき殴ってやったにしては元気そうだな。

何の用だ？」

「何の用だじやないわよ！」

「キョウヤの魔剣を返しなさい！」

話を要約するとズルして勝ったんだから魔剣を返せ。

との事だ。

「格下に勝負を仕掛けて置いて都合が悪くなれば約束を反故にする。

本当に都合の良い話だな。」

珍しくダクネスからキツめの言葉が発せられる。

まあ、初めから反りが合わなそうだったからな。

「そ、それは自分でも思う！」

けどアレがないと駄目なんだ！

君が腰に下げてるその剣以上の物を用意する！

スキルだって幾らでも教えるし、

出来る事ならなんでもする！

だから魔剣を返してくれ！」

深々と頭を下げた懇願するミツルギ。

するとめぐみんがツンツンとミツルギを突き

「？ なんだい？」

「まずこの男がもう魔剣を持っていない件について。」

サーッとみるみる青くなっ行って行くミツルギ。

「さ、サトウカズマ？ ぼ、僕の魔剣はどこに？」

「売った。」

「チクシヨーーーーー!!!」

3

薄暗いどこかの地下。

一人のロープの女が黒いケータイ、

ダークモバイレーツを取り出す。

番号を入力しどこかに連絡する女。

「デンソーツノー。」

『はい。』

「ソウジキジゲンを寄こせ。」

『了解いたしました。』

その短いやり取りの数秒後に女の背後に一体の次元獣が現れた。

「ソウジキジゲン。ここに。」

深々頭を下げるソウジキジゲンに女は一瓶のポーションを握らせる。

「これでこの街を混乱させてやれ。」

「ははあ！」

去って行くソウジキジゲン。

女はダークモバイレーツをしまうとロープを脱いで表の顔に戻った。

4

「んく！んく！ぶはあ〜〜！」

ひつさびさのシャワシャワは格別ね！」

「お前ホント好きだよな。程々にしとけよ？」

「いやよ！風だなんだでどれだけお預けを食らったと思ってるのよ？」

その分思いつきり飲むのよ！」

「もう、今日はクエスト受けてないんですよ？」

「まあ、見てて気持ちのいい飲みっぷりではあるがな。」

丸一日かけて家の手入れや呪いの原因の除去をやった俺たちは大衆食堂でちよつと

贅沢な飯を食っていた。

マツ……なんとかとかいうやつからパク：正当な報酬としてもらい受けた魔剣が結

構いい値段だったので明日までなら食っていける計算だ。

「シャワシャワのお代わりお待たせしましたって和真！」

シャワシャワを運んできたのは赤いタオルを頭に巻いた総一さんだった。

「バイトですか？」

「ああ。この前魔王軍の幹部が来てるって言ってたろ？」

それでいよいよクエストがなくなっちまってさ。

ジヨールは変わらず子供に剣を教えてて、

ルカは宝石店で鑑定の手伝い。

リアは昼間はドンと、ドンってのはウチの馬な。

と荷運びの仕事と今晚はバーで歌手。

俺は見ての通りバイト。」

「平均レベル20後半のパーティーでもそれですか。」

「そうか、となるともう私らは実家に帰って筋トレぐらいしかやる事がないぞ？」

「確かに日銭稼ぐ以外はやることないな。」

明日からどうしようか？

もちろんダクネスに借りた分はそのうち返すつもりだし、何もしい訳にはいかな
い。

「それより店員さん？早くお酌してくれないかしら？」

「へいへい神様仏様女神様。」

「よろしい。」

上機嫌でジョッキを煽るアキラ。

こいつ本当に酒好きだな。

「うふう！なんかこのシャワシャワちよつと甘くない？」

「甘くないって全部飲んでるじゃないか。」

「甘い？おかしいな。他のお客に出してるのと変わんないのを出したはずなんだけど

……ま、いつか。

「ごゆっくり〜」

空き瓶をもって去って行く総一さん。

幸運値だけは高い俺はなにか日本の食べ物でも作って売れないかな？とか考えながらマツカランを飲んだ。

5

「それで？いったい何作るの？」

三日後。バイトの傍ら色々考え、調べた結果、

俺はあんパンを作ってみることにした。

刑事ドラマやあの赤いスーツにマントのヒーローの頭部でおなじみのあのあんぱんだ。

この屋敷のキッチンなら結構器具が整ってるから色々出来ると思ってたんだ。

「あー、確かにこの世界にも小豆は有るし、

甘いし子供受けもよさそうよね。」

「と、いう訳でめぐみんが総一さんと一日一爆裂に行ってる今、俺とお前で試作品を作ってみようと思う！」

と、思ったんだけど、アクアお前料理できるのか？」

「私を誰だと思ってるの？」

アクシズ教の御神体、水と癒しの女神アクア様よ？

家事炊事繕い物に宴会芸と一通りできるわ！」

何でその人通りに宴会芸を含めるのかは極めて謎だが期待できそうだ。

「よし、それならまずあんこから作って行こうか！」

「ラジャー！」

昔家庭科の課題で作った事が有ったのでそれを思い出しながらやっていく。

小豆を何回か煮て、豆が割れたら芯がないかチェック。

なければ少しづつ水を入れて冷やし、砂糖を加えて炊く。

それから潰して何個かに分けて冷やし

「完成！」

「砂糖がちよつと高いのがネックね。」

「そうだなあ……ま、とりあえず最後まで作ってから考えよう。」

パン生地をこねて粉を振った台の上に寝かせ、それが済んだらあんこを加えて成型し、発酵させてからゴマは手に入らなかつたのでり用に卵を塗って焼く。

「あ、おいしそう。」

「初めてにしちやうまく出来たかな？」

「それじゃあ食べてみようぜ。」

何気に日本にしかない料理を随分久しぶりに食べたような気がする。

と言うかこつちに来て初めてなんじやなからうか？

「ん〜うまい！」

ただのあんことパンをこんなに美味しく感じるとは！

「これが郷愁つてやつかな？」

「きやまがてづだったにしへはじようへきへ。」

もつきゆもつきゆと口いっぱいに頬張ったアクアが何やらもごもごとやっている。

「喋るか食うかどっちかにしろよ。」

この世界のキャベツじゃないんだから逃げて行かないぞ？

ほらあんこついてる。」

俺はアクアの頬に着いたあんこを指ですくって舐めた。

「え!?!か、カズマ!?!」

「カズマだよ?」

「い、今のつて!」

「なんだよ。」

「……いい、いえ、何でもないわ!ダクネスには悪いけど、とつとけないし、あんぱんリアたちにでも配っちゃいましょう!」

「あ、ああ。そう、だな。」

アクアの奴どうしたんだろうか?

急い様子がおかしくなったが、なんだ?

(ヤダどうしよ……相手は、相手はあのカズマよ!?)

それなのに……何よ、この、胸の高鳴りは……)

ワニと浄化とアトラクション

1

翌日、一応俺、カズマにアクア、めぐみんと3人で依頼を見てみたのだが
「何かありませんか？」

「こう、気持ちよく爆裂魔法で敵を一掃できるクエストは！」

「例えばリザードランナーとか、魔王軍の小隊とか！」

「はあ!?!めぐみん何言ってるの!?!」

「あ、アクア？」

「今はタンク役のダクネスがいないし、

爆裂魔法しか遠距離攻撃の手段がないのよ!?!」

「カズマを敵陣のど真ん中に放り込んだ上に爆裂魔法を浴びせるつもり!?!」

「と、アクアにしては至極真面目な意見で没になった。」

「アクア、なんでしようか。」

「こう、ずいぶん必死ですね？」

「え、ええ!?!」

い、いやそんな訳ないじゃない！」

分かりやすく嘯みまくりながらそっぽを向くアクア。

焦りまくって真つ赤になって隠せてるつもりなんだろうか？

「どうせ自分が受けた湖を浄化するクエストをあわよくば俺質に手伝って欲しいってとこだろ？」

「そうなんですか？」

「え？…そ、そうよ！浄化って言ってもね、

寄ってくるモンスターとかいたら大変なんだから！」

なるほど。

そう言えば総一さんが俺たちにアクアを追うように言った理由もそれだったな。

「それで、浄化ってどれくらいかかるんだ？」

「半日。」

「長っ！」

そんなにかかるクエストを一人でモンスターから逃げ回りながらやるつもりだったのか？

本当に考え無しというか、その場の勢いに流されやすい奴め！

「それで？その浄化って具体的にはどうやるんだ？」

「私が水につかるだけでいいわ。」

「コップ一瓶程度のそれなら触れなくても出来るけど流石に湖ともなるとね。」

「ふむ……なあ、今思いついたすつこくいい方法があるんだけどやってみるか？」

2

「ねえ本当にこれでやるつもりなの？」

「何が不安なのか全く分からない。」

「これほどまでに完璧な計画に一体何が不安があると言うのだろうか？」

「何にも心配する事なんか無いって。」

「だからその手を離してくれよ。」

「俺まで水に浸かる必要はないんだから。」

「そんなやり取りをかれこれ10回以上檻の中で繰り返していた。」

「どう思いますか？」

「どう考えても希少モンスター用の檻に入れた女の子を穢れた湖に漬けるなんて色々駄目だと思う。」

檻を持つていく為に借りた馬のドンの持ち主のリアが言った様に俺はアクアを簡単にはモンスターに壊されない檻に入れて漬けようと考えたのだ。

そうしたら湖にも触れていられるし、怪我する心配も限りなく無い。

「でももう借りて来ちゃった以上レンタル料も払っちゃってるし、ここまで来て帰ったらギルドからの心証も悪くなるだろ？」

「そ、それはそうだけどき！」

……わかった。カズマも一緒にいてくれてるならいい。」

「ヤダ。」

「なんでええええ!?!」

「あのな！お前だけなら兎も角俺は水に浸かっちゃったら自分感電来ちまう雷魔法やそこら中水だらけの中で火や水や土なんて役に立たないし俺程度の魔力だった氷結魔法も眼球凍らせるぐらいしか出来ないの！」

狭い中じゃ筋力強化も俊敏強化も意味無いの！」

何も出来ないの！」

陸にいてお前がギブアップした時に引つ張り上げるぐらいしか！」

「私だつてこんな檻の中でモンスターにゴッドブローなんて当てられないわよ！」

お願いカズマ！居るだけでいいから！」

「はあ……仕方ない。リアー！めぐみん！浸けてくれ！」

パーー！と笑顔になるアクアと共に俺は汚い湖に浸けられた。

帰ったら靴を洗って乾かさないとね。

「ね、ねえカズマ? こうして2人つきりになるのって、

最近はまだまあ有るかもだけど、それまでは結構無かったわよね?」

「え? ……言われてみればめぐみんが仲間になってからお前が暴れて風邪引いたりキャベツ狩りあったりなんだからそうだったな……」

思えばアクアとは一番長い付き合いだけど、あんまり冒険以外の話はしたこと無かったかな?

「カズマはさ、今好きな女の子とかいるの?」

意外な話題のふられ方だ。

あんまりそうゆう面がある様には見えなかったが、

アクアもまた女子ってことかな?

「今んとこいないぞ。」

引き……登校拒否になったのもまあ、

失恋が遠因だったりするからな。」

「そうなの!?!」

「そうだよー。」

「……へエ、じゃあ今フリーなんだ。」

「フリーだけでも好きな子とか出来ても今は戦いとかに巻き込みたくないかな。」

懐からブラックコンドルのレンジャーキーを取り出す。

こいつを持つてる限り魔王軍との戦いは避けられない。

なら無関係な人間を関係者にするのは本意じゃない。

「そう…アンタ、ゲスで元ヒツキーで下着ドロで調子乗って落とし穴踏み抜けど、いい人ね。」

「褒める以上に貶してるじゃねーか。

それに出かけて死んだんだからヒツキーじゃないし、ステイルは持ち物の中からラウンドムなんだからアレは事故だ。」

そんな自己弁護をしていると湖の奥の方から何か、小さな波と影が幾つも向かって来た。

「もしかしてあれがこの世界のワニか？」

群れで行動するのか!？」

「だから言ったじゃん！」

こんな紅茶パックみたいなのは嫌って言ったじゃん！」

ワニは一糸乱れぬ動きで檻を取りかかむとガジガジと鉄格子を噛み始めた！

『『ピュリファイケーション』！』

『ピュリファイケーション』!!

『ピュリファイケーション』!!!

命の危機を感じたアクアは一心不乱に浄化魔法をかけ始めた。

「くっそ!これ意外と怖いな!『フリーズ』!」

俺は近くにいたワニの眼球に氷結魔法をかけてみる。

ワニはめちやくちやに暴れてその長い鼻先が檻をしたから持ち上げる!

「う、うわああああ!」

「いやああああ!ミシツていった!

メキっていった!

檻が立てちやいけない音立てたあああ!」

「和真さーん!アクアさーん!

ギブアップならいつてくさいねー!」

「すぐに引つ張り上げてあげますよー!」

「い、嫌よそんなの絶対!」

「この苦勞を無駄にしてたまるか!

アクア!浄化魔法!浄化魔法を!」

「分かつてるわよ!『ピュリファイケーション』!」

『ピュリファイケーション』 んんんん!!!

そして、浄化開始から七時間が経過……見事なまでに、水面と地面の境目が分からなくなるほどに透き通った水面に半分浸かったアクアと俺はズタズタのまま何とか呼吸をしていた。

「……二人とも大丈夫ですか？」

「……うぐう……ひつぐ……えつく……」

「だいいじよばない。」

あのワニ、ブルータルアリゲーターは水が綺麗になるとどこかに去って行った。

けど俺は兎も角アクアはそれなりにトラウマを負ってしまったらしい。

「それじゃあ帰りましょう。」

さつきリアと話し合っただけですけど、

今回のクエスト報酬は2人に全部上げますから。

さつきとそこから出て帰りましょう？」

「そうだな。もう今日は帰って休もう。」

そう言って立とうとした

俺の服の裾をアクアが弱々しくつかんだ。

「アクア? どうした?」

「いや、行かないで。」

「行かないでって…お前檻に残るつもりかよ？」

「これじゃあ帰れないぞ?」

「いや。外の世界は怖い。このまま街まで連れてって。」

「「ええ……」」

2

「ルールルルルル」

出がらし女神が運ばれていくよー♪

きつとこのまま売られていくよー♪

がんばれ私……。」

「……アクア、いい加減出ようぜ?」

俺たち街中から好奇の目で見られてるぞ。

ていうかなんで俺までいなきやいけないんだよ?」

「一人は怖い。孤独死は嫌なの。」

それと同じくらい外の世界は怖いわ。

「ここが私の聖域よ。」

「聖域に逃げてもつけ払わなきやだぞ！」

あーもー出るぞ！こっち来い！」

「いやああ！引つ張らないで！」

俺はギルドの前まで来たところでアクアを引つ張て外に出た。

めぐみんとリアに降りの返却を頼み、

報酬の3000000エリスを受け取って二人と合流。

昨日も行った総一さんのバイト先に向かった。

「はあー、災難だったな。」

「そのろ過装置女神に付き合わされて。」

「誰がろ過装置よ！」

力をあげて転生させてあげた恩も忘れて！」

「ああ感謝してるよ！」

無理やり書類に指紋押させて異世界に！」

それもロクに使い方の説明もしないまま魔王軍が狙ってる力を持たせてスタート地点に立つだけで半年かかる鬼畜ゲーに放り込んでくれて有難うな！」

それだけ捲し立てると料理を置いて総一さんは去って行った。

「まったく。女神に対する感謝が足りないわ。」

「いやアクア？」

「是も非もなく無理やり尻拭い押し付けたのはお前だからな？」

「うっ！……それは、悪かったわよ……。」

目に見えてシユン……とするアクア。

「なんだ？ こう、うまく言えないが今日のアクアはどこか変だ。

「アクアは今日なんか、少し大人しいというか……ですね。」

「え？ そうかしら？」

「そうなんですか？ 普段を和真さん程知らないんでよく分かりませんが……」

リアのその発言を聞いたアクアはびくっ！と震えるとリアの方を向き、

「待ってリア。それどうゆう事？」

「？……別に、時々運びのクエストで会ったりすることが多いだけですけど……」

「ふーん……。」

なにやら疑うかのような目でリアを見るアクア。

今の会話にどこか不自然なところがあつただろうか？

「ふふーん、なるほど。リア。ちよつと来てください。」

「え？ どうしたためぐみん？」

「いいからいいから！」

お金を置いて去って行くめぐみんとリア。

いったいどうしたというのだろうか？

「ねえカズマ！」

2人が見えなくなるとアクアが大声をあげた。

「ど、どうした？」

「今日のクエストの事でさ！私に言う事が有るわよね？」

「クエスト？ああ、お前一人だけあの地獄のアトラクションに放り込もうとしたことか

？」

「そうそう！だから付き合いなさい！」

「？ 何にだ？」

「兎に角明日一日よ！良いわね？」

炎のコンドル

1

やあ皆！七海総一だ。

魔王軍幹部がこの街に城を構えてから一週間が経とうかという今日。

俺は信じられない物を見ていた。

「アクア？何で手をつないでるんだ？

迷子になるほど混んでる訳でも、

そんなに寒い訳でもないだろ？」

「え!?…それは、そんなの…ま、まだ怖いからよ！

わ、ワニとか、思い出して……」

「そ、そうか…悪かったな。」

「う、ううんいいの！気に、しないで。」

眼球に何か呪的な何かが巣くつてなきや俺の頭がついにいかれたかのどつちかだな。

和真とあの駄女神がデートしてる。

あの周囲からパンツ狩りのカズマとかサトウゲスマとか呼ばれてる和真と、あの自墮落、無責任、投げやりと女神失格三拍子そろった借金ブリーストのアクアがだ。

「ん？どうしたソウイチ？」

そんなまるで真夏に陽炎の揺れる平原で雪精を見つけたような顔をして。」

驚愕する俺を見て和真のパーティーメンバーの1人、

クルセイダーのダクネスが話しかけて来た。

彼女は俺より年下だが冒険者歴とか職業のランクとか諸々差し引いてお互い呼び捨て、ため口で話す仲だ。

「ダクネス、何も言わずにアレを見る。」

「アレ？あそこに居るのはカズマにアクア？」

「……ん？待ておかしい。」

どう考えてもクエストに行く方向じゃない。

まさか、デート!?あの明日のデート代も葛藤一秒でシャワシャワに変えそうなアクアと獣人までならどんなメスにでも発情するカズマ、通称クズマとがか!?!」

お前の中であのバカ女神そういう扱いなのね。

そして和真は何やったたら三つも四つもそんな呼び名がつくんだよ。

「馬鹿な信じられん。私は夢でも見てるのか？」

「いや生憎、かどうかは分からんが本当らしい。」

俺は同じ様に和真とアクアが並んで歩くのを信じられない物を見る目で見ている紫の鎧の男を指さす。

「む、あの無礼者は…」

「知り合い？」

「ああ。この前カズマに難癖付けてものすごい上からで私とめぐみんを勧誘してきた無礼者だ。」

「ほう、彼が。」

「攻めより受けが好きなの私もアイツだけは生理的に受け付けん。」

「お前が言うなら相当だな。」

そんなやり取りをしていると、

その鎧の男が二人を追いかけて行くのが見えた。

「あいつまさか二人のデートを台無しにするつもりか!？」

「こうしてはおれん。とっちめてくる!」

「待てダクネス。」

今飛び込んでいって騒ぎを起こしたら和真とアクアが騒ぎに気付いて戻って来る。

それはそれでデートが台無しだ。」

「ではどうする?」

「俺たち尾行するんだよ。」

それで現行犯つて所で二人にばれないように的確に路地裏に連れ込んでアクアに限らず回復魔法持ちを今すぐ勧誘しないとイケない状態にしてやるのさ。」

「なるほど・きまりだな!」

かっこいいこと言つてなんだが、

ぶつちやけ俺も二人の事が気になつただけだが、

災い転じてなんとやら。

そんなふうにする事態に巻き込まれるとはこの時露ほども思っていなかった俺であつた。

2

いったい何事になるかと思つたが、特に何かをねだられる事も無く俺、佐藤和真とアクアの買い物は昼の買い出しに費やされていった。

何故かずつと手は繋がれたままだが。

「んー、こつちの肉の方がいいわね!」

なんて言いながらてきばきと食材を選んでいくアクア。

こうして見ると、普段が不断なだけにイメージできないかもしれないけど、アクアは結構家庭的だ。

自分からやろうとしないというだけで。

「! な、なによろじろ見て。なんかついてる?」

「こうして見るとお前結構女子力高いよなって。」

「そ、そう?」

そう言うカズマだつて料理できるじゃない。」

「まあ多少はな。

けどやっぱアクアが作る飯の方が美味しいよ。」

「え!? そ、そう? ……ありがと。」

照れたように口元に手を当て、頬を赤くしながらちよつとそっぽを向くアクア。

「あ、ああ。アクアはその、

昔から自分で料理とかしてたのか?」

「そんなに。天界つて結構なんでも有るから仕事ない時は漫画読んでお菓子食べてごろごろしてたし、誰かにご飯作るとか無かったなあ…。」

ちよつと遠い目をしながらため息交じりに言うアクア。

こつちに来たばかりの時は天界に帰りたいと泣いていたが、なんだろう。

今の顔は天界を思ってるはずなのに詰まらなそうだ。

「毎日死者を送りだすなり書類と格闘するなりほとんど変わらない毎日。」

変わる事なんて言えば少年エースの内容ぐらいね。」

なんか、聞いてると俺の不登校ライフに仕事足しただけって感じだな。アクアの天界ライフ。

「だからその、あんな形でのスタートとは言葉、

冒険とかなんとか色々出来るこつちの生活も気につてるし、ある意味その、感謝、してるのよ?」

俺の顔を覗き込むようにしながらプニプニほっぺをピンクに染める。

あれ?こうして見るとアクアってかなり美人だぞ?

そんなこと思ったの初対面の時以来だけど!

「……………ん!」

俺と目が合うと頬を赤くしたまま目を逸らす。

何今の!え、はあ!?!アクアさんまさか!?

まさかまさかのメインヒロインに名乗りをあげちゃいますか!?

いやぶっちゃけ初対面が初対面だったからちゃんとして見た事なかったけど

!

馬小屋でその、してたときも髪の毛の匂いとか嗅いでみたけど女として見れなくて日本に居た頃読んでたエロ漫画とか思い出しながらしてたけど！

なんでお前のCVが雨宮さんなのかと思ってたけど！

声優の無駄使いだと思ってたけど！

まさかまさかの！あなたが？

ヒロインなの!?!まさかの脈あり一号なの!?!

「なによ呆けた顔して黙っちゃって。」

「い、いや！その、うん。」

アクアの意外な一面が見れた気がして、な。」

誤魔化すわけじゃないけど、その、うん。

以外にもその、アクアが可愛くてとか、言えないし言ったらきもいかな。

うん、変に勘ぐって人間関係に亀裂作りたくはないな。

落ち着けカズマ。相手はあのアクアだぞ？

土木工事で現役土方より荷物を持ち、シャワシャワを一气飲み、藁の上でも秒で涎をたらしながら寝れるあのアクアだぞ？

「ねえカズマ。」

「なんだよ。」

「もし、もしよ？その、私が、あなたを…好きって言ったら、どうする？」
瞬間俺の頭は真っ白になった。

今、今何と言いましたこの女神？

アクアが不安そうに上目遣いに見つめてくる中、俺は動けずにいたが

「あははは、あはははははははははははははははは!!笑える!これは本当に笑えるわ!!!」

ガサガサと耳障りな高笑いで我に返った。

声の方に振り向くと何もなかったはずの場所から緑色のカメレオンのような異形が現れた。

人々は悲鳴をあげながら逃げ惑う。

「あ、アンタは!」

俺の手を握るアクアの手がこわばる。

こいつの事を知っているのか？

「まさか水の女神ともあろう者が薬に造られた感情程度にここまで見事に道化になるとはねえ!本当に格下!」

アクアの感情が薬のせい？

誰かから変な物を飲まされたり、自分から飲んだ場面なんてどこにも…いや待てよ？

そう言えば総一さんのバイト先に初めて行ったときアクアがシャワシャワの味に違

和感を感じて無かったか？

「そ、そんな嘘よ！」

私は薬なんかでそんなことになる訳！」

「別に薬かどうかなんて重要じゃないのよ。

重要なのはあなたが愛を持つかどうか。」

アイ？アイってアイラブユーのラブのことか？

「！カズマ危ない！」

急にアクアが俺を突き飛ばす。

背後から来ていた掃除機みたいな鼻の化け物がアクアに飛び掛かり何かを鼻で吸い取った！

「え？……あ、ああ……あ。」

急に信じられない物を見る様に自分の両手を見ながらその場に崩れるアクア。

よく分かんないけど、なんかマズイ！

「おいアクア！大丈夫か!？」

「カズマ？……どうしよう？

私、さつきまで胸がずつと熱かったのにスーって冷えちゃった…。

ここに、なんもないの。どう、しよう？」

つー…とアクアの頬を涙が伝う。

そして逃げて行って、いや、あの鼻長野郎に吸い取られたかけらを探す様に胸を抑えるアクア。

「アクア！」

「和真！」

逃げて行った人たちの波をかき分けてやって来た総一さんとダクネスが出て来る。

「テメエ、何企んでやがる！」

「実験にどうしても必要だったんだよ。」

女神の力を取りこんで補助に使えば幹部以外でもレンジャーキー二本以上の出力にたえきれるか？つてね。」

そう言つてカメレオン女は二本のブラックコンドルに似た青と白のレンジャーキーを像鼻野郎に放り込む。

「うおおおお！力が、力が漲って来る！」

「これでもつともつと愛を吸い込んでこの星を終わらせてやる！」

「させるかよ！」

総一さんとダクネスがモバイレーツを構える。

俺は…

「二人とも下がっててくれ。」

「カズマしかし?…ツツ!!」

驚いた顔のダクネスと総一さん。

俺は2人の前に出ると

「アクア連れて逃げてくれ。」

おい像鼻野郎!女から愛を奪って泣かせるなんざ…俺が許さねえ!

俺は右手についていたブレスレットのスイッチを押した。

羽が飛び出て、俺の身体は光に包まれる。

「なに!」

「クロスチェンジャー!」

まさか、和真のジェットマン、もつと言えばブラックコンドルとの相性がそこまでよ

かったってことかよ!」

(BGM 炎のコンドル)

俺はプリンガーソードを引き抜き像鼻野郎に迫った!

「無駄だ!」

鼻から強烈な突風を吹きかけられ吹っ飛ばすが、

すぐに空中で身を捻って壁を蹴り、

「バードブラスタ―！」

「うわああ！」

光線をお見舞いしてやる。

今度はアイツが吹っ飛ぶ番だった。けど生温い。

こんな程度で許す気はない。こんなはまだアクアが受けた屈辱の一億分の一だ。

「プリンガーソード！」

「ぐわああああ!!！」

再び近接武器に持ち替え、ダメージの残る部分に二撃、三撃と追撃を加える。

「ええい舐めるな！」

距離を取った像鼻野郎は鼻を俺の首に巻き付けてチェーンスマッチの要領で引っぱり、バランスを崩したところを怪力であちこちに引きずり投げる。

「うわあ！があああああ!!!！」

「カズマ！」

「和真大丈夫か！」

「この程度！」

「ならこれだ！」

像鼻野郎は腕に内蔵された連射銃で俺を攻撃するが、その時に鼻を引っ込めた。

それは悪手だったな！

「やあああああー!!!」

俺はダメージを無視して剣を構えて突っ込んだ。

敵も同じように突っ込んでくる。

『ステイル』っ！」

アイツの持つ剣が俺の手に握られる。

動揺する隙に俺は全力を込めた斬撃を遮二無二繰り出した。

「あが！ぐう！ああ！うわあああー！！」

無様に転がり伏す像鼻野郎。

「オラ立て！」

俺は首根っこを掴んでひったたせるとゼロ距離でバードブラスターのビームを当てて間合いを取り

「コンドル！フィニッシュ！」

必殺の一撃をお見舞いした。

爆風と共に転がって来たレンジャーキーを拾う。

見上げると、爆風の中心からピンク色の光が空に向かって散って行く。

おそらく今回の事のためにアクアにやったような手口で植え付けられた愛が元に戻

ろうとしてるんだろう。

けど空の真ん中あたりで消えている。

所詮、作り物だったってことか。

「……あいつは、逃げたか。」

もうカメレオン女はいなかった。

俺は変身を解除して三人のもとに行く。

「アクア！」

見るとアクアも元に戻ってるようだった。

「大丈夫か？」

「うん。もう胸の変な感じもしないし、ばっちり復活よ！」

お祝いにシャワシャワでも飲みに行きましょう！」

「賛成！」

やっぱアクアは本当に元に戻っていた。

俺へのその、感情も作られたものだったという事だったんだろう。

ま、なににせよレンジャーキーも増えてアクアも元に戻って万々歳だ。

「ほらダクネス！総一さんも！」

「え？」

「い、いや…俺ら今回何もしないし…」

「そ、それにカズマ本気か？」

「本気って？」

何やら歯に物が挟まったような言い方をする2人。

いったいどうした？

「二人がそう言ってるんならいいじゃない！」

ほら、行きましよう？」

「あ、ちよおい！」

俺はアクアに引つ張られるまま街を走った。

それはなんだか、クエストを受け始めたばかりのジャイアントトードから逃げ回った頃を思い出した。

3

取り残された俺、七海総一とダクネスは走っていく二人を見送った。

「なんだったんだカズマのあの態度は？」

「もしかしてだけど、和真はあの駄女神にだけはあのピンクの光が普通に戻ってきてたの見てなかったんじゃないか？」

そう、他のアクア以外の奴らはそれが急に冷めてしまうような感情だったんだろうが、多分アクアのは、半分本物で薬でアクセル掛かっただけだったってことだろう。

「それは、伝えた方がいいんじゃないだろうか？」

「いや、黙っとくべきだろ。後はもう二人の問題だ。」

「……飲み行くか。」

「だな。」

昼間っからだがこの先の事を思うとちよつと面倒な予感がする。

今は、少なくともあの初々し女神さまがご機嫌のうちは取り合えず忘れて居たいと思
い、俺たちは安酒をかつくくらいにギルドに向かった。

1日1爆裂とデュエルポンド

1

アクアは元に戻ってくれたが、

俺たちの生活までは元に戻らなかった。

魔王軍幹部が居座り続けているからだ。

「どうするんだ？」

もう本当にロクなクエストが残っていないぞ？

私としては一撃が凄まじい奴らと戦えるなら大満足だが、防御スキルの無い3人はキツいからな。」

そんな訳でダクネスは時々戻っては来るが基本実家に帰って筋トレ、アクアは総一さんやルカさんに紹介してもらったバイトや内職をこなしていて、俺も何か商売は出来なしかと考えたが、これと言って思い付かない。

「でしたら私に付き添ってくれませんか？」

と、めぐみに頼まれて付き合う事になった。

なんでも1日1回爆裂魔法を撃たないと気が済まないが、街の近くでぶっ放すとまた

守衛さんに怒られるからとの事だ。

流石に2回目は許して貰えなさそうだしな。

「もうだいぶ奥まで来たぞ？ 適当に撃って帰ろうぜ。」

いくらモンスターがいけないとは言え、

あんまり街から離れ過ぎるのも良くない気がするのだが。

「ダメです。取り敢えず街を出る時からずとつけて来てる奴らの隠れる場所がなくなるぐらいまでは！」

シュツ！と杖を向けるめぐみん。

その先の茂みから意外な2人が出て来た。

「ジョーさん！ それにこの前の魔剣の！」

ジョーさんは今日はマントではなく上着を、

アイツは買い戻したらしい魔剣を腰に携えている。

「サトウカズマ。君に頼がある。」

「頼み？」

「ああ。タダとは言わないから、僕と勝負して欲しい！」

またかよ。前に話しかけて来たコイツの取り巻きのクレメアとかいう奴にも言っちゃったが、勝負受けた時点で対等とか知るか。

凱さんじゃないけど、勝負なんてのは勝てるか確信してるから挑んでくるんだろ
うが。

だったら挑まれた側は相手が強さを測り違えてない限り虚を突く以外にどんな勝ち
方があるって言うんだよ？

俺の戦い方を卑怯というならただ若くして死んだだけでチート武器貰ってそれにお
んぶに抱っこで強くなったコイツだって見方によっちゃ充分卑怯だろ？

「これは、あくまで僕のアクア様選ばれた勇者候補としてのプライドの問題だ。
負けたらアクア様を渡せなどとは言わない。」

代わりに、勝敗に関わらず受けてくれたらこれを渡す。」

そう言っただけで来たのは赤いブラックコンドルに似たレンジャーキー、レッドホー
クのキーだった。

「この前魔王軍の行動隊と戦った時に偶然手に入れた物だ。」

先日の掃除機の怪人との戦い、見せて貰ったが、

君たちはこれを求めているんだろ？」

「ふーむ……話だけは聞いてやるよ。どんな勝負だ？」

「デュエルポンドだ。」

答えたのはジョーさんだった。

モバイレーツを取り出し、マジシャインに変身すると

「エンシエントミスティックモード！」

鎧をパージさせて金色の魔人の様な姿に、後で教えて貰ったが天空聖者サンジェルに変身する。

「本来は天空聖者同士の決闘の為のルールだが、女神に選ばれた英雄候補同士の対決だ。構わないだろう。」

ジョーさんは二本の剣をとりだし

「この剣はデュエルポンドソードだ。

魔法やスキルを封じる力があり、

それ以外ではただの剣だ。

まあ、カズマのは元が貧弱だから多少の筋力強化は出来る様に細工してある。」

それで剣が本職のアイツと対等って訳か。

「だがそれだけじゃない。

勝負が始まれば両者は手首にこの鎖を、

マジカルチェーンをつける。

これは勝負が終わるまでは外れない。」

そう言ってジョーさんはロングチェーンの先に腕輪が付いた道具を取り出す。

要は剣でやるチェーンデスマッチか。

「決闘だが、流石に死ぬまではやらせない。」

どちらかが降参するか、力尽きるか、剣がチェーンの範囲外に飛んで行ったらその時点で終了。どうだ？」

俺はジョーさんの言葉に頷き、剣を取った。

予め持っていたモバイルーツやプリンガーソードはめぐみに預ける。

アイツも魔剣を地面に突き立てると鎧を脱いでデュエルポンドソードを構えた。

「天空聖者の名の下、

未来の勇者として誇りにかけて公平なる勝負を。

はじめ！」

最初に仕掛けて来たのは向こうだった。

流石は上級職の高レベル。

スキルも魔法も得意の得物がなくとも怒涛の連撃、見事な剣捌き。

躲す受けるで手一杯だ。

「だったら、これだ！」

俺は上段からの一撃を受けた時に手練り寄せたチェーンを剣に絡ませて、思い切り引っ張る！

「あつ！」

剣は回転しながら天高く舞う。

「まだだ！」

勝利を確信した俺の懷にミツルギが間合いを詰めて来た。

俺の剣を持った手を器用に掴むと俺をぶん投げる！

「うわっ！と！」

起き上がろうとする俺の喉元に剣が突きつけられる。

ミツルギが持っているのは、俺の剣だ。

（太刀取り？）

「ステイルは防ぎ用がないから奪われた剣を奪い返す方法が必要だと思つてね。君と違つて取れるスキルが限られてるから純粹に体術を覚えたよ。」

……これは文字通り一本取られたな。

剣も勝負も。これ以上なく完敗だ。

「負けたよミツルギ。お前の勝ちだ。」

俺がそう言うのとマジカルチェーンが光になって消える。

「いや、君があの時僕の剣をもつと高く飛ばしていれば僕は負けていた。

この勝負、僕の中では引き分けとさせてもらう。」

そう言うのとミツルギは剣をジョーさんに返して荷物を纏めると

「サトウカズマ！僕は必ず君より早く魔王を倒す！

だからそれまでくたばるな！」

そう言つてレッドホークキーを投げ渡す。

「と！キャッチ！………ああ！お前こそそんな大見得切つて恥の上塗りしても知らないぜ！」

そう返してやるとミツルギは小さく笑つて街の方に引き返して行つた。

2

「全く余計なことしてくれましたね。」

「同じ剣士のたつての頼みだ。断れなかつた。」

「まあ過ぎた事はいいですよ。」

それよりめぐみん、撃つんならあの廃城なんてどうだ？」

俺が指差す丘の上にあつたのは正にお化けなんか住んでいそうな朽ち果てた古い城だ。

「あれにしましょう！」

あれなら盛大に破壊しても誰も文句は言わないでしょう。」

そう言つてウキウキと魔法の準備を始めるめぐみん。
心地よい風が吹く丘の上。

のどかな雰囲気には場違いな、爆裂魔法の詠唱が風に乗った……！

外道侍、現る

1

あの魔剣の奴とのデュエルポンド以来、

穏やか日々が流れていた。

ある日はアクアのバイト先を冷やかしに行き、

ある時はジョーさんの剣の稽古に付き合わされ

またある時は総一さんとリアが歌ってるバーに飯を食いに行つた。

それで一日も欠かさなかつたのが特にやる事がないめぐみんとの一日一爆裂だ。

それは、寒い氷雨が降る夕方。

それは、穏やかな食後の昼下がりに。

それは、早朝のさわやかな散歩のついでに。

どんな時でもめぐみんは、毎日例の廃城に魔法を放ち……。

めぐみんの魔法を傍らですつと見続けていた俺は、

その日の爆裂魔法の出来が分かるまでになつていた。

「『エクスペーション』ツツツ！」

「お、今日のはいい感じだな。

爆裂の衝撃波が、ズンと骨身に浸透するかのように響き、
それでいて肌を撫でるような空気の振動が遅れてくる。

相変わらず、あの廃城は不思議と無傷だが、

それでもナイス爆裂！」

「ナイス爆裂！

カズマもだいぶ爆裂道が分かってきましたね。

今日の評価はなかなか的を射ていて詩人でしたよ。

……どうですか？

カズマも冗談ではなく本気で爆裂魔法を覚えてみては？」

「そうだなあ、面白そうだけど今のパーティーメンバーだと魔法使いは2人もいら
ないからな。

でも冒険者を引退するときには余裕が有ったら爆裂魔法を覚えてみるのも面白そう
だな。」

俺とめぐみんはそんな事を言い合いながら笑い合う。

今日の爆裂魔法の音は何点だった、いや、音量は小さかったが音色は良かったなど、そ
んなことを語り合いながら。

2

「コロツケー！コロツケ揚げたてですよー！」

誰かコロツケ買ってくださいお願いじまじまじうううう！

もう店長に怒られるのは嫌なんですうううう！

アクアが泣きながら売り子をしているコロツケを頬張りながら俺たちはのどかに空を見上げていた。

「もしかしてだが、その城つて元は魔導士かなんかが実験のために建てたか改修した建物なんじゃないか？」

たまたまバツタリ会った総一さんがそんな事を言う。

「確かに私の爆裂魔法で木っ端微塵にならない所を見るとその様ですが、わざわざこんな魔王軍の前線から遠いこの街にそんな大層な物を用意しますか？」

「離れた街だからじゃないか？」

魔王軍も王国もそうそう邪魔してこないし、

して来たとしても駆け出し冒険者だしな。」

「なるほど。」

魔王軍と言えば、ずっとこの町の近くに居座っているという魔王軍幹部は何をしてい

るんだらう？

もつと言えれば何をしに来たのだらう？

こんな前線から見て奥の方に何か用事があるとは思えないが：

『緊急！・緊急！・前冒険者の皆さんは、直ちに武装し、

正門前に戦闘態勢で集まってください！』

街中にお馴染みのアナウンスが響き渡る。

俺は武装を整えて現場に向かう。

大勢の冒険者が集まる中、そこに着いた俺たちは

その凄まじい威圧感を放つモンスターの前に呆然と立ち尽くした。

デユラハン。

それは人に死の宣告を行い、絶望を与える首無し騎士。

アンデッドとなり、生前を凌駕する肉体と特殊能力を得たそいつは紫がかった黒の鎧

を着こみ、フルフェイスの兜に覆われた自分の首を前に差し出す。

「カズマー！めぐみん！アクア！ソウイチも一緒か！」

するとそのタイミングで戻ってきていたらしいダクネスが途中であつたらしいリア
と共に俺らの後ろからやって来た。

「あれが、例の魔王軍幹部か？」

「ひっ………ッッ！」

それを見たリアが頭を押さえて顔をしかめる。

プレッシャーに気分でも害したのだろうか？

「リア？大丈夫か？」

「もしかして、アイツが例のお前と因縁のある魔導騎士か？」

「ち、がう………アイツには首があつたし、

目玉みたいな宝石のはまつた盾が………ッッッ！」

総一さんの問いかけにこめかみを抑えながら蹲るリア。

「おいおい大丈夫か？」

ちよつと今あそこに居る魔王よりこつちの対処を優先できないかと俺たちが思った

時

「俺は、最近この辺りに越してきた魔王軍の幹部の者だが……」

兜の奥からくぐもつた声が聞こえる。

なんだかこみあげっ様にふるふるすると震えると

「まままま、毎日毎日毎日毎日ッッ!!」

おお、俺の城に毎日欠かさず爆裂魔法を撃ちこんでくる頭のおかしい大馬鹿アーク

ウィザードは、

誰だあああああー!!!」

貯めに貯めた鬱憤を爆発させたと言わんばかりに怒鳴り声を上げるデュラハン。「勝負がしたいなら正々堂々正面から来い！」

それが出来ないなら隠れていけば態々取って食ったりはせん！

それをいい事になぜあんな陰湿な嫌がらせを繰り返す!?

頭おかしいんじゃないか!?!」

・・・今気付いたが、爆裂魔法に城つて、まさかあの廃城の事か!?

「どうしためぐみん? リアの次はお前も顔色悪いぞ?」

「あのデュラハン、爆裂魔法がどうか言つてたけどまさかお前!」

ジョーさんがめぐみんをちよつと非難するような目で見る。

ますます青くなるめぐみんだが

「おい、行くんなら行つた方がいいぞ。」

他の奴らが犯人探しみたいの始めやがった。」

総一さんが指をさすと、俺にキャベツ狩りの後で初級魔法を教えてくださいました女の子が引つ立てられそうになっていた。

「まってまって誤解だよ！」

私駆け出しで爆裂魔法なんて使えないよ!」

その子と、その子の腕をつかんでいた冒険者の間をあえて割って入りながら前に出ためぐみんは気圧されながらも

「我が名はめぐみん！」

爆裂魔法を操りしアークウイザード！」

「めぐみん？ 貴様ふざけてるのか？」

「ち、違わい！」

我は紅魔族随一の魔法の使い手にしてこの街一番の魔法使い！

お前の城に魔法を撃ち続けていたのもお前をおびき出す作戦よ！

こうしてまんまと一人で出て来たのが運の尽きです！」

俺がいい加減爆裂魔法を撃てないとストレス性の病気で死ぬとか言うから連れてつてやったのにいつから作戦になったんだらうか？

「結構大見え切っちゃってますけど大丈夫なんですか？」

「しかもさらつと紅魔族で一番とか言ってしまうてるしな。」

「黙ってる。ああいうタイプは一回調子狂うともう元の調子には戻れない。」

「だからっていくらアイツの爆裂魔法でも相手は魔王軍幹部だぞ？」

「でもこれだけ後ろに冒険者が控えてれば大丈夫よ。」

「このまま見守りましょう。」

俺たちの会話が聞こえたのか頬を赤く染めてカッコつけたポーズのまま杖を握り締めるめぐみん。

デユラハンはクツクツと嗤い。

「なるほどなるほど。」

紅魔の者はおかしな名前と極めて高い知能と魔法の才能を持つというからな。

人間如きが魔王様に対抗するために造つたにしては出来はいい。だが惜しいな。」

パチン！とデユラハンが指を鳴らす。

すると奴の鎧の隙間が赤く光り、

「KUWAAAAA……!!!」

赤い牙の生えた大口の魚のような頭部をもつ異形が現れた。

「ナナシ連中！」

ジョーさんが驚いた声をあげる。

「知ってるのか？」

「……俺達の先生を、剣の師匠を殺した奴が使役していたのも、色は違うがあいつ等だつ

た！」

我慢できんと言わんばかりに手に剣をかけるジョーさん。

「おいジョー！」

「邪魔するなソウイチ！これは、正進怒涛流の戦いだ！」

総一さんを振り払い、

一人剣を抜いて突っ込んでいくジョーさん。

「いいじゃない、行かせてあげれば。」

髪をいじりながら何も心配ないと言う様にいうアクア。

「はあ!?おい節穴女神あの軍団が見えないのかよ?」

「私が居るのよ?」

あんな程度のアンデッドすぐに浄化してあげるわ!」

確かにアクアのターンアンデッドなら行けるかもしれないが

「……おいアイツにターンアンデッド叩き込むにはどれだけ近づけばいい?」

「今めぐみんが立ってる所ぐらいまで。」

「……頼んだ。」

総一さんがそう言うのとアクアはウインク一つするとジョーさんより早く前に出ていき

「魔王軍の幹部だか何だか知らないけど、

この私の前に出て来るなんて浄化してくださいって言ってるようなもんよ!

アンタが居座るせいでクエストが受けられないのよ!

覚悟なさい！『ターンアンデッド』！」

アクアは左手から純白の光を放つ。

それはデュラハンの召喚したナナシ連中を光に返しながらデュラハンを飲み込み、

〈シーツケンケンジャー！〉

消し去る事は無かった。

光が当たる直前。頭を首の上に居戻したデュラハンは、

アクアがかつて持たされたのと同じ黒いモバイレーツを使い、赤い戦士に変身した。

漢字の火を模したマスクの侍を思わせるその戦士は

「シンケンレッドだと……そんな、そんな馬鹿な！」

レンジャーキーはここに有るのに!？」

信じられないとでも言いたげに何度も手に持ったレンジャーキーとデュラハンが変

身した姿を交互に見る総一さん。

デュラハンは腰の刀を抜くと、黒い羽織が装着され

「魔王軍幹部デュラハンのベルディア。

シンケンレッド、参る。」

鬼ごっこしましろう

1

「シンケンレッドだと……そんな、そんな馬鹿な！

レンジャーキーはここに有るのに!?」

信じられない。同じレンジャーキーは2つと無いはずだ。

何度も手に持ったレンジャーキーとデュラハンが変身した姿を交互に見ながら俺、七海総一はひたすら困惑した。

しかしそんな俺の困惑を他所にデュラハンが腰のシンケンマルを抜くと、黒い羽織が装着され

「魔王軍幹部デュラハンのベルディア。

シンケンレッド、参る。」

めぐみんとアイツを、ベルディアを浄化し損ねたバイト女神に向かっていく！

「まずい！アクア！めぐみん！」

ダクネスとリアが駆けていく。

俺や和真もそれに続くが、果たして間に合うだろうか？

「ゴーカイチェンジ！」

〈マーーツジレンジャー！〉

先に前に出ていたジョーが間に合った。

正にシンケン丸を振り下ろさんとするベルディアにマジシャインに変身してマジラ
ンプバスターで牽制。

接近した所でアーマーをパージしてサンジエルに変身してデュエルポンドソードを
構える。

「魔王軍は！お前たちは俺が斬る！」

「はあ！たあ！やあああ！」

「ふっ！は！やあ！この太刀筋、貴様シド・バミックの弟子だな？」

「先生を、知っているのか？」

「バーナード国殲滅戦には俺も参加していたからな。」

お前の兄弟弟子達はなかなか歯応えがあつて楽しめた。

お前たちの師匠と死合えなかったのがあの戦い唯一の心残りだ。」

「ほげけー！」

ジョーとベルディアが激しく斬り合う中、ナナシ連中達はただ立っていた訳じゃ無
い。

それぞれ思い思いに集まった冒険者達を襲い始めていた。

とは言え駆け出しの街にはあるが死戦を潜った冒険者達。

簡単にはやられない程度には立ち回れている。

例えば和真はブリンガーソードで、めぐみんは杖を棒術の様に使い、リアは綺麗な槍舞いで、

ルカは潜伏スキルを使っているようで姿は見えんが、弓での確な援護をしてくれている。

「邪魔なんだよこのサカナくん共！」

「こいつら！ゴーマンよりは強い！」

「だがこの程度で倒れると思つて貰つては困るな！」

よいしよおおお！」

近くにいたナナシを豪快にぶん投げて剣を構え直すダクネス。

「くらえ！」

そうしてる間にもジョーとベルディアは滅びしく火花を散らし、しのぎを削つた。

「今だあ！」

「喰らえええ！」

背後から他の冒険者たちがジョーが抑えてるうちにと襲い掛かる。

ベルディアはジョーを蹴り飛ばすと素早く剣で受け、取り出したシヨドウフォンで『炎』の字を書く。

「は？」

一瞬で身に着けていた金属以外が炎上し、残った鉄も煙を上げて溶けだした。

「よそ見をするな！」

復帰しベルディアに斬りかかるジョーだが

「ふん、踏み込みも力加減も最初の百分の一以下。

怒りに我を忘れればその程度か。」

詰まらん敵を相手にしたと言わんばかりにベルディアはシンケンマルに着いた秘伝ディスクを回し、火炎の舞でジョーを斬り飛ばした。

「さあ、次はだれが相手だ？」

2

変身を解除されたジョーは丘を転がり落ち、その先でナナシ連中に囲まれた。

「邪魔だ……退け！用が有るのはアイツだ！」

滅茶苦茶に剣をふるいながら進むとするジョーだが

「『ステイル』！」

左手に持った剣を奪われ、どこからともなく放たれた矢にナナシ連中は倒された。

「ルカか!?なぜ邪魔をした!?!」

「そんなボロボロで行ったって負けるからでしょ?」

潜伏スキルを解除してルカが姿を現す。

「負けるとか関係ない!俺は先生の仇を!」

「その先生に教えられた剣術もまともにできなくなってるアンタがああ黒上着を倒せると本気で思ってるの?」

「お、俺は正進怒涛流の剣士として奴を!」

「私は貴方の仲間として貴方を止める。」

剣を向けられる。

正直、想定していなかったわけではない。

ジョーは後に雌雄を決することを約束した総一のみならずルカやリア、それに和真やアクアやダクネス、めぐみんに対しても対策を練って戦いに備えていた。

(貴方は勤勉だからね。

けどそんだけ気が立った状態でできるかしら?)

予想通りジョーは叫び声をあげながら突っ込んできた。

腕力で敵わないルカはバインドスキルで操るワイヤーを足に絡ませひっくり返す!

「うおおお! ツツ!」

権を握っていた手を思い切り踏みつけて力が緩んだところを足で払い、自分で持った剣を突き付ける。

「貴方が死ぬのはここじゃない。」

だから今は頭冷やしてて。」

ルカの背後から同じように潜伏で隠れていた盗賊がジョーを連れて走り去る。

「さて、ソーイチ達の方は？」

3

一方俺、七海総一たちは相変わらず無限にいるんじゃないかと思われるナナシ連中を相手にしていた。

「総一さん！そろそろいんじゃないですか？」

和真が腰のモバイルーツを叩きながら総一に言う。

「そうだけど！変身する隙が無い！」

「こいつらどんだけいるのよ！リアは？」

リアのバリアなら！」

「両手が空いてないと無理です！」

「いくら私が硬くてもそこまで広い範囲はカバーできないぞ！」

「仕方ない！皆円陣を組め！お互いの背中を守う！」

和真の提案にめぐみんは

「それこつちがジリ貧になりませんか？」

「所詮相手はゴーマンよか強い程度の雑魚よ！」

時間で有利になるのは実力で勝るこつちって訳ね！

ゴツドブロー！カズマにしてはいい作戦だわ！」

「だろ？」

俺達は無言でうなずき合々と円陣を組み、

中心に敵をいれないようにしながらナナシ連中を対処した。

(でもだからって多すぎだろ。

いったい何人出て来るんだ？)

目の前の敵を対処しながらも周囲に目を配る。

どこかで根元を断たないと幾ら雑魚でも大群になれば流石にマズい。

「駆け出しの街と聞いていたが、

お前と言いい存外根性のある奴が多いな。

ならお代わりだ！」

そう言っってベルディアが指を鳴らすと奴の背後の地面から大量の鎧を着こんだ骸骨

が現れた。

アンデッドナイト

ゾンビの上位互換モンスターで古くてもしつかりとした武装を持ったためプリーストとそれなりに修羅場くぐった冒険者のツーマンセルで倒すのがセオリーのモンスターだ。

「おわーッ！誰かプリーストを！プリーストを呼べ！」

「誰かエリス教会行ってありったけ聖水貰ってきてくれえええ！」

「この際馬鹿みたいに高いウイズ魔道具店の奴でもいいからあああ！」

冒険者たちはナナシ連中の相手だけでも大変だというのに大あらわだ。

「なあアクア！」

お前のターンアンデッドでどうにかなんないのかよ!?

お前元なんたらのアークプリーストだろ!?

「現在進行形で女神だけど人間のアンタに合わせて絶賛弱体化中よ！」

五体ぐらいまでならともかくあんな数流石に無理よ！」

「そういう訳だ！さあお前たち！」

「この街の人間を皆殺しにしてしまえ！」

ものすごい勢いで駆けて来たアンデッドナイトたちは街に…向かわなかった。

「あ、あれえ!？」

どういいう訳か俺達六人の方に真っ直ぐ向かってきたのだ。

「お、おい何やってる!？」

そんなたつた六人に全員で行かなくていい!

まず門の前に集まってる奴らを!おい聞いているのか!!？」

召喚したベルディアにとつても不測の事態だったらしい。

という事は、アレはもう本当に倒す以外で止められないってことか?

「か、カズマさん?なんか向かってきましたよ?

大量のアンデッドナイトが全部こつちに向かってきましたよ!？」

「こ、これは流石に…」

「逃げろー!」

俺たちは逃げた。逃げる俺たちをアンデッドナイトはナナシ連中を踏みつぶしながら追いかけた。

何故?俺らがそんな強そうに見えるか?

それともレンジャーキーを持つてるからか?

いや、奴らにそんなことが分かるような知能が有るようには見えないが…

「ねえカズマさんカズマさん!どうにかしてよ!

このままアンデッドナイトに踏みつぶされて死ぬなんて女神の名折れよ！
今晚奢ってあげるから何とかしてえ！」

「何とかって言っても……なあアクア。」

アンデッドって浄化じゃないと倒せないのか？」

「そんなことないけど今その話必要!?!」

「……………アクア。俺を信じてくれるか？」

「え？ も、もしかして何か思いついたの？」

「ああ。アクア、ダクネス、総一さん、リア。」

「ごめん頑張って。めぐみん、手。」

「え？」

「スキル、潜伏！」

めぐみんを連れた和真は潜伏スキルでさっさと逃げた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

残された俺達は交互にうなずき合うと

「あんのロリコンヒキニートオオオオ！」

「俺たちを捨て石にしやがったなあああ！」

「嘘でしょ!?! どうしようどうしよう!!?!」

「こ、これは新手の放置プレイか!?!」

まさか後輩に今当てひどい仕打ちをされるとは夢にも思わなかったぜ!

しかも一緒に残されたのが俺をだましてこの世界に連れて来た張本神ときてやがる

!

厄日! 今日厄日だ!

「あ? こんな時に通信? 誰だよ?」

呼び出し音が鳴ったモバイルーツを開けて通話に応じる。

「もしもし七海です!」

『総一さん? カズマです。』

「和真! お前今どこだ!?!」

『そこからまっすぐ進んだ先を城壁に沿って左に進んだ先の丘です。』

「お前覚悟しとけよ!?! お前ら! こっちだ!」

通信を切った俺は三人を連れて和真に知らせられた方向まで全速力で突っ走った。

「いた! カズマアンタ許さないわよ!」

駄女神がゴッドブローの構えをしながら走っていくと

「めぐみん今だ！」

「なんとという絶好のシチュエーション！」

感謝します、深く感謝しますよカズマ！

……我が名はめぐみん！

紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りし者！

魔王軍の幹部、ベルディアよ！

魂の爆裂道を歩みし者たちの加護を受けた我が力、見るがいい！

『エクスプロージョン』——ツツ!!!』

爆裂魔法がアンデッドナイトのど真ん中に炸裂し、俺達の身体は宙を舞った。

激突!レッドVSレッド!

1

誰もがその威力にシンと静まり返った。

立った一撃で街を恐怖に陥れた魔の軍勢を殲滅したその威力に圧倒されたからだ。

「よくやったぜめぐみん……」

流石にレンジャーキー4本でブーストして気絶しちまったか。

総一さん達は……」

「お前の真下だあああ!」

土の中からハリケンイエローに変身した総一さんがダクネスとリアを抱えて出て来た。

その後ろから疲れ切った様子のアクアも。

「口の中が……口の中がじやりじやりする……!」

「いくら攻めより受けが好きでも流石にアレはきついぞカズマ!」

「終わったらマジ殴りいいですか?」

リアが割とシヤレにならないトーンで物騒なことを言っただすぐあと、爆炎の背後から

強敵と戦える喜びに打ち震える様に笑っていた。

こっちはもう切り札を使っちゃったぞ?

これ結構マズいんじゃないか?

「アクシズ教の御神体にして水と癒しの女神アクア様よ!」

おい!アクア!お前が目立ちたがりなのは知ってたけどここで名乗っちゃいますか!
!?

「女神を名乗るか?面白い。」

魔王軍幹部を前にするのだからそれぐらいの度胸がなくてはな?」

「だから私は本物の!」

「アクア話が進まないから。」

「あー、兎に角、水と癒しの女神様とそのお気に入りのお冒険者と賞金首の愉快な仲間たちだ!覚えとけ!」

「いや総一さんそういう問題でもないですから!!」

「賞金首?よく見れば赤い上着のお前に緑目の女!」

『赤の逆賊』の2人か!」

賞金首なのは知っていたが、そんな呼ばれ方をするぐらいに有名だったとは。

まあ魔王軍からレンジャーキーをぶんどり上げて回ってたらそうなるわな。

「さて、名乗りも終わったところで、直々に相手をしてやる！かかってこい！」

2

考えうる限り最悪の展開だ。

ベルディア一人にターゲットロックされるのも勿論なんだが

「ほーう。一番狙いはそこに居る連中なんだが……」

俺達以外の冒険者。

援護に来てくれるのはありがたいんだが、

見なかったわけではないだろう。

こいつに人間一人が油を染み込ませた紙に火をつけたみたい燃えつくされたのを。

自分を囲む冒険者たちを面白そうに見回すベルディア。

「万に、いや億に二でも俺を見事討ち取れば、

さぞかし大層な報酬が出るんだろな。

……さあ、一獲千金を夢見る駆け出し冒険者どもよ。

纏めてかかって来るがいい！」

一獲千金という言葉に色めき立った冒険者たちが飛び掛かるが

「はああああー!」

大降りに横一闪。

それで十分だった。攻撃を受けた冒険者たちは傷口から炎を吹き出し、蠟燭の様に身体が溶けながら息絶えていった。

「それだけではないぞ?」

ベルディアはシヨドウフォンを取り出し『既死騎士』と文字を書く、残った骸骨がアンデッドととなってその場に落ちていた武器を拾う。

「マジかよ!」

これには全員が絶句している。

敵との力量差は一目瞭然。

斃されに行つたところで死後敵の兵隊にされるから時間稼ぎどころか仲間の負担にしかない。

「私に考えが有る。」

そんな中、ダクネスだけが毅然としていた。

「私が囿になる。」

だからその間にアクア、カズマ、ソウイチで奴を叩け。

お前らの神器で変身する、レンジャーだったか?

なら奴にも通じる公算が有るのだろう？」

「あるけどダクネスお前死ぬ気か!？」

「まさか。I、l l l b e b a c k. というやつだ。」

そう言つていい笑顔で笑うダクネスに総一さんは一本のレンジャーキーを渡す。

「これは、レンジャーキーが光つてる？」

「どうやら同じレッドレンジャーの力をあんな風に使われるのが我慢ならぬらしいぜ。」

「そうか…リア、めぐみんを頼んだ。」

「はい！」

俺はリアに動かないめぐみんを預けると総一さん、ダクネスと並び

「レンジャーキー、セツト！」

「レッツ、ゴーオン！」

「ボウケンレッド、スタートアップ！」

「緊急出動！^{エマージェンシー}デカレッド！」

総一さんは赤い羽織を羽織ったハイパーゴーオンレッドに、

ダクネスは堅牢な鎧、アクセルテクターをまとったボウケンレッドに

そして俺は

「SPライセンス、セット!」

特殊アーマーと連帯性に重きを置いたスワットモードに変身した!

「非道な悪事を憎む!」

「マツハ全開の!」

「果てなきボウケンスピリッツ!」

「正義のロードを突き進む!」

「スーパ―戦隊!」

「二レッドレンジャーズ!」

「アタック!」

極付派手侍

1

ダクネス、ボウケンレットが前に出て

デカレットとゴーオンレット、俺と総一さんが攻める。

単純明快かつ一見隙の無い作戦に見えるだろう。

爆裂魔法にも耐えうるダクネスがアクセルテクターを着込んでいるのだ。

破られる場面を想像できない。

そしてそんなダクネスが敵を釘付けにしてくれるからにはブレードでの接近担当の総一さんとはもかくデイリーリボルバーでの遠距離を担当する俺にダメージはいかない。

筈なのだが！

「その鎧、相当な業物だな？」

俺の太刀を受けて原形をとどめてる鎧はそうないぞ？」

このベルディアはシンブルに強い。

攻撃に対する嗅覚、防御からの攻撃のつなげ方、

単純なスペック。

どれをとつてもここにいる俺たち全員より強い！

しかも弾いた攻撃で俺の方まで攻撃してくるし、

そうでなくてもアンデッドを相手にしてるアクアや他の冒険者たちに攻撃を当てて配下を増やしていつてる。

「これは流石に！アクア！使え！」

俺は手に持ったディーリボルバーをアクアに投げ渡す。

アクアがそれを受け取った瞬間、元のプリンガーソードに戻った。

やっぱりレンジャーの武装は俺たちの武装を变身させていたものらしい。

「ナイスよカズマ！」

さあ何処からでも何体でもかかってきなさい！」

これでアクアは大丈夫だろう。

だが問題は

「はあああああああ!!!」

「うう！……ツツ！……わあああああ!!!」

遂にパワーに押し切られて膝を付いたダクネスと

「ダクネス！てんめえこの首ちよんぱ！マンタンガン！」

「そんな豆鉄砲！効かぬわあ！火炎の舞！」

「うおお！がああああああー!!」

強化変身を解除され、メットを破壊された総一さんだろう。

「よく戦ったぞ『赤の逆賊』ナナミ・ソウイチ。

だが魔王様への邪魔建も、貴様の命もここまでだ！」

ベルディアがシンケンマルを逆手に構えて総一さんの喉に

「やめろお！私の、私の仲間に出すな！」

復帰したダクネスがベルディアにしがみつく。

だがベルディアは激戦の疲労で弱ったダクネスを軽く振り払うと

「貴様はしつこいな。」

つい昨日戦った魔剣使いもそうだった。

この街は頑固者が多いらしい。」

アクアの方から漏れて行ってたらしいアンデッドと戦っている冒険者たちの方をちらりと見る。

「ま、まさか貴様！よせ！」

ダクネスの最悪の想像は当たってしまったらしい。

ベルディアはシンケンマルのディスクを共通ディスクに付け替え回転させて

シンケンマルを斬馬刀型の専用武器、烈火大斬刀を出現させる。

「や、やめろー！」

「百火繚乱!!」

横一閃に放たれた赤黒い炎の斬撃が、門から見て外側で戦っていた一団を燃焼させた。

残った骸骨が火を纏ったままさつきまで背中を預けていた生きてる冒険者たちに向かつて行く。

「初めから調査で来たからなどと考えず、

しつこいだけの雑魚など焼き尽くしておくべきだったな。」

鼻を鳴らしながら残忍に言い捨てるベルディア。

「あ、ああ……………」

遂に完全に崩れ落ちていしまうダクネス。

守るものなくなったクルセイダー程脆い物もそうないだろう。

けど

「ベルディア、その発言は間違いだぞ！」

〈シーツケンケンジャー!〉

ベルディアが視線を外してうちにアイテムを用意していた総一さんは電子モヂカラを纏い、新たな金に白い羽織の戦士、スーパーシンケンゴールドに変身する!

「むうう！」

「はああああ！和真！ダクネス！」

烈火大斬刀は人ひとり分ぐらいのでかさが有る。

故に重すぎるのだから上手く蹴りつけてバランスを崩させた総一さんは俺とダクネスにレンジャーキーを投げ渡す。

「一筆奏上！」

〈シーッテンケンジャー！〉

俺も同じシンケンジャーのグリーンに赤い羽織のハイパーシンケングリーンに変身し、総一さんに加勢する。

「和真、モチカラだ！」

「おう！」

俺はシヨドウフォンで『葛』の文字を、総一さんはスシチエンジャーで『鎖』の文字を書き、光の鎖と、根の様に太い葛がベルディアを拘束する。

「こ、この小細工を！」

全力で抵抗するベルディア。俺達もモチカラを注ぎ続けるが、そう長く持つとは思えない。

「ダクネス！とどめを！変身してバツーカーを！」

「む、無理だ……もう、もう私は立てない！」

「こんな時に何言ってるんだ！」

俺らだつて長くはこいつを抑えられない！」

「だったらアクアやリアがやればいいだろ！」

ルカやジョーがやればいいだろ！私には、私には重い！

あまりに重いんだ！」

「ごんの！馬鹿野郎！」

総一さんが腰にマウントされていたサカナマルを投げつける。

「選べるんなら最善を選べ！」

2つに1つでも選べるなら後悔の無い方を選べ！」

誰かに選ばされた選択は！」

自分で選んでないからって諦められる！」

けど自分で選んだ選択は！」

一生後悔になって付き纏うし、

一生誇りになって胸に残る！」

だから今選べダクネス！流されるな！」

揺れるダクネス。何度も地面に落ちたレンジャーキーと俺たちを交互に見る。

「わ、私など、守れないクルセイダーなど……」

決めるんなら決めてくれダクネス！ぶつちやけ俺も総一さんもそろそろ限界だ。

「くそ……頼むダクネス！俺たちを守ってくれ！」

「ツツツツツ!!か、カズマ……あああああ！」

走りながらダクネスはスーパーシンケンレッドに変身し、インロウシンケンマルを合体させたモウギユウバツカをベルディアにゼロ距離で押し当てる。

これなら流石に外さない！

「喰らえー！！！！」

極大のレーザーが発射され、

拘束ごとぶつ飛んだベルディアは街の城壁にめり込んだ。

「くうう……かつは……」

黒い羽織がボロボロと焼けた紙のようになって崩れる。

相当弱つてる今なら！

「くつそ……ここまで追い詰めてええ！」

総一さんが苦しそうに膝を付く。

彼もまた羽織を纏っていない。俺やダクネスもだ。

もう誰も、アイツにとどめを刺せないのだろうか？

「いいえ！ここに私がいるわ！」

振り返った先に居たプリンガーソードを高々と掲げるポンコツ少女に初めて頼もしいと感じた。

「奴は火の力を纏ってる。

ならば私が司る水の力が効くはずよ！」

動けず、尚且つ弱った今なら私が今使える権能でも決定打になるわ！」

多分！と元氣よく付けたし、プリンガーソードを杖の様に逆手に持つと

「この世界にある我が眷属よ……」

水の女神、アクアが命ず………

アクアの周りに現れた霧が一つ、また一つと濃縮された魔力を孕んだ水玉になっていく。

爆裂魔法を使うのに似た空気が震える感じ……それくらいやばいのが、来る！

「総一さんレンジャーキーー！」

「分かってる！」

〈ターータイムレンジャーー！〉

〈ハーーッリケンジャーー！〉

〈ダーーッイナマン！〉

俺はタイムイエローになって一対の剣、ダブルベクターを地面に突き刺し、

総一さんはハリケンイエローになって超忍法で地面に潜み

ダイナイエローになったダクネスは鎖の付いた鉄球のチエーンクラッシュャーで…

「平原にこれで掴まれるようなところなどあるか！」

「知るか自分で何とかしろ！」

『セイクリッド・クリエイト・ウオーター！』

激流が俺達を飲み込んだ。

嵐の後の静けさ

1

身体中が怠くて重い。

起き上がるのもおっくうだ。

けど起きない訳にはいかない俺、

佐藤和真は起き上がって布団を退けた。

「んん……まだ眠い……」

「もう朝だぞアクア。」

「てかなんで俺のベッドにもぐりこんでるんだ？」

「りやってカジユマさんあつらかいもん。」

「はいはい起きるぞ。」

俺は朝から布団に寄生しようとするアクアを引つ張つて着替えると下の階に降りた。

昨日は確か最後アクアの起こした大洪水に流されて、ベルディアこそ倒せたが全員が満身創痍のまま帰宅したんだった。

俺もアクアにおんぶされて帰ったような記憶が有る。

「おはよーってあれ？」

めぐみん？ダクネス？いないのか？」

見た感じ2人がいる気配がない。

朝食をとった形跡も無いのでギルドにでも向かったのだろうか？

「そう言えば報酬が結構な額貰えるんだっけ？」

「ほう、しゅう？……ああ！そうよね！」

魔王軍の幹部をやっつけたんだもの！

きつと今日から億万長者よ！行きましようカズマ！」

金と聞いた瞬間元気になったアクアに手を引かれながら屋敷を出ると

「カズマ！アクア！」

街の方から血相を変えためぐみんが走ってきた。

「そんなに慌ててどうしたのめぐみん？」

「ふ、2人ともダクネスを見ませんでしたか!？」

「一緒じゃないのか？」

「今朝、こんな置き手紙が！」

そう言つてめぐみんが見せて来た手紙にはダクネスの不器用なくせに気品のある綺

麗な字で

『パーティーを抜けさせてほしい。

モバイレーツも返してくる。ダクネス』
と書かれていた。

「これ、結構まずいんじゃない?」

「ああ。めぐみん! まだ探してない所は?」

「ギルドとそれより向こうは、

ソウイチ達の家の方はまだです。」

「よし行こう!」

俺達はダクネスを探しながら町中を走った。

身長的には俺より高いし、

あの長い金髪に鎧を着こんでいれば割とすぐに見つかると思っただが

「何処にもいねえ。

ホント何処に行つたんだダクネスの奴?」

一回アクアたちに連絡をと思ってモバイレーツを取り出すが

(二人がいつも使ってたモバイレーツって総一さんから借りてた奴じゃん!

てかこれでダクネスに電話すりゃいいじゃん!)

なんでこんな簡単なことに気付かなかつたんだろう?

これで色々連絡できたじゃないか。

俺は気付かない間にすっかりこの文明の利器の無い世界に順応していたらしい。

「はー、自分の間抜けさに腹が立つ。」

取り合えず俺はダクネスに連絡することにした。

しかし返って来たのは

『おかけになったモバイルーツは電波の届かない所に有るか、電話に出られない……』

「留守電かよ！」

次に応援要請を貰おうと総一さんにかけてみた。

「………もしもし？」

『はいもしもし七海です。』

「総一さん？和真です。」

『おお和真！良いタイムミングでかけてくれた。』

今日ジョーを見なかったか？」

「え？見てませんけど何かあったんですか？」

『なんでも合わせる顔がないとかどうとか言っ出てったつきり戻ってこなくて。』

「ジョーさんですか？」

『…いま「も」って言ったか？』

「実はうちもダクネスの奴が行方不明で。」

『分かった。見つけたら知らせる。』

「俺もジョーさん見つけたら連絡します。」

一回電話を切り、再びダクネスを、今度はジョーさんも探して街を走り回ったのだが「見つからない！全然見つからない！」

「もう探してないとこありますか？」

「街の外ぐらいだな。」

二時間以上駆け回って二人は見つからず俺たちは朝食を取りにギルドの酒場に集まっていた。

「やっぱり2人ともベルディアの件が応えちやったのかな？」

ジョッキの飲み物を煽りながら溜息をつくルカさん。

そりやそりや。

普段はアレだがクルセイダーとしての責任は人一倍だったダクネスに、ストイックに鍛え続けていたジョーさん。

2人とも、一度膝をついてしまった自分を責めてしまってるんだろう。

「預けてたレンジャーキーとか使ってた剣なんかも全部家にあつたし、心配だな。」

「それに、あのカメレオン女の事も有りますしね。」

全員が粗方食べ終えて席を立とうとした時

「大変だ！大変だあああ！」

ギルドの扉を勢いよく開け放ちながら幾らか前にゾンビメーカー討伐を手伝ったプリーストの女の子が肩で息をしながら駆け込んできた。

「ま、魔剣グラムのミツルギさんのパーティーと！」

『赤の逆賊』のジョーさんとパンツ脱がせ魔のカスマさんのパーティーのダクネスさんが暴れてる！」

その男、魔王につき

1

時間を少し巻き戻し、街の外にて。

ベルディアがいなくなつて再び動き出した下級モンスターを素手でいなしながら
ジヨールは当てもなく進み続けていた。

「……………俺は何をやつてるんだ？」

皮がむけて血が出始めた拳を見つめながら歩いていると、あの耐え難い屈辱を味わつた門前が見えて来た。

気付かないうちに戻つてきていたらしい。

平原の真ん中で、

誰かが祈る姿勢のまま動かなくなつてる。

風になびく長い金髪で分かった。

「ダクネス。」

「……………ジヨールか？」

力なく嗤いながら振り向くダクネス。

その服は上等な布の黒い服、喪服だ。

「仲間が、死んだのか？」

「ああ。カズマ達とパーティーを組む前の話だ。

腕相撲勝負をして私に負けた腹いせに、

私の事を鎧の中はガチムチの筋肉なんだぜと、

馬鹿な大ウソを流してくれたセドル……。

おいダクネス、暑いから団扇代わりにその大剣で扇いでくれ！

何なら当ててもいいけど。当たるんならな……と、馬鹿笑いして私をからかったへ

インズ。

そして……一日だけパーティーに入れて貰った時に、なんであなたはモンスターの群れに突っ込んで行くんだと泣き叫んでいたガリル。

……ほかにも大勢いるが、皆あのデユラハン、いや、私が守り損ねて散って行った命だ。」

今にも泣きそうな目で、無理矢理作った笑みを浮かべたダクネス。

ジョーは酷く痛々しい彼女を前に鏡の前に立つてる気分になった。

「はっーだっさいセンチメンタリズム。」

自分を馬鹿にした奴の冥福とかどうでもいいじゃん。

むしろいなくなつて清々したりとかしないの？」

気配を全く感じなかつたはずの背後から声がする。

振り返るとそこにいたのは

「なによ人を幽霊でも見るみたいに見て。

そういうの遠回しに影薄いつて言つてるみたいで失礼なんだからな？」

身長は、かなり底の厚いブーツを履いていて、それ合わせて和真と同じぐらい。

和真や総一が見たら信長が羽織つてそうなマントに、

ナポレオンが被つてそうな帽子といった服装。

そしてあどけなさを残した顔立ちと、

薄めの唇から紡がれる言葉の一つ一つがどうも胡散臭い。

「それは、失礼したな。だが死んだ私の友人を先にけなしたのは君だぞ？」

「友人？馬鹿にされたんだろ？」

だつたらそんな奴友人じゃねえよ。

力を認めないで勝手に格下扱いする奴なんて全員クズだ！」

ニコニコと笑いながら断言する少年。

どうも、あまり長く一緒に居たくない。

「なに早速帰りたいそんな顔してんの？」

傷ついちゃうなー。

ま、俺も手短に済ますつもりだから行けどき。

俺の名前はバスコ・ダ・ジョロキア。

魔王軍のリーダーだ。」

思わず反射でジョーは笑っていた。

この斜に構えた少年が魔王軍？

紅魔族でもないこの少年がとても高い魔力や強力なスキルを有してるようには見えない。

「あー！信じてないなあ！だったら考えあるもんね！」

そう言う少年は口笛を鳴らす。

すると二人の背後に三つの黒い霧が現れ、その中から現れたのは

「お前達は…あの時の魔剣使いとその取り巻き！」

「レポート？いやそれよりどうしたお前ら？」

2人の声を無視してミツルギたちは懐からダークモバイレッツを取り出す。

「「ダークゴーカイチェンジ……」」

〈「ジューッウレンジャー！」〉

〈「シューッリケンジャー！」〉

〈オーーツレンジャー！〉

三人はドラゴンレンジャー、シュリケンジャー、キングレンジャーに変身した。

「さ、魔王親衛隊！そいつらを倒せ！」

バスコの号令でジョーとダクネスに襲い掛かる三人。

「うわ！この！目を覚ませ！お前たちは操られてる！」

「何言いなりになつてるんだ！」

生身でしかも無手のまま戦いを強いられる2人。

装備がなくともある程度戦える二人だがヘルフリード、

シュリケンズバット、キングステイックの連撃には対応しきれず捕まってしまった。

「こ、このおー！」

「くっ！ずっと妄想していたシュチュエーションだが実際になつてみると何たる屈辱
！」

「はっはっは。おねーさん身体通りのドスケベさんだね。

そんなエチエチなおねーさんにはこれだ。」

そう言つてバスコはダクネスに無理やりダークモバイレッツを握らせ

「や、やめろ！」

「ダークゴーカイチェンジ！」

〈ゴーツセイナイト!!〉

「あああああー!!!」

ダクネスをダークゴセイナイトに変身させた。

「次はアンタだね。俺に感謝してよね？」

師匠と、シド・バミックと同じ職場で働けるんだから。」

「!?……どうゆうことだ？」

先生が生きているとでも言うのか！」

「あー、そういうの良いから。」

そう言ってジョーも無理やり変身させるバスコ

〈ダーツイレンジャー!!〉

急に視界が嵐に巻き込まれたように開けて居られなくなり、体の感覚が急速に失われていく。

(ま、ずい……すまないソウイチ……ツツ)

ジョーの意識はぶつつりと途絶えた。

ジョー達が暴れてる。

その話を聞いた俺、七海総一は仲間たちと共に話を持って来たプリーストの子に場所を聞いて現場に向かった。

そこに居たのは

「キングレンジャーだど?」

「ドラゴンレンジャー!」

「シユリケンジャーにキバレンジャーまで!」

あと一人銀色の騎士は知らないレンジャーだったが、

そこらの物、人を無差別に襲う全員からベルディアやカメレオン女から感じたのに似た邪悪な気配を感じる。

「誰かが、ダークゴークイチェンジしてるってこと?」

「でしようね。ダクネスとジョーと、

あと名前忘れたけど3人!

さっさととつちめて元に戻してあげます!」

俺はそう宣言したためぐみに予備のモバイレッツを渡す。

和真とアクアも自分のモバイレッツを、アクアのは先日ベルディアから二本目のシンケンレッツのキーと共に入手した奴だ、を構える。

「やーっぱり占い師どもの言ってた光りはお前が降臨したからだっただか。」

破壊活動を続けるレンジャー達をかき分けるように、

おかしな少年が現れた。

多分厚底ブーツを除いたら身長は精々150cm後半に届くか届かないか。

ナポレオンみたいな帽子にがんばってダサイ奴が戦国時代の南蛮ファツションみたくにした感満載の服を着たそいつはまるで朝の挨拶をしてくる馴れ馴れしいクラスメイトの様に

「俺は今魔王軍のリーダーをやってるバスコ・ダ・ジヨロキアってモンだ！よろしくな！」

恐ろしく軽々と告げられた事実には思わず面食らう。

この子供が、今この世界を恐怖に陥れてる魔王だと？

「いやね？言いたいことは分かるよ？」

魔王軍なんてまんまなダサイ名前じゃなくてさ。

もつとデストロン軍とかそんな感じの如何にもカツコイイ悪って感じの名前に改名したいし、

俺の肩書もシンプルに魔王、じゃなくてこう、

破壊大帝みたいな威厳ある感じにしたいけど。

「ブラックコンドル！」

「ホワイトスワン！」

「ブルースワロー！」

「鳥人戦隊！」

「「「ジェットマン！」」」

名乗りを上げた俺たちはそれぞれ敵に向かって行く。

俺が変身したレッドホークはキバレンジャーに、

和真の変身したブラックコンドルはドラゴンレンジャーに

めぐみんが変身したホワイトスワンはシュリケンジャーに

洪水の女神が変身したブルースワローはゴセイナイトに

生身のままのルカとリアは2人がかりでキングレンジャーに

「バードブラスタ―！ビークスマツシャー！」

俺は二丁の銃でキバレンジャーを攻撃する。

しかしキバレンジャーは器用にビームを避けるとすれ違いざまに腰のプリンガー

ソードを引き抜き二刀流で斬りかかって来る！

「この太刀筋！お前ジョーか？」

和真の方もプリンガーソードと魔剣ヘルフリードが打ち合っていく。

「魔剣、と言ったらお前だよな、ほら、紫の鎧のお前！」

「すぐに目を覚まさせてやるよ！」

めぐみん対シユリケンジャーはと言うと

「セツトアツプ！シユート！」

最初っから火力重視でジェットハンドカノンを使うが

「超忍法！影の舞！」

「うわあああああ！くう！」

レンジャーのパワーに潜伏スキルを上乗せとは！

でも負けません！」

そしてブルースワロー対銀の騎士は

「ジェットスピーダー！」

銃撃を仕掛ける騎士に対して専用バイクでの体当たり攻撃を仕掛ける。

「見るがいいわこの私の巧みなライディング！」

そしてリアとルカが対峙するキングレンジャー

「ダクネスさんはこんなに器用じゃないですし、

消去法で魔剣の人のパーティーの槍使いの人ですね？

同じランサーとして負けません！」

ルカの援護を受けながら力強く舞う。

「へ〜。存外やるじゃん。」

バスコは屋根の上から高みの見物。

どうやら今回は見に徹するようだ。

「は、仲間割れを楽しもうたあ悪趣味な野郎め！」

俺は翼を広げて飛び上がると、

二丁のビームを上空からキバレンジャーに向けて撃つ！

流石に剣を離れたところを接近し

「ウイングパンチ！」

渾身の拳を胸部に叩き込む！

「総一さんもか！俺も負けてられないな！」

「バードブラスター！」

冗談から繰り出された魔剣をプリンガーソードで受け、腰のバードブラスターを空いてた右手で引き抜き、ゼロ距離でビームを当てる。

「カズマ！使わないんなら武器貸してください！」

「カズマこつちも！」

「おう！」

和真はめぐみんにジェットハンドカノンを、
アクアにウイングガントレットをパスする。

「キャッチ！ ナイスです！」

めぐみんはじつとその場にとどまり、耳を澄ます。

（攻撃のタイミング……：1、2、1、2、そこ！）

振り向きざまに二閃のビームを放つ！

シュリケンジャーは武器を手放しながら吹っ飛ばす！

アクアは両手にウイングガントレットを装備し

「パワーなら私も負けないわ！」

遠距離からの銃撃も近距離での銃撃も一の腕で受け

「喰らえ！ ブルーレンジャーゴッドブロー!!!」

レンジャーのパワーと権能を合わせたオリジナル技で決める！

「そして最後に！」

「私たち！」

ルカが作った隙にリアが神器でキングレンジャーを覆う様にバリアを作り、2人がかりで蹴り飛ばす！

「お、丁度一か所に固まりましたね。」

「だったら最後はこれで行きましょう！」

めぐみんから渡されたレンジャーキーをモバイルーツにセット！

「ゴーカイチェンジ！」

〈〈〈ダーツイナマン！〉〉〉

「爆発！科学戦隊！」

「『ダイナマン！』」

まだダメージの抜けてない五人に向かって勢いよく走り

「レッド！」

「ブラック！」

「ブルー！」

「ピンク！」

「『大爆発！スーパーダイナマイト！』」

巨大な火の玉になって突っ込んだ！

5人の変身が解除されて倒れる。

レンジャーキーが鈴の様な音を立てて散らばった。

「さーて、次はお前だ！」

それぞれ武器を取り出し、屋根の上のバスコに向ける。

「……………いや、君らにかける言葉は一つだよ。」

バスコは屋根を降りると顔を上げ

「残念でした！おっしい〜！」

そう言つて瞬間、建物影から現れた10人のレンジャーが総一以外の5人を強襲した。

「な!?!お前ら!」

直ぐに助けに行こうとするが、変身は解除されたが洗脳は解除されなかつたらしいミツルギとランサーの女に阻まれる。

そうしてる間にも和真はメガシルバーとガオシルバーに、

めぐみんはタイムファイヤーとボウケンシルバーに

アクアはデカブライトとデカゴールドに

ルカはゴーオンゴールドとゴーオンシルバーに

リアはカブトライジャーとクワガライジャーに

2人がかりで倒され、捕まってしまう。

「この…この…お前最初っからこのつもりで!」

「ピンポーン!」

勇者様にせよ悪党にせよ皆手下には優しいもんさ。

態々レンジャーキーを5本も捨て札にした甲斐があつたよ。」
撤収！と言いながら手を叩く魔王。

捕まえた仲間たちとレンジャーを覆う巨大な魔法陣が現れ
「じゃあな。また近いうちに連絡するぜ！」

「待て！」

走りながら手を伸ばす。

しかし魔王に届く寸前で奴らは何処かにテレポートした。

「畜生、畜生！畜生畜生畜生!!

あああああー！！！！」

こんなものか？

1

身体中が痛い。

彼女、ダクネスが最初に感じたのはそれだった。

自分が何をしていたかは思い出せないが、

きつと酷いことをしていたんだろう。

「じゃあこの魔法の実験台ってやつ行ってみようか。」

「いや総一さん!？」

「正気ですか!?!死に行きたいんですか!?!」

「なんでだよ？」

マジシャインの鎧が有れば何も問題ないだろう?。」

「日銭を稼ぐためにあのかっこいい鎧を使わないでください!。」

「じゃあこの起動要塞デストロイヤーの偵察か、

魔王軍行動隊の偵察のどっちかに」

話し声が聞こえて来た。

誰だろう？聞きなれた声だ。
何故だろう。

会った事が無いはずなのにあの尖がり帽子のアークウイザードが爆裂魔法の使い手で、

あつちのグリーンのマントの少年が盗賊スキルと初級魔法を巧みに組み合わせるトリックスターで、

あつちの赤い上着の男が特に芸は無いが戦闘になると普通に強いという事を彼女は知ってる。

(……ああ……これはあれだ。

私がパーティーに入りたいと言って魔王軍の小隊の偵察クエストを受けに言ったあの日の！)

あの日の様に声を掛けようとして、思いとどまる。

(もし、ここで声をかけなかったら？

私はカズマのパーティーに入ることも、

ソウイチ達と仲良くなる事も無く、

今まで通りいろんなパーティーにその時々で入って……

この後来るデュラハンとの戦いで足を引っ張る事も無い……)。

そう思つて引き返そうとすると

「今のイエローはこんなもんか？」

俺の知つてるイエローはもつと大事なものに本気だったぞ。」

いつの間にかギルド内に知つてる人は一人も居なくなつていた。

代わりに紺にグリーンの制服を着た若い男が立つていた。

「この先、立ち向かわないつもりか？」

「私のような不器用に何ができるといふんだ？」

こんな体が硬いだけの女、脆い心から切り崩されればこんなもんだ。」

そう言つて私が去ろうとすると

「それで大事な物全部ほつぽりだして、

なにも背負わず生きていくつもりか？」

「私なんかが守り損ねるよりはいい。」

私なんかあそこに、きつと何処にもいなくていい。」

「そうか。」

そう言うとうちは太ももについた白い持ち手の付いた何かを引き抜く。

そしてそれにグリーンアイテムをセット！

〈2号！パトライズ！〉

銃身を下向きに半回転させ、両手で構え

「警察チェンジ！」

〈パトレンジャー！〉

グリーンと白のスーツに、金色のエンブレムの付いた黒いバイザーのレンジャーに変身した！

「パトレン2号！」

パトレン2号に変身した男はダクネスに殴りかかった。

両腕でガードするダクネス

「何をする！」

「何処にもいなくていいんだらう？」

「だったらなんで今俺の攻撃を受け止めた？」

「まだやる事が有るからか？」

「そ、そんなものは……」

「じゃあなんで俺の拳を離さない!?!」

ダクネスの腹部に遠距離武器のV Sチェンジャーを当てて引き金を引く。

「たまたまずダクネスが飛びのいたところでパトレン2号は銃身に取り付けたアイテム、トリガーマシンを付け替える。」

「バイカー！パトライズ！警察ブースト！」

「バイカー撃退砲！」

放たれた必殺技を避けるダクネス。

「な、なんでだ？」

何で私はこんなにも、こんなにもしがみつく!!

私なんか終わったっていいだろ！なのに何で!？」

戦闘中にもかかわらず地団駄を踏み癩癩を起こすダクネス。

父に矯正された癖だが、まさかそれが戻るほどに自分はギリギリなのかと頭の片隅の変に冷静な部分は驚いていた。

「それはお前が守れなくて出来なくて悔しいからだ。

それでいいじゃないか。敗北も勝利に必要な手順だ。」

「だ、だが私はクルセイダー……失敗は、失敗は仲間の死だ！」

「お前の仲間は！」

守ってもらわないといけないほど弱いのか？」

「……………いいや。皆、私より強い。」

「その答えじゃ半分だ。例えば俺の先輩、

パトレン1号とパトレン3号は俺にはない力を持つてる。

君にブラックの彼みたいな奇策は思いつくか？

魔法使いの彼女みたいな火力は有るか？

青髪のカワイ子ちゃんみたいな器用さはあるか？」

「ない……」

「それでいいんだよ。でつかい壁は皆で登ればいい。

俺たちの使命は悔し涙の先にある。」

変身を解除して人懐っこそうに笑うと

「だから今は目いっぱい泣いていい。

それから決して泣かないヒーローになるって誓えばいい。」

だから自分で出来ることを背一杯すればいい。

そう言った。思えば、私は誰かに頼ることにあまりに慣れてなかったかもしれない。

「ありがとうパトレン2号。」

「俺の言葉じゃないよ。

俺も励まされた先輩から貰った言葉だよ。

それに気付いたのはお前だ。よく気付けたな。

友達の為に全力で頑張れる君は、

俺の惚れたイエローレンジャーにも負けず劣らずだ！」

「……いつてきますー！」

走ってギルドを飛び出していくダクネス。

しばらくパトレン2号の青年、陽川咲也ひかわさくやは踵を返し

「さて、そつちは頼みましたよ圭一郎先輩、つかさ先輩。」

2

一閃、二閃。パトメガホーとジョーの剣が何度も交差する。

「中々やるな。だが私には勝てん。」

ジョーが対峙する紺に桃色の制服の女はジョーより息が上がってるにも関わらず断言した。

だが不思議とジョーも、彼女に自分が勝てる姿をイメージ出来ない。

（なぜだ？ 実戦経験？ 武器の練度？

どれも違う。それが分からなければ勝てない。）

それはジョーの戦士としての直感だった。

それにジョーは勝たなければならない。

この女が言うことを信じればだが、

ここはアクセルから遠く離れた場所で、勝つたどちらかしか戻れないとの事だ。

(なら俺は戻らないといけない。)

こいつに勝つて魔王に勝つて必ず正進怒涛流こそが最強の剣技だと証明する！)

「はあああああ！」

「たあああ！やああ！」

打ち合いで押し負けがら空きの腹部にパトメガホーを叩き込まれる。

込みあがってくるものをなんとか押し込みながらジョーは2歩3歩と後ずさった。

「お前は、何のためにその剣をふるう？」

何で剣をやりたいと思った？何のために戦い続ける？」

………はじめは国の近衛兵になって安定した暮らしがしたくて剣を習った。

才能は有ったし、運動はもともと得意だったからジョーはすぐに弟子の中でも一番になつてた。

けどどうあつたつて師匠には敵わなかった。

そりゃあ簡単に勝ててしまえばわざわざ教わる意味はないし、自分含めて門弟が何十人も居るわけがない。

それでも絶対に勝ちたいと思つたジョーは師匠に聞いてみた。

「師匠は剣を持つにあつて一番大事だと思う事は何ですか？」

「んー、これは俺の場合だけど、

いつか見たいと思うんだ。

剣を握らなくていい世界を。」

なんだそれ？戦いの技で戦いを最後捨てるために強くなるって矛盾しないか？

とその時は思ったが、国が魔王軍に滅ぼされたその日、ジョーは思い知った。

この焼き尽くされる地獄こそ師匠がなくしたいものだ。

師匠はこれが見たくなくて剣を鍛えていたんだ。と。

その後運よく生き残ったジョーは諸国を巡りながら武者修行をした。

必ず戦いを終わらせるために。会えなくなつてからようやく尊敬することのできた師匠の夢を果たすために。

そして長い放浪の末仲間に来て、街に住んで…

「思い出したみたいだな。」

「ああ。いつの間にか手段と目的がすり替わつてたみたいだ。」

「それが分かつたんなら言うことなした。行け。」

「礼を言う。それから、一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「あんたスーパー戦隊か？」

「…さあな。」

去って行くジョー。

それを見送っていると背後から誰かが来る。

「咲也か？」

「はい！そつちは終わりましたか？」

「ああ。後は圭一郎次第だ。」

3

魔王達が去った後、俺、七海総一は動かなくなつた5人を運んでギルドに戻つた。

事情を説明し街のプリースト達に浄化をかけてもらいモバイレーツは浄化できたのだが

「すいませんソウイチさん。

5人の体に残留した呪詛はなかなか浄化出来なくて…後は皆さんの精神力次第です。」

あの時一緒にゾンビメーカーの討伐に行ったプリーストの子が申し訳なさそうに言う。

「気にすんな。俺の仲間はそんな柔じゃない。

心配ないさ。」

俺は外の空気を吸ってくると言って席を外した。

人目がなくなつた瞬間、汗が止めどなく吹き出てくる。

体全身が震えて今にも逃げ出したい。

直ぐにエリス教会に駆け込む。

電話ボックスの様な2つの箱に、懺悔室に入る。

「どうなさいました？」

反対側の箱から男の声がする。

神父だろうか？

「神父様、罪は：まだ法に触れない限りで犯してないんですけど、今すぐ誰かに話さない

と不味い事があるんです。聞いていただけますか？」

「はい。話さない。」

俺は一泊置いてどこまでレンジャーや魔王とかについて話していいか悩んだが、掻い

摘んで話す事にした。

「俺は、冒険者で：自分で選んでやってないんです。

だからそれを理由に投げ出さない様に、リーダー？

ほど大層なものでもないけどやってるんですよ。

けど、今、仲間がピンチなのに諦めかけてる自分がいて：どうすればいいか……」

神父は黙っていたがやがて口を開き

「俺も苦しみながら選ばざるを得なくて戦った人達を知っている。

そいつらはきつと他にもやりたい事が沢山あったんだろうけど、手段は間違っていたが自分の正義に基づいて戦った。

今君が悩んでる中で何もかも投げ出して自分の為だけに行動するといふ選択肢がないのなら、君は自分の大切な者の為に戦うべきじゃないか？

あの日、燃え盛る村で戦うことを選んだ様に。」

「えっ？」

俺は懺悔室を飛び出て反対側の箱を見た。

しかしそこには誰もいなかった。

代わりに『パトレンまんじゅう』と書かれた可愛らしいお菓子が二箱置かれている。

「……先輩方、いつも叱咤激励ありがとうございます。」

俺は誰もいない懺悔室に敬礼をして、お菓子を持つと教会の外に出る。

「いた！ソウイチ！」

「ジョー！ダクネス！意識が戻ったか！」

「ああ。悪かったな迷惑かけて。けどもう平気だ。」

「和真達を取り返しに行こう！」

「……なんかお前ら、

顔付きつて言うか、なんか変わったな。

誕生日でも過ぎた？」

「いや、ちよつと初心に帰っただけだ。」

「そうだな、強いて言えば久しぶりに褒められたぐらいかな？」

よく分からんがもうスランプは抜けてくれたらしい。

俺が安心したところでモバイルーツが鳴る。

「もしもし？」

『よう！電話出来るぐらいには元気そうだな！』

「バスコか。」

『ああ、お前にいい話がある。

お前らが持つてるレンジャーキー全部持つて来いよ。

そつちがその気ならお仲間と交換してやるよ。』

「……場所は？」

『総一さん！こんな奴の言うこと聞く必要グツ！』

何かを蹴るような音、続いてめぐみん達が和真の名を呼ぶ。

『ごめくん足が滑っちゃった！』

で、どうする？取引しちゃう？』

「いつまでに行けばいい？」

『明日の正午までにアクセルの北の採石場まで。』

それじゃあよろしく〜』

向こうから通話が切られる。

俺たち3人は頷き合い、

「それじゃあ、行こうか、仲間を取り戻しに！」

宇宙海賊現る!

1

魔王に、バスコに使役されるレンジャー達に連れられて俺、佐藤和真は仲間と共に囚われた。

持っていた武器やレンジャーキーも取り上げられ、

一本の鎖で繋がれる。

「ようこそ俺の私有船『フリージョーカー』へ!」

取り敢えず牢屋に入ってもらって話はそれからだ。」

乱暴に引つ張られた俺たちは無理矢理狭い牢屋に押し込められる。

睨み付けてやるとバスコは嫌らしい笑みを浮かべ

「なあ、お前ら不思議に思ってるよな。

なんで10人もレンジャーが気配もなく待機出来たかって。」

ラッパの様なアイテムと懐からレンジャーキーを取り出し、それにレンジャーキーをセツトして捻る。

「♪~~~~~」

吹き鳴らすと一度ラツパの中に引つ込んだレンジャーキーが光となって放たれ、そのレンジャーの姿になって現れた！

「嘘お！そんな事出来るの!?!」

「ダークモバイレーツを使つて操るより楽だよ。

あれは不意を突かないと完全には操れないからね。

意識が残つたり聞かない命令あつたり。

あの時だつて本当は魔剣のやつとその女に赤いのを抑えさせてる内にお前らの仲間
のクルセイダーとソードマスターに殺らせるつもりだつたんだけどな。」

悪びれずにそう言うのと召喚したゴウライジャヤー、ゴーオンウイングスをかき分けて鉄
格子に寄りかかりながらモバイレーツに似たケータイ電話を聞く。

どこかに電話をかける。

『もしもし?』

「よう！電話出来るぐらいには元気そうだな！」

『バスコか。』

聞こえた声は総一さんの声だった。

という事はダクネスにジョーさんは無事か。

「ああ、お前にいい話がある。

お前らが持つてるレンジャーキー全部持って来いよ。

そつちがその気ならお仲間と交換してやるよ。」

『……場所は?』

俺は思わず声上げる。

「総一さん!こんな奴の言うこと聞く必要グツ!」

鉄格子の隙間から俺の顔に蹴りが入れられた。

受け身も取れずにひっくり返る。

「カズマ!」

「大丈夫ですか!?!」

「ごめくん足が滑っちゃった!」

で、どうする?取引しちゃう?」

『いつまでに行けばいい?』

「明日の正午までにアクセルの北の採石場まで。

それじゃあよろしく〜」

電話を切つてよかつたな手下想いのいい頭で。

と言うと4人のレンジャーに見張りを任せてさっさと出て行った。

「あのムカつく低身長絶対いつかゴッドブローくらわしてやる!」

アクアが悔しそうに言うとかワガライジャーのイカツチマルで小突かれた。どうやら一定以上の音が鳴ると攻撃するようだ。

「カズマさん、カズマさん。」

「はいカズマです。」

声を抑えたアクアが俺のそばに寄ってきた。

「カズマさんのステイールであいつらの武器奪えたりしませんか？」

「やってるけどこの鎖のせいが無理です。」

「ええ!? そんな！」

カズマからステイールを取ったらロリコンとヒキニートとパンツ脱がせ魔とキャベ

ツマスターしか残らないじゃない！」

「あとお前への怒りがな！」

声がデカかったのかまたイカツチマルで小突かれた。

「しー、静かに。アクア、カズマ。」

バスコに密告されたらたまりませんよ。

こいつらにそんなお頭が有るか知りませんが」

するとめぐみんもイカツチマルで小突かれた。

こいつら意外と知能が有るのかもしれない。

「いて!ととと…かく言う私も爆裂魔法をとつたらこの高度な知能しか残りません。」

「じゃあその高度な知能で何か思い浮かばないのか？」

その目を皿にしてこつちを見てる四人をかくぐつてこの空飛ぶ船を抜け出る方は有るのか？」

「ありません。」

「くつそ!」

以外にも一番奥に居たリアが立ち上がって壁を蹴った。

「打つ手なし?最悪!最悪!」

「こんなところで!こんなところで終わりなんて!」

「リア落ち着いて!」

ルカは勢いよく立ち上がりリアに耳打ちする。

「取引の直前まで堪えて。」

相手が一番油断する瞬間をつくしかない。」

「でもこつちは数でも手数でも勝てないですよ!」

「ソーイチにジョーがやられっぱなしで終わる奴ら?」

カズマ程じゃないにせよ、なんか悪知恵働かせて突破口開いてくれる。信じよう。」

翌日正午。四人のレンジャーにがつちりとガードされた五人はバスコに連れられて採石場にやって来た。

「ソーイチ！ ジョー！ ダクネス！」

「待たせたな。大丈夫か？」

「無事よ！ 縛られてるけど。」

宝箱を持った総一が前に出る。

「さーこっちのカードは出したし、そっちもレンジャーキー見せてよ。」

総一は無言で宝箱を開ける。

中には総一の手元に残ったレッドのキーとダクネスの持つ男性イエローのキー、そしてジョーの持つ男性ブルーのキーが入っている。

「それじゃあまず三人ともモバイレッツをその場に捨てて宝箱をそこに置きな。」

三人がその場にモバイレッツ落とし、総一がもう一步前が出る。

「……？ どうした？ 宝箱をそこに置けよ。」

「はっ！ 誰がやるかよ！」

「ああ？ てめえ何言ってるんだ？ こいつら見捨てるのか？」

「いいや。全員取り戻す。」

「おーいおいおいおーい!何言ってるんだよ?

何かを得るのに何かを捨てないつもりかよ!」

「何かを得るために手段を尽くす。俺達とお前の差だ!」

総一は宝箱を天に向かって投げる!

人質にされてる五人の上で開いた宝箱の中からはモバイレーツが!

「そういう事か!アクア!」

「へ?痛あ!」

和真に尻を蹴られたアクアは口を開けて終えを向く形になり

「かぼお!」

その口にモバイレーツの背面の出っ張りが綺麗に入る。

それを見て動こうとするレンジャーたちだが

「はあ!」

「そりゃあ!」

リア、ルカ、めぐみんに阻まれる!

「させるかよ!」

「こつちのセリフだ!」

止めに入ろうとするバスコに総一、ジョー、ダクネスはフロントロック式ピストル似

た武器、ゴーカイガンでけん制する。

「ご、ゴーカイチェンジ！」

〈アーツバレンジャー！〉

アバレブルーに変身したアクアは鎖を脱出し、

腰のアバレイザーを剣にして引き抜き他の面々開放する。

「よっしゃ今なら使えるぜ！ルカさん！」

「ええ！『ステイール』！」

レンジャーキーの入った袋とモバイレーツが二人の手に握られる。

「こんのカスどもがあああ！」

吠えるバスコに不敵な笑みで返しながら集結する八人。

「大胆なこと考えるわね。」

「ちよつとアンタつて言うよりかはカズマっぽいけど。」

「その方が女神さまはお気に召すだろ？」

「当然！」

全員にモバイレーツが行きわたり、構える。

「皆、このキーを使え。」

和真、アクア、ダクネスにはハリケンジャーのキーが、

そしてルカ、リア、めぐみんには見たことのないキーが渡される。

「このレンジャーキーは？」

「先輩方からの貰い物だ。饅頭の箱に入ってた。」

「ま、饅頭!?!」

「兎に角!行くぞお前ら!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

モバイレーツに変形させたレンジャーキーをセットし、捻って前に掲げる!

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

襟を指で弾くポーズを決めながら総一はゴーカイレッドに。

「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

ゆつくりとサムズダウンをしながらジョーはゴーカイブルーに。

「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

右腕をしゅつ!と横に払うようなポーズをしながらルカはゴーカイイエローに

「ゴーカイグリーン！」

ポケットに手をゆつくり入れる様なポーズをしながらリアはゴーカイグリーンに！

「ゴーカイピンク！」

胸に手を当てるポーズをしながらめぐみんはゴーカイピンクに！

「風が啼き！空が怒る！」

そらにん空忍！ハリケンレッド！」

傘を放り投げながら和真はハリケンレッドに！

「水が舞い！波が躍る！」

みずになん水忍！ハリケンブルー！」

アクアは左手に右腕を乗せる様なポーズを決めながらハリケンブルーに！

「大地が震え！華が唄う！」

おかにん陸忍！あ！ハリケンイエロー！」

額を叩くようなポーズをとりダクネスはハリケンイエローに！

「人も知らず！」

「世も知らず！」

「影となりて悪を討つ！」

「海賊戦隊！」

「忍風戦隊！」

「ゴカイジャー！」

「ハリケンジャー！」

「あ、参々上々！」

ド派手に行くぜ！

1

「海賊戦隊だあ？笑わせやがって！殺っちまえお前ら！」

バスコは懐から新たにレンジャーキーを取り出し、

六人のレンジャーを召喚。

総勢十人が構えを取る。

「ゴウライジャーはハリケンジャーに任せる。」

「残り六人任せました！」

「そんじゃあ！ド派手に行くぜ！」

戦闘が始まる。バスコはレンジャーキーを回収しようと向かうが

「せつせこ！せつせこ！これでラスト！」

回収完了！じゃーねー！」

潜伏スキルで潜んでいたクリスが素早くキーを拾い集めるとスキルを駆使して去って行った。

「あら盗賊ちゃん。仕事早いね〜」

「まーねー!」

2

俺、佐藤和真とアクア、ダクネスが変身したハリケンジャーは魔王バスコに操られる
ゴウライジャーと戦うこととなった。

「オラ来やがれ電気野郎ども!」

うちの狂犬女神の力で感電させるぞ!」

「出来なくはないけどその言い方やめて!」

「アクアその話後にしてくれ!」

相変わらず剣の当たらないダクネスとアクアがカブトライジャーの相手を、

俺が一人でクワガライジャーの相手をする。

「ジャイロシユリケン!」

一旦距離を取ってから牽制用の炸裂手裏剣を放つが、円月の型、バリアに変形させた
イカツチマルで跳ね返される。

「がああああ! つと! ドライガンは使わない方がいいな。

ならこいつだ! ハヤテマル!」

十字の型にしたイカツチマルと斬モードのハヤテマルがぶつかり合う。

(パワーもスピードも向こうが上、

ならやつぱりアレだ！」

「『ステイール』！」

俺がステイールを仕掛けてやると俺の手に確かに何か握られる。

「さーて何が、な、に、が…はあ！」

なんと握られていたのは男物のパンツだった！

「なんでお前パンツなんか履いてるんだよ！」

お前生き物ですらないのに履く必要有るのかよ！」

俺の突っ込みに意外にもたじろぐクワガライジャー。

「ナイスよカズマ！おいしい所は貰っていくわ！」

ソニックメガホンを構えたアクアが前に出る。

「くるくるくるくるくるくるくるくるくるくる回って回れエー！」

音波を受けた瞬間ふわりと宙に上がり無茶苦茶に回転しだすクワガライジャー。

「よし、決めるぞアクア！」

「ええ！ハヤテマル乱モード！乱舞斬！」

落下するクワガライジャーに俺とアクアの斬撃が炸裂！

金色の光と共にクワガライジャーはレンジャーキーに戻った。

「ダクネス！そっちは!？」

「大丈夫だ！力比べには自信がある！」

カブトライジャーと一対一になっていたダクネスは両腕をしっかりと抑え、カブトライジャーを足止めしていた。

「離れるダクネス！超忍法、空駆け！」

俺は空中を滑空するハリケンレッドの得意技をキックを放ちながら発動。

俺の足に捕まったカブトライジャーにゼロ距離の連撃を食らわせる！

「はあ！行くぞ皆！」

「「ハ！リ！リ！ケーン!!」」

3人息を合わせた斬撃でカブトライジャーを完全に怯ます。

「カズマ！とどめは譲ってほしい。」

「だったらダクネスを先頭にトリプルガジェットだ！」

「三重連！」

「「トリプルガジェット！」」

ダクネスのクエイクハンマー、アクアのソニックメガホン、俺のドライガンの順番でガジェットを合体させる！

「ファイヤー！」

一度真上に向けて放ち、

上空に打ち出したエネルギーの塊を敵の真上に叩き落とす！

「成敗バイ！」

ゴウライジャーのキーを回収する。

「さ、そつちは頼んだぜ総一さん達。」

2

ゴーカイジャーはゴーカイガンと海賊刀型のゴーカイサーベルを一つずつ持ち、敵に向かって行った。

「はああーやああー！」

俺、七海総一はメガシルバーとガオシルバーを。

「ふん！はっ！」

ジヨースはデカブライトとデカゴールドを

「とお！おりや！」

「ふっ！でやあ！」

ルカとリアはゴーオンゴールドとゴーオンシルバーを

「この！せや！」

めぐみんはタイムファイヤーとボウケンシルバーをそれぞれ相手に立ち回る。

「リアー！サーベルパス！」

「はい！」

背後にいたゴーオンシルバーに向けてサーベルを投げ、

当たって跳ね返ったゴーカイサーベルをキャッチして斬りかかるルカ。

リアもその時投げ渡されたゴーカイガンを手で二丁持ち、振り下ろされるゴーオンゴールドのロケットダガーを空いた片手で受け止め、片手で二丁同時に引き金を引く！
「たっぷりお礼をしてあげる！」

両手に銃を持ち替え、フェイントステップからの舞うような回転連射！

「これで、トドメ！」

強烈な顔面キックからの再び近距離連射！

ゴーオンゴールドは光になってレンジャーキーに戻った。

「ルカさん！」

「リアー！畳みかけるよ！」

「はい！」

残ったゴーオンシルバーには遠距離からワイヤーで操るサーベルとゴーカイガンの射撃で倒す！

「楽勝！」

「次行きましょう！」

続いてジョーとめぐみん。

「ジョーさん！銃を！」

「ああ。」

最初から武器を交換し、めぐみんはガンファイトを、

ジョーは剣舞で勝負を挑む。

「くう！遠近両用武器、厄介です！」

「徒手空拳も侮れんな。めぐみん、スイッチ！」

「はいー！」

立ち位置を180度変え、ジョーがタイムファイヤーとボウケンシルバーを、めぐみんがデカブライトとデカゴールドを相手取る。

「ふ、心の無い人形には負けません。」

何故なら戦いはカッコ良くノリがいい方が勝つからです！」

本人は知る由もないが、ガンカタの様な動きでデカレンジャー2人を翻弄するめぐみん。

「正進怒涛流、雪月花・斬月乱舞！」

月の満ち欠けに見立てた上級技を繰り出すジョー、4人をうまく固めた所で

「決めろめぐみんー!」

「光に覆われし漆黒よ。夜を纏いし爆炎よ。

紅魔の名のもとに原初の崩壊を顕現す。

終焉の王国の地に、力の根源を隠匿せし者。

我が前に統べよ! 『エクスプロージョン!』」

破壊の嵐を注がれた4人は有無を言わずにレンジャーキーに戻された。

「……おんぶいるか?」

「平気ですけど変身解除した瞬間に気絶します。」

「わかった。」

そして仲間達に遅れを取る訳にいかない俺も本気でいかせてもらう。

メガシルバーにガオシルバー。

2人とも武器は遠近両用の物。

ならば接近戦は逆に剣は防御のみに使い、

銃を逆手に持ってトンファー代わりに。

遠距離戦は平に構えた剣盾にゴーカイガンで。

二対一でも負けない。

没個性で諦めるのが嫌いなだけの俺だが、

一度決めたらやり切る事だけは昔からちよつとしたもんだ！

「貰った！」

ようやく見せたくれた隙を逃さず俺はメガシルバーの胸に深々とサーベルを突き立てた。

メガシルバーの体が崩れないうちに刺さったままのサーベルと手にしたガンにレンジャーキーをセット！

へフア〜イナルウエ〜ブ！

「レッドレイジ！はあああー!!」

銃撃に斬撃を重ね、つがえた矢の様な形のエネルギーを打ち出しガオシルバーを両断！

爆散したガオシルバーはレンジャーキーに戻った！

「バスコ！後はお前だけだ！」

剣を向けるとバスコは一瞬たじろいだが、

「は、はははははははははは！」

どうやら俺はお前らを過小評価してたみたいだ！

『赤の逆賊』改め『赤き海賊団』！覚えておいてやる！」

そう言つてバスコは懐から取り出したポーシヨンの様な物を地面に叩きつける。

中から飛び出た液体はどんな物理法則が働いていたのか、ビル程にまで巨大化し、不気味な人型に変身した。

「うっわなんだありゃ!?!」

「魔王軍の研究成果の1つ。」

巨大戦闘擬似生命体のワテル君だ。可愛がってやれよ?」

魔法陣を展開してその中に消えていくバスコ。

「待て!」

追いかけてようとするがワテルが放った雷撃に怯まされる。

「くっそ!」

「どうしようカズマさん!」

あんなテツカイのどうしよう!」

「俺に聞くな!俺だってどうしようも無いわ!」

「ソウイチ、なんか無いのか?」

「あるぜ。」

「あるの?」

〈5 5 0 1〉

モバイレーツにコードを入力。

空を裂きながら現れたガレオン船の形をした真っ赤なそれは

「空飛ぶ海賊船!？」

「お前から乗り込め！」

俺たち8人揃っての巨大戦。初陣だ！」

最終回直前 a n d 劇場版制作決定スペシャル

総一「やあ皆！

特技はパッチワークのぬいぐるみ作りと嫌がらせ！

七海総一です！えー、今回は最終回直前 a n d 劇場版制作決定スペシャルという事で」

「「いやちよつと待て！」「」

総一「!? どうした皆？」

ジョー「どうしたじゃない！」

ルカ「まだ魔王軍幹部すら一人しか倒してないのに最終回ってどういう事よ！」

ダクネス「しかも劇場版の方の私達パラレルと聞いたぞ！」

めぐみん「もつと爆裂道の素晴らしさを人々に知る為にもこの s s は打ち切るべきでは！」

リア「み、皆さん待ってください！」

和真「俺たちの物語が終わる訳じゃ無いから！」

アクア「ちゃんと続編と言う名の実質シーズン2の

『スーパー戦隊このすばメガフォース』が始まるから！

ジョー「スーパー戦隊」

ルカ「このすばメガフォース？」

ダクネス「ちなみにいつからスタートなんだ？」

リア「来年二月以降です。」

めぐみん「半年以上も間空くじゃないですか！

そんなに期間が空く理由って…ああ！

作者の大学受験ですか！」

総一「そういうわけ。」

アクア「だから忘れないうちに予告して来年ちゃんと書くってわけ。」

ジョー「あーなんだビックリした。」

ルカ「それだったら仕方ないわね。」

ダクネス「それで、今回は最終回直前というより、劇場版の見どころを紹介する感じか。」

リア「そんな感じになりますね。」

総一「それじゃあまずは劇場版のタイトル発表と行きましようか！」

和真「気になるタイトルはくこれだ！」

『i n f i n i t e D R A G O N K N I G H T i n 明日未来

V S スーパー戦隊このすばフォース

結成！仮面戦隊ゴライダー！』

アクア「i n f i n i t e シリーズ最新作にして私たちの初劇場版作品よ！

あ、報告遅れましたが i n f i n i t e D R A G O N K N I G H T i n 明日

未来、完結してから U A が 2 0 0 0 0 を越えました。

ありがとうございます！」

ジョー「それで？この見どころを紹介するって話だが」

ルカ「私らなんも聞かされてないけど？」

リア「そこは私たちがやるんで皆さんは適当にリアクション取ってくれば。」

ダクネス「そ、そうか。」

めぐみん「それじゃあ見どころその 1、お願いします！」

『見どころその 1 邪魔するぜ！仮面ライダーども！』

ダクネス「やはりそこが売りなんだな。」

総一「大勢出て来るけど、メインで共演するのはこの11人だ！」

『網島ケイタ』仮面ライダーダードラゴンナイト

フォンブレイバー7

織斑一夏

フォンブレイバー01

レン・アキヤマ』仮面ライダーウイングナイト

フォンブレイバー3

保登心愛

クロエ・クロニクル』仮面ライダーキヤモ

更識簪』仮面ライダーアックス

石橋健』仮面ライダーインサイザー

芝浦淳』仮面ライダートラスト』

ジョー「なるほど、上から赤、黒、緑、青、橙（黄）、銀と戦隊カラーで揃えたわけか。」

リア「上記の皆さん以外にも顔出しで多くの方々その後が語られます！」

和真「さ、次に俺達、戦隊サイドの見どころを紹介だ！」

ルカ「頼むわよ！」

『見どころその2 変身！新たなレンジャーキー!?』

アクア「この劇場版に登場する私たちは本編とはパラレル設定。

よって持つてるレンジャーキーも全然ラインナップが違うわ!」

めぐみん「例えばどのように?」

リア「それじゃあ特別に劇場版の一部、お見せしちゃいましょう!」

総一「皆、ここはジュウオウジャーだ!」

一同「ゴークイチェンジ!」

〈ジュウオウジャー!〉

総一「大空の王者!ジュウオウイーグル!」

アクア「荒海の王者!ジュウオウシャーク!」

ダクネス「サバンナの王者!ジュウオウライオン!」

和真「森林の王者!ジュウオウエレファント!」

リア「雪原の王者!ジュウオウタイガー!」

ジョー「世界の王者！ジュウオウザワールド！」

ルカ「天空の王者、ジュウオウバード！」

めぐみん「人間の王者！ジュウオウヒューマン！」

総一「動物戦隊！」

一同「ジュウオウジャー！」

和真「いやちよつと待てめぐみんお前のなんだ？」

めぐみん「は、はあ!？」

な、なんですかこのコスプレは!？」

ジョー「そう言えばピンクのキーだけやけに手作り感満載だったな。」

めぐみん「早く言ってくさいよ！」

めぐみん「なんでわざわざこんなシーン選んだんですか!？」

アキラ「仕方ないでしょ？」

プロップは出来ても戦闘シーンはほとんど考えられてないんだから。」

総一「それじゃあ次行くぞ。」

『見どころその3 結成! 仮面戦隊ゴライダー!』

ジョー「仮面戦隊?」

ルカ「ゴライダー?」

アキラ「infinite DRAGON KNIGHTで何回か登場したお助けキャラ達。」

今回は彼らが大きくかわって来るわ。」

和真「彼らの衝撃の正体は……」

4人「……」

和真「見てのお楽しみという事で!」

4人「がくっ!」

総一「さ、最後はちよつと早いけど読者の皆さんにご挨拶して終わろつか。和真「えーお気に入り登録や評価してくれた皆様。」

しなくても読み続けてくれた皆様!」

アキラ「皆様とはしばらくお別れすることになってしまいました!」

ダクネス「必ず戻ってまいりますので、

その折には応援の程、よろしく願います!」

めぐみん「おそらく劇場版の方が先になる都合で、

本編の更新は相当先になる事が見込まれます。」

ジョー「どうか広い心で長い目で待っていてください。」

ルカ「ま、ウチの馬鹿作者が無事に大学受かったらの話だけどね！」

リア「ちよ！そういう事言わないの！

と、兎に角皆さんまた逢う日まで！」

総一「またいつか！」

海賊合体!ハリケンゴークイオー!

1

空飛ぶ赤い海賊船、スカイシップのゴークイマシンに乗り込んだ一同は操縦席に急いだ。

「あつたこつちだ!」

お前らは他のマシンの操縦席探せ!」

俺、ゴークイレッドに変身した七海総一は船の舵を取ると、衝角を敵に向けて体当たりを仕掛ける!

「うわあああ!」

「ちよつと運転が乱暴よ!」

「悪いな!お近くのなんかに掴まってろ!

左舷キャノン砲発射!」

そのまま船体を回転させ、キャノン砲を浴びせる!

「お前からまだか!?!」

「見つけた!今出る!」

モニターで残りのゴーカイジャー四人が入っていくのが見えた。

船の中から入れ子式に空間圧縮で収納されていた他のゴーカイマシンが発進される。

まずルカの乗るトレーラー車型の黄色いマシン、

その中から白に桃色の潜水艦のゴーカイマシン、

更にその中からレーシングカー型の緑色のマシン、

最後にその中から青いジェット戦闘機型のマシンが出る！

「ソウイチ！この後どうする？」

「隙を作って海賊合体だ！」

「カイゾクガツタイ？なにそれ？」

「そっか！スーパー戦隊と言えば巨大ロボですよね！」

「その通りだリア！」

とは言うが五体全てのマシンが揃わないといけない為、

誰かが囷になるつてのは無理でそれだけ難しいが。

「それなら俺たちが！アクア！ダクネス！」

「ええ！」

「おう！」

和真達ハリケンジャーが甲板に出る。

「ハリケンウインガー!」

三人ともグライダーを展開し、飛び立っていく!

「おい無茶すんな!」

「大丈夫ですよ!すぐに撤退しますから!」

「そうよ、私を誰だと思ってるのよ!?!」

「カエルの粘液と不運に愛される元女神だろ?」

「違うわよー!」

そんなコントを続けてるうちに敵に近付いていくハリケンジャー。

「匣はありがたいが不味いんじゃないか?」

ジョーが少し不安げに言った瞬間、ゴーカイジャーのバックルが光る。

「ん?これって……」

試しに上についでるボタンを押してみるとそこからハリケンジャーとゴウライジャーのキーが転送されてきた!

「これって…お前ら!ハンドルにレンジャーキーを差し込める穴がないか?」

「これってもしかして!」

「使ってみるぞ!」

「」「」「レンジャーキーセット!」「」「」

レンジャーキーを捻ると、各ゴーカイマシンの中からグリーンのパーツが飛び出し空中で合体！

「風雷丸！推し参！」

「あ、なんか可愛いロボになりました！」

「あれ可愛いですか？」

出現したグリーンロボ、風雷丸を可愛いと評すリアと微妙な反応を示すめぐみん。

「兎に角それに乗んな！」

「はい！」

ルカの合図に和真たち三人が乗り込むと、

ワテルに素早い動きで攪乱攻撃を仕掛ける。

「今のうちだお前ら！海賊合体！」

「『海賊合体！』」

レーシングカー型とジェット戦闘機型が両腕、

トレーラー車型と潜水艦型が両足に変形し、

船端が二つに割れ頭部の現れたスカイシップに合体！

ジェット戦闘機型の余ったパーツを頭部にのせ

「『完成！ゴーカイオー！』」

頭部に全部のマシンの操縦席が集まり、合体が完了!

「凄い!凄いです!カッコ良過ぎてやばいですよ!

山よりでつかいゴーレムになっちゃいましたよ!

このまま魔王城に攻め入れるんじゃないですか!?!」

「まずは目の前のアイツよ!」

腰にマウントされた二刀の海賊刀を抜き、ワテルに斬りかかる!

「うわ!なんだこの手ごたえの無さ!」

しかしワテルはラテン語で水を意味する名の通りぐにやりと液化し、斬撃で有効打を与えられない。

そして自分が攻撃するときには身体を硬化させダメージを倍増させる!

「その上!なかなか力持ちじゃない、の!!」

伸縮自在の両腕を避けながらルカが言う。

このままではらちが明かない。

「だったら総一さん!こつちと合わせましょう!」

和真たちから通信が来る。

「このフウライマル?の手裏剣攻撃をゴーカイオーのパワーでやれば敵に軟化する隙を与えずに倒せるはずだ。」

「よし来た！やりましたよう！」

「海賊合体！」

「海賊と忍者！」

「1つとなりて！」

「天下御免の手裏剣装備！」

ハリケンジャー3人の合図で

風雷丸が一度バラバラになり、ゴークイオーに収納され、再び展開！

「」

「」完成！ハリケンゴークイオー！推し参！」

「」

ハリケンジャー3人の座席も集まり、8人全員が揃う！

「おお皆！」

「ちよつと狭いけどアンタらより前だから良いわ！」

「そんじゃあ最後、ド派手に決めるぞ！」

「了解です。シノビメダル！」

「レンジャーキー！」

「」セツト！」

「たく！顔を掴むなアクア！」

ん？どうしたんですか総一さん？」

「いやなんでも。1つ考えてた事があつてな。」

「この船の名前だ。」

「船の名前ですか？」

「どうせならゴージャスな名前にしましょうよ！」

例えば、スーパーメガスカイシップとか！」

「やだよそんな安直なの。」

「海賊船爆裂号なんてどうでしょう!?!」

「船が火事になるみたいで縁起悪いな。」

「じゃあさじゃあさ！宝石の名前から取るってのは？」

ワイのワイのと会議が始まる。

けど皆自分の意見を言うばかりで一向に進まない。

(これこれ。これでいいんだよ。

こんな感じが俺たちなんだから。)

「ふーむ。アクアのネーミングはアレだが、そうだな。

いつそカッコ付けずシンプルでいいのかもしれない。

ソウイチ。この船の種類はなんだ？」

急にダクネスから話題を振られた。

しかし種類か。巨大ロボットに変形し空間圧縮機を備えた空飛ぶ船に種類もクソも無いと思うが強いて上げるなら

「宇宙……ガレオン船？」

「ふむ、宇宙ガレオン……ゴーカイジャーだから、

ゴーカイ宇宙、いや!

ゴーカイガレオンなんてどうだろうか？」

「ゴーカイガレオン……」

「いいじゃない!」

「かつこいいじゃん!」

「そ、そうか？」

「なら決まりだな。ゴーカイガレオン、出航だ!」

「」「」「オー!」「」「」